



グローバル時代に世界のため、
日韓が共同でできること

2009年度

第6回日韓大学生国際交流セミナー報告書

主催 お茶の水女子大学グローバル教育センター
お茶の水女子大学グローバル文化学環
同徳女子大学校外国語学部日本語学科



日韓の民族衣装（浴衣、韓服）を着て



草津での合同合宿（セミナーハウスの前で）



合同合宿での発表風景

目 次

第6回日韓大学生国際交流セミナー概要	1
森山新（お茶の水女子大学）	
講演	
韓日両国の民間交流の流れ	6
金榮敏（同徳女子大学）	
グローバル時代に世界のため、日韓が共同でできること	10
森山新（お茶の水女子大学）	
宝塚の魅力について	13
美夏小波（元タカラジェンヌ）	
研究報告	
女性の社会進出	18
多文化共生社会に向けて	27
食品リサイクル	36
日韓における児童のグローバル教育	49
レポート	
同徳企画に参加して	57
新井杏子（お茶の水女子大学文教育学部2年）	
総括	
第6回日韓大学生国際交流セミナーの教育的効果と今後の方向性について	
－多文化理解の観点より－	58
西岡麻衣子（同徳女子大学大学院生）	
第6回韓日大学生国際交流セミナーの事前活動から見た交流の様相と今後の方向性	
－韓国側の児童教育グループの事前活動の観察を通して－	72
申恩浄（同徳女子大学講師）	
第6回日韓大学生交際交流セミナーを振り返って	75
鄭在喜（お茶の水女子大学大学院生）	
総評	
韓日両国の枠を超えた韓日大学生国際交流セミナー	77
金榮敏（同徳女子大学）	
言語と文化を越え、討論により深められた日韓の絆	79
森山新（お茶の水女子大学）	

第6回日韓大学生国際交流セミナー概要

森山新（お茶の水女子大学）

日 時 2009年8月3日～8月8日

場 所 お茶の水女子大学、草津セミナーハウス

参加者 日本側学生20名、韓国側学生14名

指導教員 森山新（お茶の水女子大学）、金榮敏（同徳女子大学）

TA 鄭在喜（お茶の水女子大学）、申恩淨、西岡麻衣子（同徳女子大学）

主 催 お茶の水女子大学グローバル教育センター

グローバル文化学環

同徳女子大学人文科学大学日本語科

8月3日（月）歓迎会

18時より大山寮多目的室で歓迎会が行われた。歓迎会担当は文化グループで、プログラム決定、買い出しなどの準備、司会などの運営を行った。成田矩子さんの司会で始まり、まずは日韓双方の学生がそれぞれ相手の言葉で自己紹介を行った。続いて韓国側は金榮敏先生、日本側は森山が歓迎のあいさつを行った。グループごとに着席し食事を囲みながら語らいのひと時を持った。



8月4日（火）開会式、講演会、日韓文化体験教室

10時半より文教第一会議室で開会式が行われた。司会はTAを務める本学大学院博士後期課程の鄭在喜さん。まず主催のグローバル文化学環を代表して三浦徹先生、同じく主催のグローバル教育センターを代表して佐々木泰子センター長から挨拶があった。記念撮影の後、講演会が行われた。韓国側の金榮敏先生は「韓日両国の民間交流の流れ」と題し両国の交流の現状とあるべき姿について話された。続いて日本側から森山が今回のテーマである「グローバル時代に世界のため、日韓が共同でできること」と題し、心のグローバル

化が必要なことについて述べたあと、日韓の若者がグローバル化の先頭に立とうと訴えた。

午後は、環境グループの担当で日韓文化体験教室が行われた。司会は小島千尋さん。まずはそれぞれが持ち寄った浴衣と韓服を互いに着せ合った。浴衣は飯塚理恵さん、佐藤由奈さんが着付け指導した。続いて日本舞踊研究班、箏曲部の友情出演により、日本舞踊と箏曲という日本文化を体験した。さらに15時半からは、元タカラジェンヌ美夏小波さんをお招きし、宝塚の魅力について講演をしていただいたあと、ラインダンスを体験した。

終了後、翌日の合同実習の打ち合わせをした。



8月5日（水）テーマ別日韓合同実習

今回は4つのグループが、①女性、②環境、③文化、④外国人児童というテーマについて日韓それぞれ事前研究を行いセミナーに臨んだが、この日はそれぞれのグループが日韓合同で実習を行った。女性グループは文京区役所、環境グループは東京リサイクルセンター、文化グループは新大久保の町と韓人会、児童グループは付属小学校帰国児童学級、東京韓国学校を訪れた。

8月6日（木）草津合宿1日目

10時に大学を出発、バスで草津セミナーハウスへ。16時に着いた一行は夕食後、それぞれの事前調査を紹介し、討論を行い、自分たちの主張や提言をまとめ、パワーポイントを作成し、翌日の発表会の準備を行った。

8月7日（金）草津合宿2日目（発表会、パーティー）

9時から研修室 B で発表会を行った。担当は女性グループで、林すず穂さん、飯塚理恵さんが司会を行った。それぞれのグループが日韓合同で、パワーポイントを用いて事前調査、合同実習の内容について紹介し、自分たちの主張や提案を発表した。

午後は湯畑、ゆもみ体験、西の河原通り、西の河原公園、露天風呂など、草津の町と文化を体験した。

夜はセミナーをしめくくるパーティーが研修室 B で行われた。担当は児童グループで、

司会は佐藤由奈さんと篠原明子さん。それぞれのグループが準備した出し物を披露し楽しんだ。最後に金先生が総評を述べた後、韓国の学生から日本の学生へプレゼントが授与された。続いて森山が総評を行い、日本側からは韓国のそれぞれのグループに思いをつづった色紙を授与し、受け取った韓国の学生は思わぬ贈り物に涙を流し、パーティーのムードは最高潮に達した。



8月8日(土) 草津観光3日目(白根山観光)

9時にチェックアウトを済ませ、バスで白根山へ。湯釜、弓池などを散策した。昼食を済ませ、13時半に白根山を発ち、18時池袋へ到着し解散、セミナーの全日程は終了した。



8月9日(日) 同徳企画(鎌倉観光)

8月10日(月) 同徳企画(自由時間)

8月11日(火) 大山寮チェックアウト、帰国の途へ

セミナーのスケジュール

4/13	金	実習紹介（セミナー紹介）
4/27	金	グループ分け、テーマについての話し合い
5/11～		メッセンジャーなどを用いた韓国側との話し合い（テーマ、実習内容、実習場所など） 韓国の言語、文化、日韓関係史についての事前学習
8/3	月	来日・歓迎会（大山寮）
8/4	火	文化体験講座（日韓民族衣装体験、箏曲、日本舞踊、宝塚歌劇）打ち合わせ
8/5	水	テーマ別日韓合同野外実習（東京）①環境 ②文化 ③女性 ④児童
8/6	木	バスで草津へ出発、討論・発表準備（草津セミナーハウス泊）
8/7	金	発表会・文化探訪（草津セミナーハウス泊）、懇親会
8/8	土	文化探訪、バスで東京へ
8/9 ～ 10		同徳自主企画
8/11	火	同徳退寮、帰国（予定）

参加者

日本側学生

班	学籍番号	氏名	所属	学年
環境	0710122	小島 千尋	文教育学部・グローバル文化学環	3年
	0810106	新井 杏子	文教育学部・グローバル文化学環	2年
	0810216	奥住 遥	文教育学部・グローバル文化学環	2年
	0810274	松永 彌有子	文教育学部・グローバル文化学環	2年
児童	0710245	篠原 明子	文教育学部・グローバル文化学環	3年
	0810239	佐藤 香寿実	文教育学部・グローバル文化学環	2年
	0810256	東城 望美	文教育学部・英文学コース	2年
	0710243	佐藤 由奈	文教育学部・グローバル文化学環	3年
	0710167	林 瑛	文教育学部・グローバル文化学環	3年
	0610408	大内 尚子	文教育学部・社会学コース	4年
女性	0710211	植月 綾子	文教育学部・グローバル文化学環	3年
	0810151	林 すず穂	文教育学部・グローバル文化学環	2年
	0710166	杜 怡	文教育学部・グローバル文化学環	3年
	0810107	飯塚 理恵	文教育学部・哲学コース	2年
文化	0710446	李 湊奈	文教育学部・グローバル文化学環	3年
	0810102	明石 薫	文教育学部・グローバル文化学環	2年

	0810110	海老原 麻美	文教育学部・グローバル文化学環	2年
	0810114	大畑 真依	文教育学部・比較歴史学コース	2年
	0810146	成田 矩子	文教育学部・グローバル文化学環	2年
	0810236	近藤 あやか	文教育学部・グローバル文化学環	2年

韓国側学生

班	学籍番号	氏名	専攻	学年
環境	20060262	김정실(金正實)	日本語学科	4年
	20070539	김신희(金信希)	国際経営学科	3年
	20070298	이홍주(李紅周)	日本語学科	3年
児童	20060252	고영인(高領網)	日本語学科	4年
	20070314	최희정(崔希禎)	日本語学科	3年
	20050218	성지은(成智恩)	国史学科	4年
	20060089	이상화(李相和)	国史学科	4年
女性	20050206	방선경(方宣景)	英語学科	4年
	20070251	구민정(具玟廷)	日本語学科	3年
	20080261	김지현(金ジヒョン)	日本語学科	2年
	20080258	김원진(金元珍)	日本語学科	2年
文化	20060978	이주현(李周玟)	食品栄養学科	4年
	20060662	이신향(李信香)	経営学科	4年
	20080285	유지영(柳志英)	日本語学科	2年
	20080303	임탐이(イムタミ)	日本語学科	2年

スタッフ

氏名	所属	役職
金榮敏 (Kim Yeong-Min)	同徳女子大学校日本語学科助教授	指導教員
森山新	本学大学院准教授	指導教員
申恩淨 (Sin Eun-Jeong)	同徳女子大学大学院博士課程	TA
西岡麻衣子	同徳女子大学大学院修士課程	TA
鄭在喜 (Jeoung Jae Hee)	本学大学院博士前期	TA
水口里香	本学グローバル教育センター講師	報告書製作

韓日両国の民間交流の流れ

金榮敏（同徳女子大学）

近年、日本における「韓流」のブームや韓国における和食、Jドラマ、Jポップのブームなどで象徴されるように、韓国と日本、両国間の民間交流は目覚ましい進展を見せている。ここでは具体的な統計資料を通して、韓日両国の民間交流の流れを簡単に紹介し、両国民間交流のさらなる進展のために韓日大学生にできることについて考えてみたい。

I. 韓日間の民間交流の流れ

1) 出入国者数：韓日間の出入国者数の推移について見てみると、下の図1から分かるように1985年に80万人に満たなかった出入国者数が1995年には約270万人と約3.4倍に増え、2004年に

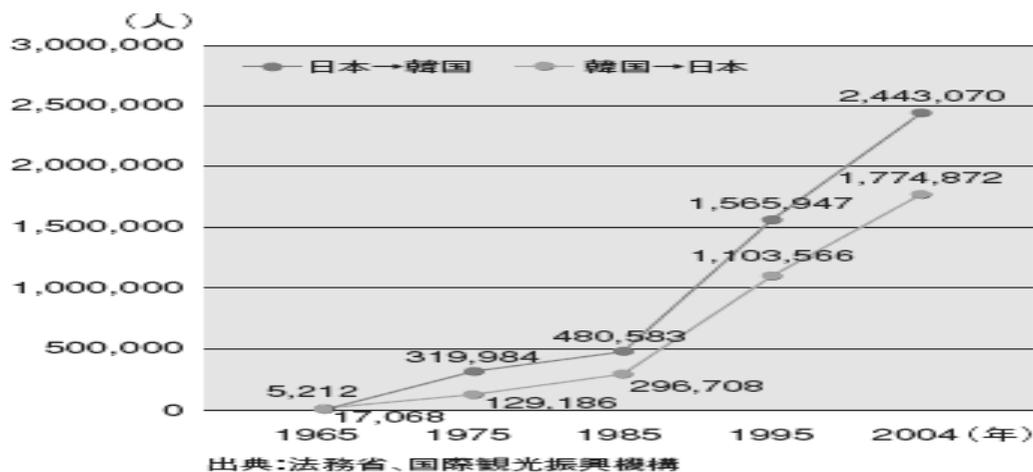


図1 韓日間の出入国者数¹

は約420万人と約5.3倍に増加している。図には出ていないが、2005年には「韓日友情の年」であったにもかかわらず、両国間の外交上の問題などが絡んで約410万人と往来が減っているが、2008年には約480万人の往来があった。この25年間で両国間の出入国者数は約6倍と著しく増加したことになる。このような両国間の往来の増加が「韓流」のブームを生み、和食、Jドラマ、Jポップのブームを生んだのであり、また「韓流」のブームや和食、Jドラマ、Jポップのブームがさらなる両国間の往来の増加をまねくのであろう。

2) 留学生数：韓国から日本への留学生数は1980年に680人にすぎなかったが、2004年には15,533人に達している。これは同年度の日本における外国人留学生数（117,302人）の13.2%にあたるものである。また、同年度に韓国から海外へ留学に行った学生数（187,683人）の8.3%にあ

¹ この資料は平成18年度版（2006年）『外交青書』からの引用である。以下、引用先を明記しない資料は同様である。

たる。このように韓国からの留学生数がかなりの数値に上っているのに対し、日本から韓国への留学生数は2000年代に入っても2000年に1,692人、2004年に2,232人とそれほど多くない。2004年の日本人留学生数は同年度の韓国への外国人留学生数（82,945人）の2.6%にとどまってい

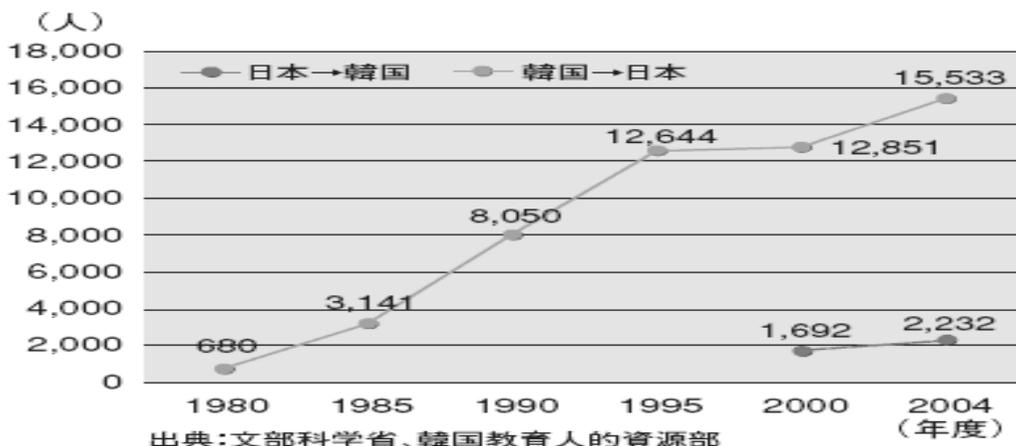


図2 留学生数の推移

る。このような傾向は韓日間のワーキングホリデー査証数からも確認できる。ワーキングホリデーとは、二国間の協定に基づいて、青年（18歳～25歳または30歳）が異なった文化の中で休暇を楽しみながら、その間の滞在資金を補うために一定の就労をすることを認める査証及び出

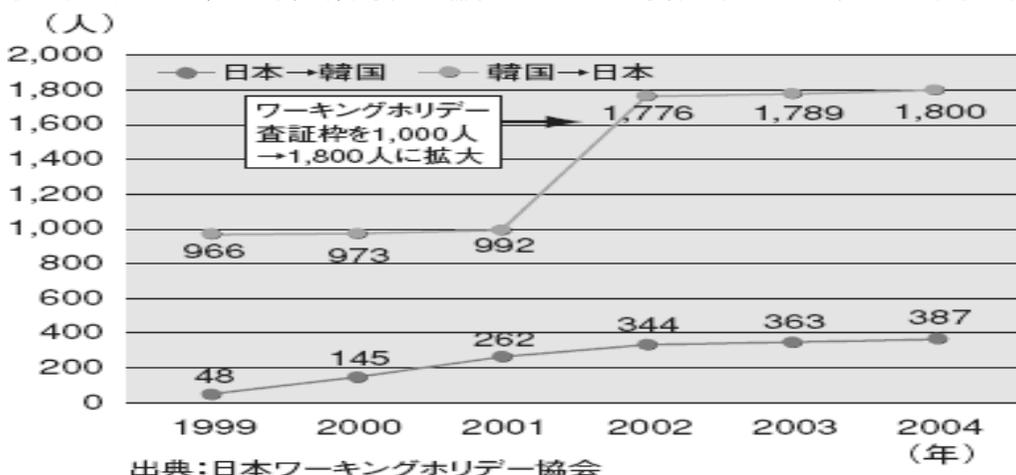
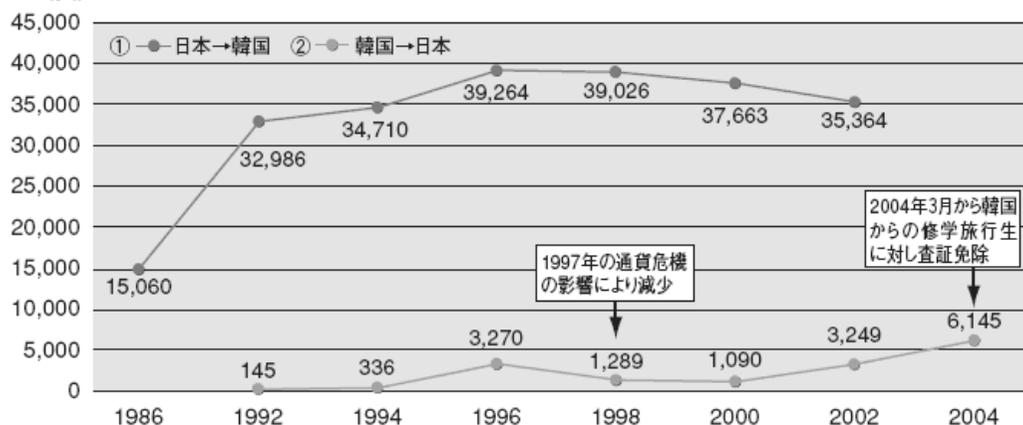


図3 ワーキングホリデー査証数

入国管理上の特別な制度である。ワーキングホリデーは語学研修の一つの方法としてよく利用されているが、ワーキングホリデー査証数においても韓日の間には大きな開きがある。例えば、2004年に韓国から日本へ渡っている青年数は1,800人であるのに対して、日本から韓国へ渡っている青年数は387人に過ぎない。観光や大衆文化のブームなどの影響で韓日間の往来が活発になっている中で、留学や語学研修などにおいては韓日の間でかなりの差が見られる。

3) 修学旅行生数：図4から分かるように、日本から韓国への修学旅行生数は、90年代に入ってからかなり増加している。一方、韓国では海外への修学旅行が一般的ではなかった影響もあって、1992年から日本への修学旅行が始まっている。1992年から2004年までの推移を見ると、約42倍に急増していることが分かる。査証免除などの制度的整備の影響が大きいと思うが、小・中・

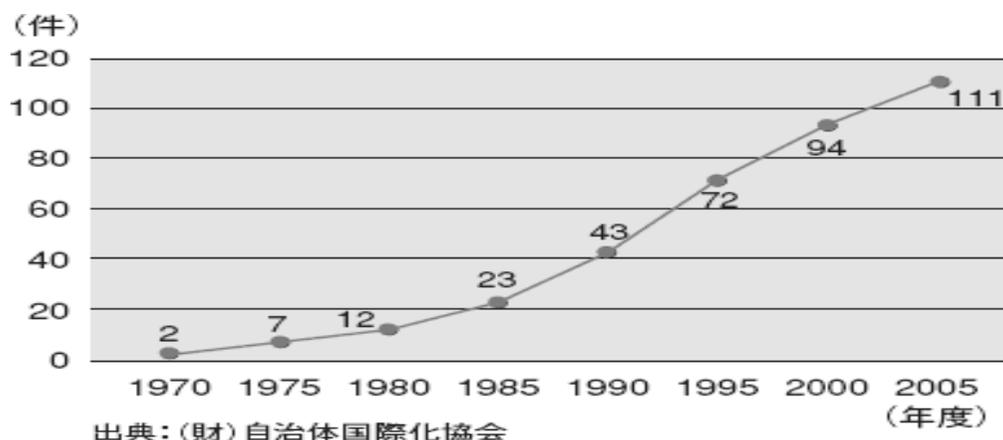


出典：文部科学省、国際観光振興機構
 (注1) 2004年の日本→韓国は未集計 (注2) ①日本→韓国は年度 ②韓国→日本は年

図4 修学旅行生数

高校生における日本に対する関心が高まったことを示唆する数値であると言える。

4) 姉妹都市提携数・姉妹校提携数：韓日間の姉妹都市提携数の推移は図5に示したとおりである。1980年以降に徐々に増え、2005年現在111件の提携が結ばれている。



出典：(財)自治体国際化協会

図5 姉妹都市提携数

また、韓日姉妹校提携数は、文部科学省の「平成18年度高等学校等における国際交流等の状況について(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/11/07103102.htm)」によると、2007年5月1日現在、公立・私立・国立を合わせて、日本の高等学校215校、中学校72校、小学校69校が

韓国の学校と姉妹校提携を結んでいる。提携先別順位から見ると、3、4位に入る数値であり、上位に入っているが、1、2位がアメリカやオーストラリアであることを考えると、距離的に一番近い韓国との提携が多少遅れているとの解釈もできる。

5) 大学・大学院・研究所などの交流協定締結数：文部科学省の「大学等間交流協定締結状況調査(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/09/07090416/002.htm)」によると、2006年10月1日現在、韓日大学等間交流協定締結数は1,467件に上っている。日本の大学・大学院・研究所などが海外の大学等と結んでいる交流協定締結数(13,484件)の10.9%を占めている。韓国の大学・専門大学・大学院の総数が1,390²であることを考えると大抵の韓国の大学等が日本の大学等と交流協定を締結していることになる。

II. 提言

以上見てきたように、韓日両国の間では民間交流が活発に行われてきている。両国間の出入国者数、留学生数、修学旅行生数、姉妹都市提携数・姉妹校提携数、大学等の交流協定締結数はこの20年間急激に増えている。しかし、韓日間の民間交流が常に順調に拡大してきたわけではない。両国間の歴史問題や領土問題など政治的・外交的要因によって紆余曲折を経てきたのも事実である。そこで、両国間の政治的・外交的・歴史的問題などに影響されない充実な民間交流を実現させるために、韓日大学生にできることについて考えてみたい。

まず、交換留学、語学研修、ワーキングホリデーなどの積極的な活用があげられる。こういった長期間にわたる個人的な交流を通して相手国に対する理解をより深めることができるであろう。また、個人的な交流と集団的な交流の特性を併せ持った、同徳女子大学とお茶の水女子大学の「韓日大学生国際交流セミナー」のような交流に積極的に参加することも必要であろう。相手国に対する理解を深め、さらに同年輩の若者同士には分かち合えるものがたくさんあるということに気づくことによって、人と人との親密な関係を築きあげていくことができるであろう。さらに、国家意識・地域意識を中和させるような、共通の目標を持った交流を増やしていくべきであろう。今回の「第6回韓日大学生国際交流セミナー」もその一つの試みである。「地球のために我々ができること」という共通のテーマの下で、一緒に調査を行い、議論しあうことで、韓国人、日本人というのではなく、グローバル時代に生きる一人の世界人という自覚が芽生え、仲間としての信頼が生じることを期待している。

以上、韓日両国の民間交流について見てきたが、今後量的な拡大と共に質的にも一層進展していくことを心より願う。

² 韓国教育科学技術部の統計資料(http://www.mest.go.kr/me_kor/inform/science/science/general/index.html)からの引用。2007年度の数値である。

グローバル時代に世界のため、日韓が共同でできること

森山新（お茶の水女子大学）

このセミナーも早いもので、6回目を迎える。日韓セミナーが会を重ねる中で思い起こすのはかつての朝鮮通信使である。実は朝鮮通信使は江戸時代以前からあったそうだが、豊臣秀吉が当時の朝鮮を侵略し、中断した。秀吉の朝鮮侵略で両国の関係は最悪になった。

その後江戸幕府を開いた徳川家康は両国関係を改善すべく、朝鮮に使者を遣わし、朝鮮通信使は再開した。通信使は国を挙げて迎えられ、その回数は10数回にわたった。

明治に入り、両国関係は再び悪化、日清、日露戦争を経て、1910年ついに日本は韓国を植民地化してしまった。そして悲しくつらい時代を経て、1945年、韓国はついに解放の日を迎える。これを韓国では「光復節（クァンボクチョル）」と呼んでいる。

しかし、両国関係の修復には時間を要した。1965年に日韓国交正常化が実現しても、両国関係はよくならなかった。それはなぜであろうか。いくつかの理由が考えられよう。第一にドイツのように政権が交代せず、過去に対する正当な謝罪と清算が行われなかった点を挙げることができる。欧米ではつい最近、いくつかの国で日本の従軍慰安婦に対する非難決議が採択されていることはそれを物語っている。第二に「徳川家康」のように関係改善のために努力する人物が現れなかったことも原因であろう。であるとすれば、私たち若者が両国の関係を変える先頭に立ち、両国の関係を変えるべきであろう。

では具体的にどうしたらいいか。まず私たちの心がグローバル化することである。確かにグローバル化には正の部分と負の部分とがある。しかし「心のグローバル化」は正、つまり絶対に必要なことである。

かつて同徳女子大の孫総長が本学を訪れた際に、「韓国は寛大さ、日本は謙虚さを」と語られたことがある。今までの国際関係は国益優先が大前提であった。しかしそれでは限界があると気づき始めた世界各国は徐々にグローバルな視野に立ち始めて問題解決に取り組み始めた。最近の地球温暖化への取り組みなどがそれである。しかし依然、その背後には「自国の利益」が見え隠れしている。言うならば、まだ心のグローバル化ができていないということである。でも若者なら、自国の利益を越え、それができると信じている。

心のグローバル化を果たすためには、第一に、相手の立場に立って物事を見つめること、第二に一段上の視点に立って物事を見つめることが重要である。日韓関係を兄弟関係にたとえてみたい。歴史的に考えれば韓国が兄で日本が弟であろう。ここで韓国は兄貴のメンツを立てたがるお兄さんであり、日本は兄貴を兄貴とも思わない生意気な弟であったということができる。これで兄弟関係が仲良くなるはずはないであろう。

この兄弟の対立を越えるにはどうしたらよいか。それぞれが相手の立場に立つことが重要であろう。またそれを可能にするためには、親の立場に立つことが重要である。親から見ればどちらも愛する息子であり、対立が起きたのにはどちらにも非があることが見える。

心のグローバル化はまさにこれを意味する。

最近「文化相対主義」という言葉が叫ばれる。自文化中心主義に対する言葉で、多文化共生には必要な考え方とされている。しかし人間はそれぞれある文化の中で育ち、そのプロセスの中で、自然と自文化に愛着を持つようになった。これは自然な適応である。しかし、その一方で、異文化には愛着を持ちにくくなってしまふ。また異文化を自文化の尺度で計ってしまうことにもなる。その結果、何で兄貴はこうなんだ、または何で弟はこうなんだ、ということになる。相手の立場に立ち、親の立場に立つことが必要になる。

これを可能にするためには何が必要であろうか。愛情であろう。兄弟や親の愛がこれを可能にしてくれる。「文化相対主義」も頭で「全ての文化にはそれぞれ価値がある」と考えるだけでは限界がある。ややもすれば無関心で終わることもあるからである。

ではどうしたら愛がめばえるであろうか。人は愛し合うと、あばたもえくぼ、全てがよく見え、欠点が見えなくなる。だから異文化に接する場合にも、相手の理解できない部分はひとまず置いて、まずは、相手を持っていて、自分にはない、すばらしい面を探そう。そしてそれを尊敬し、学ぼう。そこに愛着が生まれ、尊敬が生まれる。互いに相手のよいところを探してみよう。日韓はお互い、自分にはないよいところをたくさん持っている。

今回のテーマは「グローバル時代に世界のために日韓が共同でできること」だ。もし「心のグローバル化」により、我々が過去を克服できたとすれば、今まで対立に費やしてきた思いと力を日韓、そして世界の共生のために用いよう。そうすれば両国の悲しい過去を越えるだけでなく、共生のグローバル社会を築く第一歩となるであろう。ここには中国の留学生もいるので東アジアの共生も考えよう。

今回のセミナーでは4つのテーマを掲げている。

第一に「女性の社会進出」の問題。これは日韓ともに遅れた課題である。女性学を重視する同徳女子大と、ジェンダースタディーズを重視するお茶大とがともに力を合わせて乗り越えるにふさわしいテーマである。

第二に「外国人児童」の問題。グローバル化でいつも被害を被るのがマイノリティ、弱者である。その一つが児童である。文化のはざままで苦しんでいる児童の問題を考え、代案を示そう。

第三に「環境問題」。グローバル時代にあつて最も議論が進んでいるのがこの問題であろう。しかし先ほど述べたように国益優先を越えられず、解決に至っていない。私たちなりの回答を示し、世界に発信しよう。

第四に「多文化共生」の問題。今まで日韓両国は世界のスタンダードに比べると比較的単一性の高い社会を築いてきた。その日韓ですら急速にグローバル化が進んでいる。多文化共生はグローバル化が目指すものの一つである。理想と現実を見据えながら、考察を深めてほしいと思う。

こうしたテーマの一つ一つに日韓を代表する皆さんが、調査し、実習し、討論し、考察し、その答えを世界に向けて発信しよう。今回のセミナーの結果が、国連決議より、日韓

首脳会談より、六か国協議よりも歴史的な一歩となることを信じたい。

宝塚の魅力について

美夏小波(元タカラジェンヌ)

「宝塚歌劇団・宝塚音楽学校」をご存知でしょうか。どこか特殊な世界というイメージがあるかも知れません。本日は、宝塚歌劇を気楽に楽しみながら、それに関する広く文化的な教義、知識を身につけて頂きたいと思っています。

宝塚歌劇だけが、女性のみによる歌劇として存在しているのでしょうか。

タカラヅカが、設立された当時は、日本各地に少女歌劇団があったそうですが、残念ながら現在では残ってはいないようです。

宝塚歌劇団による公演は、当然ながら劇団員によって行われています。

ゲストで、芸能人やタレントが出演するようなことはありません。その劇団員を「タカラジェンヌ」と呼びます。

「タカラジェンヌ」とは、特定の一人の人を指す表現ではありません。私自身も団中に「劇団員」という呼び名で呼ばれたことはありませんし、「タカラジェンヌ」という呼び名で呼ばれると恥ずかしい気持ちになったりしました。

それでは、どんな呼び名で呼ばれば、しっくりいったかと申しますと、やはり「生徒」・「生徒さん」という呼び名です。どうして「生徒さん」と呼ばれるのがしっくりくるかといえば、やはり宝塚歌劇団へのはじめの一步を踏み入れるのは、宝塚音楽学校だからです。

宝塚歌劇団に入るには、音楽学校に入学し、卒業をした者にしか劇団に入れないし、舞台にも立てません。ということは、音楽学校に入学した者全員が、宝塚歌劇団の舞台に立つという一つの目標に向かって学んでいるということです。音楽学校が大学でもないのに、入学のための競争率が高い、いわば難関であり、全国の女の子の憧れであることも、ご存じかも知れません。その点は、皆さんもあこがれの女子大に入学された方々なので、同じかも知れません。

自分の意志で、入学試験を受け、自分の意志で入学をする。それなので、音楽学校に入ったとたん「させていただきます」という言葉を、半強制的に使います。「～させて頂く」この言葉を何度も繰り返すうちに、自分がやりたいから入ったという、自覚と責任が備わってきます。噂話で、躰・規律の厳しさから究極の花嫁学校のように思われている方もいらっしゃいます。

私事ですが、音楽学校の入学試験の面接の中で志望理由を、「いいお嫁さんになりたいからです。」と答えなさいと親にあらかじめ言われていて、そのとおりに言いましたところ合格しました。

話を元に戻しますが、そこからタカラヅカには、「清く・正しく・美しく」の伝統が生まれてくるのかもしれませんが。

では、音楽学校の世界について、少しお話ししましょう。

音楽学校は、予科・本科の二年制です。予科生とは、宝塚音楽学校の1年目の生徒を言い、この学年で花嫁修業のような習い事や厳しい作法しきたりなどを学びます。

本科生とは、宝塚音楽学校の二年目の生徒を言い、予科性の面倒もマンツーマンで見るという役割もあるのです。

2年間で、15～18歳の親元で、普通に暮らしていた女の子が、ミュージカルの舞台人、それも和物にも対応できる人材になるというのは、並大抵のことではありません。タカラヅカでの芸事の習得や、芸事を教えて頂く為の礼儀作法、団体芸術を披露するための人間関係を含めたノウハウを、徹底的に学ぶのが1年生の予科生。二年生の本科生になると実践的な経験や、初舞台を目指しての訓練の毎日。自主稽古を含め、朝6：00～夜まで、学校にいるような生活です。

皆さんは、タカラヅカの本拠地がどこにあるのか、ご存知ですか。兵庫県宝塚市にあり、関西地方の中でも、大阪・神戸よりも、山と緑に囲まれたのどかな所です。全国から音楽学校に入る生徒たちが集まってくるため、ほとんどの生徒たちは皆、劇場・音楽学校の近くにある寮に入ります。今、この教室にも、たくさんの留学生の方がいらっしやると思います。親元から離れて、自分の慣れ親しんだ土地を離れて、ホームシックになりませんでしたか？そこで、入学前までは普通にキヤーカーしていた女の子たちが、ある種の隔離された生活に入ります。年に一度くらいは、実家に戻りますが、ほとんど宝塚市の山の中で寝と芸事に明け暮れる2年間です。いま世の中で、どんなものが流行っているのか、どんな人が人気があるのか、など知らないまま、2年間の時が流れます。私もある時代の2年間だけ、流行りの曲、タレントさんがぼっかりと抜けている2年間があります。

そうやって2年間、自分の責任で集団芸術というものを学んでいきます。人に迷惑をかけず、素早く行動する術、また、舞台という集団でやり遂げなければいけない中での、仲間の大切さとか、伝統を継承していくことなどを学んでいきます。

ここから本題に入ります。

世界の中のタカラヅカという文化、日本の中でのタカラヅカという文化、今回の講演の中でのテーマでもあります。

100年の歴史の中で息づいているタカラヅカのことを、7年間の時しかその中にいなかった私が、お話しするのは、少しおこがましいのですが、私なりに考えてみました。

タカラヅカは、宝塚少女歌劇の名称で1914年に幕を開けました。それから、約100年の間、根底にある「清く・正しく・美しく」の教えのもと創設者 小林一三千世以来の伝統を引き継ぎ、タカラヅカのホームグラウンドである劇場をもち、宝塚専属の演出家・作曲家・振付師・お衣装部など全てが一つの作るために丹精込めて育て上げ、守り続けてい

るカンパニーだからこそ、他にあるミュージカル劇団・新劇の劇団などと一緒に論じることの出来ない世界でただ一つのユニークな存在です。

私は、評論家ではありませんし、難しい本を書いている作家でもありませんので、的確に説明することは、できませんが、実際に宝塚歌劇団の中で生きてきて、舞台に立っていた経験から皆様にお伝えしていこうと思っています。

宝塚歌劇団は、皆さまご存じのとおり女性ばかりの劇団です。したがって、男性の役も女性が演じることになります。ある女性の方から、「女性が男性を演じるなんて気持ちが悪くはないですか？」との質問を受けました。

どうして、男性の役も女性が演じるのか？

男役というものが、タカラヅカにとってどのような位置づけであるのか？タカラヅカのルールは、昨日・今日出来上がったものではなく、100年の歴史の中に根をおろし、受け継がれて出来上がったものです。

タカラヅカの男役が、世の女性たちが夢見る「こんな男性がいたらいいな、素敵だな」を、また男性達が望む「こんな控え目な女性がいたらいいな。」という「癒し」を提供し続けることが、宝塚歌劇なんだと思います。そこには一日で完成することが出来ない、経験・訓練が必要となります。

女性が男性を演じるタカラヅカでは、常に男役はヒーローです。

主役のヒーローを演じるためには、並大抵の努力ではできません。男役として一人前になるには、10年かかると言われています。歌・踊り・芝居に立ち居振る舞いの美しさが求められ、ダンディでスマートな男性と美しく清潔な女性の物語を創っていくのです。男役と女役が並んだ時に、「絵になる」様にするために、日々の努力と先輩たちからの伝承が歴史として受け継がれていきます。「先輩たちからの伝承」と申しまして、手取り足取り教えてもらうわけではありません。お稽古場での先輩たちの立ち姿を自分の目で見て、学んでいくのです。

先ほども申しましたが、宝塚歌劇団は、演出家・音楽家・装置・照明・音響・小道具・大道具など劇団専属のスタッフがいる環境の中で、実際に舞台上で演じる人を育てるから、ひとつの劇団で色々なジャンルの作品を、上演することができるのです。それらは、フランスにあるようなものでも、アメリカにあるものとも違う、独自の文化、「日本の歌劇」であり、日本のレビュー、オリジナリティー溢れるエンターテインメントなのです。

ここからは、トップスターを中心としました歌劇団独自の、しきたり・文化をお話ししたいと思います。

タカラヅカの良いところは、星のように輝くトップスターを中心としたピラミッド式の生徒たちの集団で、主役を演じるトップスターが、一番格好良く見えるように描かれた台

本と作品がある所です。また、脇を固める人や、次に期待されるホープにもスポットが当たるように、それぞれのスターの特技や特徴にあてはめて作品ができていて、例えば歌が、特に上手なトップスターの作品には、歌のソロが多かったりして、より一層スターが輝いて見え、観客を飽きさせません。

どのような方が、トップスターになるのかといえば、「なるべくした人になる」のです。現実とはかけ離れていますが、世の中の女性たちの理想とする男性像と、美しい女性像を演じ、きらびやかな舞台上、西洋文化を上手く取り入れた独自の文化、「清く・正しく・美しく」のモットーを忘れない、清楚で品のある舞台を創りあげていきます。

余談ですが、「すみれコード」というものがあります。これは、宝塚歌劇団の中でのタブーのことです。「清く・正しく・美しく」をモットーとするタカラヅカに相応しくない、夢を壊すような下品な表現を避けることを言います。劇やショーの中の演出面においても、大きく胸のあいている男役のシャツや、娘役のドレスにしても、生々しさや見た目のいやらしさを避けたり、セリフなども下品な言い回しを避けています。

この様に、作品を創るところからタカラヅカらしさを前面に出すやり方が、100年近く受け継がれているのです。

以上のことから、タカラヅカとは時代が様々に変わるなか、100年近くもの間、変わることのない学校システム上下関係の厳しさ、同期生の絆、未婚の女性のみ劇団、トップスターを中心とした作品づくりなどが、受け継がれていくことで、他の劇団にはない独特の文化を保っているいわれなのかもしれません。

最後になりましたが、私が花組時代、5つ学年上の先輩に〇〇さんがいらっしゃいました。まだ、〇〇さんもお若くて、花組の10人位のグループで地方のイベントにまわることもありました。徳島県の鳴門で、阿波踊りを踊ったこともありました。何かの時に〇〇さんが私に、「綾子、劇団にいる時に誰でもチャンスが3回くる。そのチャンスはいつ来るかわからないし、誰も教えてくれない。自分で気付くものだ。そのチャンスをきづいて、活かしかれたら、又、次のステップにいける。」と残念ながら、私は3回のうち1回しかチャンスに気付くことができませんでした。ただ、この言葉は、タカラヅカ以外の世界でも同じだと思っています。

退団しても、時々この言葉を思い出します。退団してからのチャンスは、今のところ気付いているような気がします。

皆様にもきっと、チャンスが3回訪れると思います。

どうか、そのチャンスに気付くことを願って私の話を終わらせていただきます。



写真；美夏先生のご指導のもと、「ラインダンス」に挑戦する学生たち

女性の社会進出



植月 綾子	j0y_0719@yahoo.co.jp
杜 怡	g0710166@edu.cc.ocha.ac.jp
飯塚 理恵	fanzhong-philosophy@woody.ocn.ne.jp
佐藤 香寿実	g0810239@edu.cc.ocha.ac.jp
林 すず穂	g0810151@edu.cc.ocha.ac.jp
パン・ソンギョン	sunkyungis@hanmail.net
ク・ミンジョン	kmj_0411@naver.com
キム・ジヒョン	sho0704@naver.com
キム・ウォンジョン	aquamarin-mizu@hanmail.net

1. はじめに

「夫が外で働き、妻は家庭を守る」という伝統的な男女の役割分担が長い間当たり前のこととされてきた日本の社会だが、近年は様々な価値観が受け入れられるようになってきた。男性と同じようにバリバリと働き、結婚後も子育てと両立させながらキャリアを重ねていく女性も、特別な存在ではなくなった。だが、結婚後専業主婦として家庭に入る傾向が強まり、男女雇用の不平等などな問題により、日本の女性社会進出度が高いとはとてもいえない。

◇女性社会進出とは

女性の社会進出度低い原因の一つは、女性の社会進出イコール女性が管理職につとめることという固定観念だと思われる。

実際、我々が考える女性の社会進出とは、女性が家庭だけではなく、社会に対しての関心を示し、社会活動（仕事以外も含め）へ参与することである。

◇ 支援すべき女性がスムーズに「社会進出」するには、もちろん女性自身の努力が必要だが、支援も必要である。まず、政府など公的機関の支援。例えば、男女雇用機会均等法などの改善。また、男性の理解、受け入れも不可欠である。そして、マスコミなどのメディアの宣伝など。

◇大学生である我々がすべきこと

昔と比べれば女性の社会進出は進んでいるが、なぜ欧米とまだ大きな差があるだろう。女子大生であるからこそ、それを課題として取り組む必要性を感じている。

したがって、この日韓セミナーを機に、日本、韓国と中国の学生が集まって、各国の女

性社会進出事情を取り上げて調べ、合同調査し、そしてディスカッションを行い、女性社会進出という社会問題を改善することが望ましいが、無論簡単には解決できない。したがって、より新たな意見を出し、社会全般の声を聞かせてもらい、大学生だからこその影響力を与えることが今回の実習の目的だと思われる。

2. 事前調査

表1 アンケート項目

I. 以下の質問で当てはまるほうに○をつけてください。						
1	結婚したい	はい	いいえ			
2	結婚しても仕事は続けたい	はい	いいえ			
3	子どもを産んでも仕事は続けたい	はい	いいえ			
4	子供を生み育てたいと思う	はい	いいえ			
5	二人以上子供を持ちたいか	はい	いいえ			
6	夫と一緒に育児したい	はい	いいえ			
7	育児休暇は男性もとるべきである	はい	いいえ			
8	家事は夫と協力して行いたい	はい	いいえ			
9	専業主夫はありか	はい	いいえ			
10	男性より女性が家事をするべきだと思う	はい	いいえ			
11	男性と渡り合ってバリバリ働きたい (a) or お茶汲みやコピーなどの事務がいい (b)	a	b			
12	就職したら定年まで働きたい	はい	いいえ			
13	母親は仕事をしている (専業主婦でない)	はい	いいえ			
14	父親はよく家事をする	はい	いいえ			
15	自分の娘にはキャリアウーマンになってほしい	はい	いいえ			
II. 当てはまる番号に○をつけてください。						
5 : とてもそう思う・よくそう感じる / 4 : まあまあそう思う・たまにそう感じる / 3 : どちらとも言えない						
2 : あまりそう思わない・あまり感じたことはない / 1 : 全くそう思わない・全く感じたことはない						
16	今の社会は女性が働きづらい社会だと思うか	5	4	3	2	1
17	学校教育で女子は差別されているなど感じたことがあるか	5	4	3	2	1
18	家庭生活で女性は差別されているなど感じたことがあるか (弟や兄との待遇の違いなど)	5	4	3	2	1
III. 自由にお書きください。						
19	これからの女性の社会進出に対して社会にほしいものは何ですか？					

表2 アンケート結果（日本側）

アンケート結果

<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td style="width: 5%;">1</td><td style="width: 20%;">81</td><td style="width: 20%;"></td><td style="width: 20%;"></td><td style="width: 20%;"></td><td style="width: 15%;">17</td></tr> <tr><td>2</td><td>96</td><td></td><td></td><td></td><td>4</td></tr> <tr><td>3</td><td>91</td><td></td><td></td><td></td><td>9</td></tr> <tr><td>4</td><td>51</td><td></td><td></td><td></td><td>49</td></tr> <tr><td>5</td><td>98</td><td></td><td></td><td></td><td>1</td></tr> <tr><td>6</td><td>73</td><td></td><td></td><td></td><td>25</td></tr> <tr><td>7</td><td>95</td><td></td><td></td><td></td><td>5</td></tr> <tr><td>8</td><td>99</td><td></td><td></td><td></td><td>0</td></tr> <tr><td>9</td><td>47</td><td></td><td></td><td></td><td>53</td></tr> <tr><td>10</td><td>14</td><td></td><td></td><td></td><td>85</td></tr> <tr><td>11</td><td>96</td><td></td><td></td><td></td><td>4</td></tr> <tr><td>12</td><td>78</td><td></td><td></td><td></td><td>22</td></tr> <tr><td>13</td><td>57</td><td></td><td></td><td></td><td>43</td></tr> <tr><td>14</td><td>39</td><td></td><td></td><td></td><td>60</td></tr> <tr><td>15</td><td>96</td><td></td><td></td><td></td><td>4</td></tr> <tr><td>16</td><td>23</td><td></td><td>48</td><td>22</td><td>6</td></tr> <tr><td>17</td><td>6</td><td>32</td><td>35</td><td>19</td><td>8</td></tr> <tr><td>18</td><td>11</td><td>25</td><td>22</td><td>17</td><td>25</td></tr> </table>	1	81				17	2	96				4	3	91				9	4	51				49	5	98				1	6	73				25	7	95				5	8	99				0	9	47				53	10	14				85	11	96				4	12	78				22	13	57				43	14	39				60	15	96				4	16	23		48	22	6	17	6	32	35	19	8	18	11	25	22	17	25	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>1</td><td>結婚したい</td></tr> <tr><td>2</td><td>結婚しても仕事は続けたい</td></tr> <tr><td>3</td><td>子どもを産んでも仕事は続けたい</td></tr> <tr><td>4</td><td>子供を生み育てたいと思う</td></tr> <tr><td>5</td><td>二人以上子供を持ちたいか</td></tr> <tr><td>6</td><td>夫と一緒に育児したい</td></tr> <tr><td>7</td><td>育児休暇は男性もとるべきである</td></tr> <tr><td>8</td><td>家事は夫と協力して行いたい</td></tr> <tr><td>9</td><td>専業主夫はありか</td></tr> <tr><td>10</td><td>男性より女性が家事をするべきだと思う</td></tr> <tr><td>11</td><td>男性と渡り合ってバリバリ働きたい (yes) or お茶汲みやコピーなどの事務がよい (no)</td></tr> <tr><td>12</td><td>就職したら定年まで働きたい</td></tr> <tr><td>13</td><td>母親は仕事をしている(専業主婦でない)</td></tr> <tr><td>14</td><td>父親はよく家事をする</td></tr> <tr><td>15</td><td>自分の娘にはキャリアウーマンになってほしい</td></tr> <tr><td>16</td><td>今の社会は女性が働きづらい社会だと思うか</td></tr> <tr><td>17</td><td>学校教育で女子は差別されているなど感じたことがあるか</td></tr> <tr><td>18</td><td>家庭生活で女性は差別されているなど感じたことがあるか(弟、兄)</td></tr> </table>	1	結婚したい	2	結婚しても仕事は続けたい	3	子どもを産んでも仕事は続けたい	4	子供を生み育てたいと思う	5	二人以上子供を持ちたいか	6	夫と一緒に育児したい	7	育児休暇は男性もとるべきである	8	家事は夫と協力して行いたい	9	専業主夫はありか	10	男性より女性が家事をするべきだと思う	11	男性と渡り合ってバリバリ働きたい (yes) or お茶汲みやコピーなどの事務がよい (no)	12	就職したら定年まで働きたい	13	母親は仕事をしている(専業主婦でない)	14	父親はよく家事をする	15	自分の娘にはキャリアウーマンになってほしい	16	今の社会は女性が働きづらい社会だと思うか	17	学校教育で女子は差別されているなど感じたことがあるか	18	家庭生活で女性は差別されているなど感じたことがあるか(弟、兄)
1	81				17																																																																																																																																												
2	96				4																																																																																																																																												
3	91				9																																																																																																																																												
4	51				49																																																																																																																																												
5	98				1																																																																																																																																												
6	73				25																																																																																																																																												
7	95				5																																																																																																																																												
8	99				0																																																																																																																																												
9	47				53																																																																																																																																												
10	14				85																																																																																																																																												
11	96				4																																																																																																																																												
12	78				22																																																																																																																																												
13	57				43																																																																																																																																												
14	39				60																																																																																																																																												
15	96				4																																																																																																																																												
16	23		48	22	6																																																																																																																																												
17	6	32	35	19	8																																																																																																																																												
18	11	25	22	17	25																																																																																																																																												
1	結婚したい																																																																																																																																																
2	結婚しても仕事は続けたい																																																																																																																																																
3	子どもを産んでも仕事は続けたい																																																																																																																																																
4	子供を生み育てたいと思う																																																																																																																																																
5	二人以上子供を持ちたいか																																																																																																																																																
6	夫と一緒に育児したい																																																																																																																																																
7	育児休暇は男性もとるべきである																																																																																																																																																
8	家事は夫と協力して行いたい																																																																																																																																																
9	専業主夫はありか																																																																																																																																																
10	男性より女性が家事をするべきだと思う																																																																																																																																																
11	男性と渡り合ってバリバリ働きたい (yes) or お茶汲みやコピーなどの事務がよい (no)																																																																																																																																																
12	就職したら定年まで働きたい																																																																																																																																																
13	母親は仕事をしている(専業主婦でない)																																																																																																																																																
14	父親はよく家事をする																																																																																																																																																
15	自分の娘にはキャリアウーマンになってほしい																																																																																																																																																
16	今の社会は女性が働きづらい社会だと思うか																																																																																																																																																
17	学校教育で女子は差別されているなど感じたことがあるか																																																																																																																																																
18	家庭生活で女性は差別されているなど感じたことがあるか(弟、兄)																																																																																																																																																
<p>① YES(1-15) / とてもそう思う(16-18) ② NO(1-15) / ままあそう思う(16-18) ③ どちらとも言えない(16-18)</p> <p>④ あまりそう思わない(16-18) ⑤ 全くそう思わない(16-18)</p>																																																																																																																																																	

表3 アンケート結果（韓国側）

アンケート結果(韓国側)

<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td style="width: 5%;">1</td><td style="width: 20%;">81</td><td style="width: 20%;"></td><td style="width: 20%;"></td><td style="width: 20%;"></td><td style="width: 15%;">17</td></tr> <tr><td>2</td><td>96</td><td></td><td></td><td></td><td>4</td></tr> <tr><td>3</td><td>91</td><td></td><td></td><td></td><td>9</td></tr> <tr><td>4</td><td>51</td><td></td><td></td><td></td><td>49</td></tr> <tr><td>5</td><td>98</td><td></td><td></td><td></td><td>1</td></tr> <tr><td>6</td><td>73</td><td></td><td></td><td></td><td>25</td></tr> <tr><td>7</td><td>95</td><td></td><td></td><td></td><td>5</td></tr> <tr><td>8</td><td>99</td><td></td><td></td><td></td><td>0</td></tr> <tr><td>9</td><td>47</td><td></td><td></td><td></td><td>53</td></tr> <tr><td>10</td><td>14</td><td></td><td></td><td></td><td>85</td></tr> <tr><td>11</td><td>96</td><td></td><td></td><td></td><td>4</td></tr> <tr><td>12</td><td>78</td><td></td><td></td><td></td><td>22</td></tr> <tr><td>13</td><td>57</td><td></td><td></td><td></td><td>43</td></tr> <tr><td>14</td><td>39</td><td></td><td></td><td></td><td>60</td></tr> <tr><td>15</td><td>96</td><td></td><td></td><td></td><td>4</td></tr> <tr><td>16</td><td>23</td><td></td><td>48</td><td>22</td><td>6</td></tr> <tr><td>17</td><td>6</td><td>32</td><td>35</td><td>19</td><td>8</td></tr> <tr><td>18</td><td>11</td><td>25</td><td>22</td><td>17</td><td>25</td></tr> </table>	1	81				17	2	96				4	3	91				9	4	51				49	5	98				1	6	73				25	7	95				5	8	99				0	9	47				53	10	14				85	11	96				4	12	78				22	13	57				43	14	39				60	15	96				4	16	23		48	22	6	17	6	32	35	19	8	18	11	25	22	17	25	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>1</td><td>結婚したい</td></tr> <tr><td>2</td><td>結婚しても仕事は続けたい</td></tr> <tr><td>3</td><td>子どもを産んでも仕事は続けたい</td></tr> <tr><td>4</td><td>子供を生み育てたいと思う</td></tr> <tr><td>5</td><td>二人以上子供を持ちたいか</td></tr> <tr><td>6</td><td>夫と一緒に育児したい</td></tr> <tr><td>7</td><td>育児休暇は男性もとるべきである</td></tr> <tr><td>8</td><td>家事は夫と協力して行いたい</td></tr> <tr><td>9</td><td>専業主夫はありか</td></tr> <tr><td>10</td><td>男性より女性が家事をするべきだと思う</td></tr> <tr><td>11</td><td>男性と渡り合ってバリバリ働きたい (yes) or お茶汲みやコピーなどの事務がよい (no)</td></tr> <tr><td>12</td><td>就職したら定年まで働きたい</td></tr> <tr><td>13</td><td>母親は仕事をしている(専業主婦でない)</td></tr> <tr><td>14</td><td>父親はよく家事をする</td></tr> <tr><td>15</td><td>自分の娘にはキャリアウーマンになってほしい</td></tr> <tr><td>16</td><td>今の社会は女性が働きづらい社会だと思うか</td></tr> <tr><td>17</td><td>学校教育で女子は差別されているなど感じたことがあるか</td></tr> <tr><td>18</td><td>家庭生活で女性は差別されているなど感じたことがあるか(弟、兄)</td></tr> </table>	1	結婚したい	2	結婚しても仕事は続けたい	3	子どもを産んでも仕事は続けたい	4	子供を生み育てたいと思う	5	二人以上子供を持ちたいか	6	夫と一緒に育児したい	7	育児休暇は男性もとるべきである	8	家事は夫と協力して行いたい	9	専業主夫はありか	10	男性より女性が家事をするべきだと思う	11	男性と渡り合ってバリバリ働きたい (yes) or お茶汲みやコピーなどの事務がよい (no)	12	就職したら定年まで働きたい	13	母親は仕事をしている(専業主婦でない)	14	父親はよく家事をする	15	自分の娘にはキャリアウーマンになってほしい	16	今の社会は女性が働きづらい社会だと思うか	17	学校教育で女子は差別されているなど感じたことがあるか	18	家庭生活で女性は差別されているなど感じたことがあるか(弟、兄)
1	81				17																																																																																																																																												
2	96				4																																																																																																																																												
3	91				9																																																																																																																																												
4	51				49																																																																																																																																												
5	98				1																																																																																																																																												
6	73				25																																																																																																																																												
7	95				5																																																																																																																																												
8	99				0																																																																																																																																												
9	47				53																																																																																																																																												
10	14				85																																																																																																																																												
11	96				4																																																																																																																																												
12	78				22																																																																																																																																												
13	57				43																																																																																																																																												
14	39				60																																																																																																																																												
15	96				4																																																																																																																																												
16	23		48	22	6																																																																																																																																												
17	6	32	35	19	8																																																																																																																																												
18	11	25	22	17	25																																																																																																																																												
1	結婚したい																																																																																																																																																
2	結婚しても仕事は続けたい																																																																																																																																																
3	子どもを産んでも仕事は続けたい																																																																																																																																																
4	子供を生み育てたいと思う																																																																																																																																																
5	二人以上子供を持ちたいか																																																																																																																																																
6	夫と一緒に育児したい																																																																																																																																																
7	育児休暇は男性もとるべきである																																																																																																																																																
8	家事は夫と協力して行いたい																																																																																																																																																
9	専業主夫はありか																																																																																																																																																
10	男性より女性が家事をするべきだと思う																																																																																																																																																
11	男性と渡り合ってバリバリ働きたい (yes) or お茶汲みやコピーなどの事務がよい (no)																																																																																																																																																
12	就職したら定年まで働きたい																																																																																																																																																
13	母親は仕事をしている(専業主婦でない)																																																																																																																																																
14	父親はよく家事をする																																																																																																																																																
15	自分の娘にはキャリアウーマンになってほしい																																																																																																																																																
16	今の社会は女性が働きづらい社会だと思うか																																																																																																																																																
17	学校教育で女子は差別されているなど感じたことがあるか																																																																																																																																																
18	家庭生活で女性は差別されているなど感じたことがあるか(弟、兄)																																																																																																																																																
<p>① YES(1-15) / とてもそう思う(16-18) ② NO(1-15) / ままあそう思う(16-18) ③ どちらとも言えない(16-18)</p> <p>④ あまりそう思わない(16-18) ⑤ 全くそう思わない(16-18)</p>																																																																																																																																																	

2.1 日本側

私達はまず、お茶の水女子大と同徳女子大それぞれで学生の女性の社会進出への意識に関するアンケート調査を行った。性別役割分担に対する意識や、卒業後の進路に関する質問など全部で19項目、日本側は170人、韓国側は100人の大学生を対象に、アンケートを実施した。

その結果、日本側は結婚願望が已然強く、子供を希望する女性も多いが、同様に仕事を多くこなしていきたいと希望している人も多く見られた。また、二国間の結果に特筆すべき違いがいくつかの項目で見られた。

私たちはまた、専門家へのインタビューも試みた。日本側は大学でジェンダー学について教鞭を取っている教授3名にお話を聞いた。インタビューの中では女子大生が主体的に政策に関わって行く事の重要性や、現代の女子大生の主婦への認識の甘さなどを指摘された。ここでもまた、韓国側に比べ日本女子大生の社会進出への消極的態度が浮き彫りになった。その理由としてはやはり女性の労働に対して万全の体制が整っていない企業や、女性の社会進出に対して難色を示す社会全体の態度が挙げられるだろう。

2.2 韓国側

日本側との相違点として「子供を生んでも仕事は続けたい」という項目は、韓国側が日本よりも約20%高く、「子供を生み育てたい」という項目は逆に日本の方が約20%高いことから韓国の女性の就職意欲の高さが伺える。二人以上の子供を持ちたいと考える日本の女性が多いのに対し、韓国側が目立って少ないのは、韓国特有の教育費の高騰が韓国女性に二人目を持つ事を躊躇させているのだろう。また、「自分の娘にはキャリアウーマンになってもらいたいか」という項目に対し、韓国側の賛成票が多い理由として、韓国においてキャリアウーマンという言葉が成功した女性を指すという文化的相違が挙げられる。

以上のように、アンケート結果から両国の女子大生の社会進出や家事・子育て・結婚観の違いが伺えるとともに、日本・韓国とも、多くの学生が社会での男性と同様の活躍を希望していて、家庭での労働やそれに対するプレッシャーが未だ女性を社会進出から遠ざけている現状が伺えた。

韓国側は、女性検事へのインタビューを行った。女性の社会進出において、日本より一歩先を行く韓国に関しては、女子大生が主体的にどうしたらよりよい職場環境を整えられるか考えるよう促して行くことが大切であるということ学んだ。

3. 東京での野外実習

日時：8月5日(水)11時～

場所：文京区役所

回答者：文京区男女協働子育て支援部 男女協働・子ども家庭支援センター担当課
小池氏、小杉氏

目的：女性の社会進出の現状・問題点とその解決方法を探るため、インタビューを行う。

民間企業の手本となり社会を引っ張っていく、いわば女性問題に関して最先端の対策がなされているだろう公共機関で、お話を聞く。

内容：ご自身も女性であり、働く女性として様々な経験を積んでおられる課長の小池氏に主にインタビューを行った。以下は質問とご回答の内容をまとめたものである。

(1)区役所の女性の雇用について

- ・区役所は完全な成績主義で、採用はすべて試験による。
- ・子育て支援ハンドブックの作成、子育てアドバイザーの設置など、女性の社会進出に積極的な支援をしている。

(2)社会進出において、女性であることの障害を感じたことはあるか

- ・公務員は恵まれているが、働く女性は常に子どもを産む可能性を考えざるを得ない。
- ・しかし子育てを障害だとは思わない。キャリアにとっても価値がある。
- ・女性の方が、価値観が多様で選択肢も広い。
- ・働くということに関しては、労働時間が固定されている職種が多く、社会制度そのものが男性に有利になっている。

(3)女性の特性を生かした平等とは

- ・女性の多い職種(つまり、女性の特性を生かしやすい職種)=保育、介護という低賃金の職業であるのに対し、男性の多い職種=IT 関係や建築など高賃金の職業である。この賃金格差を是正することが平等につながる。
- ・同様に、女性の多いパートと男性の多い正規社員の格差を是正し、どれだけ仕事をこなしているかで賃金を決めるべき。

(4)日本における子育ての問題について

- ・社会全体で子どもを育てるという風潮がなくなり、「他人の子は助ける必要がない」というような自己中心的な人が増えた。
- ・子育てが母親任せであり、それにより過度のストレスが母親にかかることが原因で虐待の問題が起こるケースもある。周りのサポートが大切。
- ・保育園が不足している。しかし保育園を増やすには多額の税金がかかるので社会全体の合意が要る。さらに、長時間子どもを預け一緒に過ごせる時間が短いということは本当に子どもにとって良いことか考える必要がある。

(5)今後期待できる制度

- ・フレックス制は時間をずらしているだけで根本的解決にはならないのでは。

- ・家事や子育てを女性に任せがちな社会的風潮を変えていくには教育が大事。

(6)理想的な社会とは

- ・全員が自分を大切にし、それぞれの個性を生かしていける社会

(7)学生へのメッセージ

- ・社会の矛盾を自分の目で見て、見たことを生かしてほしい。
- ・ドメスティックバイオレンス（以下、DV）は小さい子供のいる専業主婦の家庭で起こりやすい傾向がある。自分も被害者にならないように気をつけること。もし被害にあっても対応していく勇気を持つこと。
- ・女性の特性としての包容力、コミュニケーション力などを生かそう。
- ・性同一性障害など、男女の差に対する明確な答えはなく、多様な角度からものを見ていくことが大切。



写真1 文京シビックセンターでの実習風景

まとめ：小池氏は終始笑顔で1時間もの間、私たちの質問に丁寧に答えて下さった。彼女のインタビューで特に印象的だったのは、男女関わらず職種間で格差の問題があり、その職種間格差をなくすことで結果的に男女間格差もなくなる、ということと、社会全体で子育てをするという風潮が消えたことが母親の負担や家庭の閉鎖化を招き、ひいては虐待やDVなど大きな問題にもつながっていくということだ。女性の社会進出の問題が、女性だけではなく社会全体の格差問題や虐待・DVなどさまざまな社会問題にも関わっていることを強く感じた。

4. 考察

韓国と日本の学生で行った討論の中で、最初に女性の社会進出に関する両国共通の重要な問題として挙げたのは、やはり「出産・育児が大変である」ということだった。国際労働機関（ILO）の「女性の年齢階級別労働率の国際比較（2005）」の比較表を見ると、スウェーデンやアメリカ等の先進国とは異なり、韓国と日本が25～34歳にかけて労働力が落ち込むM字型曲線となっている。このような落ち込みが見られる年齢は女性の出産の時期と重なっており、両国において子育ての時期に仕事を辞める女性が少なくないことがわかる。したがって、出産・育児が女性の社会進出において大きな影響を及ぼしていることは間違いない。

この問題について、両国共通の要因として挙げられたのが「保育施設の問題」である。韓国側では民間の保育施設と保育施設の間の問題を探し、京郷新聞4月5日付の記事の中に、公立施設に対する内容を見つけた。民間に比べ、格安・近隣である等、多くの長所を持っている公立であるが、そのような長所ゆえの人気から優先順位が定められている。3年は待たなくてはならず、その待機者比率だけでも73%というのが現状である。同様の現象は日本でも起こっており、保育所の待機児童の問題は重要な政策的争点となっている。つまり、社会で働くことを希望する女性が望む条件を取り揃えた保育施設の数不足しているのが両国の現状である。

しかし討論の中で、日韓の間で異なる要因が考えられることもわかった。それぞれの要因については次の項目で述べているのでそちらを参照して頂きたい。しかしどちらの要因も、それぞれの国の文化や社会の風潮からきたものであることが興味深い。

また、討論の中では、インタビュー等の事前調査を行った結果、日韓共に政府は比較的しっかり制度を定めているように思えるが、それに追従するはずの企業の意識や社会全体の認識が未だに追いついていないのではないかと、という意見が挙がった。さらには、現状では男女関係なく雇用に格差がある状態なので、この格差の溝を埋めることによって自然に男女間の雇用の差は埋まっていくのではないかと、という女性のみの問題に限らず現在の雇用制度全体に目を向けた意見も出た。

4.1 日本側

日本側の育児が大変である主な理由としては、「社会全体で子どもを育てていく」という意識が人々の間で低いのではないかとという意見が挙がった。日本側のアンケート調査の結果でも、「夫と一緒に育児をしたい」と答える人は多かったが、現状では育児休業を取る女性の割合は72%であるのに対し、男性の割合は非常に低い0.5%である。つまり、夫と一緒に育児をしたいという女性が多いにもかかわらず、夫の育児休暇が非常に辛い状況なのだ。ここには、「育児くらいで仕事を休むなんて」「育児は女性の仕事ではないのか」という社会の目を人々が気にしていることが窺い知れる。また、保育所の待機児童の問題に関しても、保育園の数を増やすなら当然国民の税金を使うこととなり、社会全体の合意が必要となる。しかしここでもまた、「勝ち組」「負け犬」といった言葉に代表されるような「勝手に(子どもを)産んだくせに」という認識が、いわゆる「ガラスシーリング」として現在の社会では存在しているように思われる。伝統的に家族の絆を重んじる韓国社会とは異なり、日本では核家族化や地域社会の繋がり希薄化が指摘されており、育児に携わる女性を支える人が周りには少なくなっている。このようなことから、日本では、昔と比較すると女性の社会進出が進み制度も改善されてきてはいるものの、仕事と育児の両立の難しさから出産を機に約7割の女性が退職をしているという現状がある。

4.2 韓国側

韓国側の育児が大変である主な理由は、「私教育費の高さ」である。韓国は経済協力開発機構(OECD)加盟国の中でも学校教育費の私的負担率の高さが特に目立つ上に、日本以上の学歴社会であるために学校以外の塾や家庭教師にも多くの費用がかかり、家計において教育費の占める割合が高い。このような教育費の高さは、韓国の合計特殊出生率(WHOの「世界保健統計2008」によると2006年度は1.2人)を著しく低下させている要因であるとも言われている。確かに、私たちが日韓の両大学で行ったアンケート調査でも、「子どもは2人以上欲しい」と答えた学生は日本に比べて韓国は少なかった。子ども一人当たりにかかる教育費が高いために、二人以上の子どもを育てにくいという状況が形成されてしまっているようである。「女性である以前に母親である」という立場で子どもたちの教育の重い責任を負わなくてはならない韓国の女性たち。このような事態が韓国の合計特殊出生率を低迷させるだけでなく、子どもを育てながらも働くことを望む女性の社会進出を阻んでいることは明らかである。

5. 提言

今回の事前調査や実習、討論を通して日韓合わせてさまざまな意見に触れることになったが、われわれの最終的な提言は、大きく分けて3つである。

まずは、『個人の特性を生かした社会作りを目指すこと』。東京実習の小池氏のお話にもあったように、現代では男女間での職業格差だけでなく、職業間の賃金格差も問題として取り上げられている。主に女性が多い保育や介護といった職業と、男性が比較的多いITや建築などの職業を比べてみると、後者の方が高賃金の職種として扱われている。このように職種としての区別で賃金が決定される場合、男女を問わず個人の長所や特性がほとんど反映されることがない。このような職業間の賃金格差が、そのままわれわれの職種のイメージにもつながっているとも言える。しかし、果たして保育士や介護士は、IT企業のサラリーマンに比べて劣っている職業だと言えるだろうか。個人のもつ能力と、それに対する報酬は、必ずしも一致していないことが多いのである。したがって、職業間格差を是正することによって、様々な職業に対する優劣のイメージを払拭するとともに、必然的に男女間の賃金格差も是正することができるのではないだろうかと私たちは考えた。

二つ目は、『制度に続く社会の意識改革を進めること』。これはきわめて重要であり、同時に最も困難な課題でもある。事前調査や東京実習でもお話があったように、政府の定める制度はある程度整ってはいるものの、その制度を実際にためらいなく利用できる社会的風潮は、まだないと言っても過言ではない。特に民間企業においてはなおさらのことであり、社内で問題意識の高い人々が育児休暇を積極的に利用することなどによって、徐々に変化を求めていくほかないのではと感じた。そのため、このような社会の意識改革を牽引していくのが、区役所など公共機関の役割でもあるのかもしれない。

最後に『われわれ大学生の意見を表出すること』が、今のわれわれにできる、社会に対

する小さな働きかけではないかという結論に至った。社会に出る前の多様で柔軟な考え方は、社会にとっては新鮮で、未来の社会人がどのような希望を持っているのかを示すことは、お互いにとって必要なことでもある。

韓国では、社会に対する意見や要望を、インターネット上で大学生・大学院生に公募するサイトが存在している。このサイトでアイデアが採用された学生には賞与が支給されるうえ、その旨を履歴書に記入することができ、学生と会社側の双方で意見の表出を重要視していることがうかがえる。それに対して日本では、このように学生が社会に対して直接意見を述べられる機会はほとんどないため、社会に対する働きかけは、選挙などの機会を通じて行う必要があるという意見が出た。

このように、同じ問題に対しても、日韓における制度やレベルの差に応じて、それぞれの社会に必要な対策を講じていかなければならない。男女間や国家間、すべて一様に平等を求めるのは、社会のニーズに合わないのだということも、今回の実習で明らかになったことだった。

今後、社会人の一員として生活していくわれわれにとって、社会の雇用の現状を知ることが大変意義のあるものであった。そして、日韓それぞれの社会がもつ課題を克服し、現状をさらに向上させるための意識と努力の必要性も強く感じた。その際、他国の社会制度にも目を向けることによって、新しい視点からのアプローチが見いだせることもある。各国が互いに関わり合って共存している現代社会においては、広い視野と柔軟な姿勢をもち、各々の意見を積極的に社会に発信していくことが、われわれの義務でもあるのではないだろうか。

<参考文献>

OECD Factbook 2009 (2009/10/02 現在)

<http://puck.sourceoecd.org/vl=1263364/cl=18/nw=1/rpsv/factbook2009/index.htm>

ILO (2005) 「Year Book of Labour Statistic 2005」

『朝日新聞』 (2009/06/28) 朝刊「変わる働き方ー選択のときー」

『京郷新聞』 (2009/4/5)

多文化共生社会に向けて



李 湣奈 g0710446@edu.cc.ocha.ac.jp
明石 薫 g0810102@edu.cc.ocha.ac.jp
海老原 麻美 g0810110@edu.cc.ocha.ac.jp
大畑 真依 g0810114@edu.cc.ocha.ac.jp
近藤 あやか g0810236@edu.cc.ocha.ac.jp
成田 矩子 g0810148@edu.cc.ocha.ac.jp
イ・ジュヒョン ggamjjik716@hanmail.net
イ・シンヒャン tlgid87@naver.com
ユ・ジョン uzumaki8945@naver.com
イム・タミ mamarin@naver.com

1. はじめに

「文化とは要するに私たち人間が自分たち自身について語る物語の集積である。」文化人類学者クリフォード・ギアーツ(1987)は文化についてこう語っている。日韓セミナー文化グループとして集まった、日中韓の3カ国の国籍を持つ私たちのグループは、テーマとして「多文化共生」を選んだ。

はじめのうちグループ内で扱いたいと考えていたテーマは文化財、若者文化、そして食文化と様々であった。しかし最終的に「多文化共生」を選んだのは、日本も韓国も外国人が自国に急増したことで多文化が共存する状況を生んでいる現在、それが自国の社会にどんな変化をもたらしているのか、単なる共存の段階から多文化共生という段階を目指しているのかを検証してみようと考えたからである。私たちの抱えていた問題意識は、外国の文化が自国に入り、確かに自分たちの近くにその文化があるはずなのに、実際にはその実態を知ることがないことであった。そこで、このセミナーをきっかけに多文化共生の実態を知り、解決すべき問題があるとしたら、そこに「世界のために私たちができること」を見つけれないかと考えた。多文化共存の地域を舞台に日韓で実習を行い、そこで実際に暮らす人たちから自身について語ってもらい、私たちの知らなかった物語を聞こう。そして今後の物語を思い描いてみよう、このテーマが選ばれたのである。

2. 事前調査

2.1 日本側

私たちは、多くの外国籍の人々が居住する東京の大久保地域を訪ねた。はじめに大久

保の街を散策した。韓国籍の人々が多く居住しており、韓国料理の店や韓国製品のグッズショップが多かったが、アジア地域を中心に様々な国籍や文化をもつ人々が生活しており多文化社会が形成されていることが街並みから分かった。次に多文化のまち大久保を拠点に、グローバル化のなかで変貌する地域社会（都市コミュニティ）の新しいあり方を追求している市民のボランタリーグループ、共住懇の方にお話を伺った。共住懇では、さまざまな意味で多様な人びとが、互いの違いを認め、尊重しあい、共に豊かに生きていくことができるような、開かれた地域社会づくりを目標として、多文化社会における情報発信や地域防災、被災の街づくり、教育・啓発活動を行っていることを教えていただいた。以上の調査から多文化社会の現状を少しではあるが知ることができ、多文化共生社会の実現に向けて私たちにできることを考えていくきっかけとなった。

2.2 韓国側

一番目に訪問した二村洞は、現在 1200 人くらいの日本人が住んでいるところであり、^{イチヨン}二村グローバルビレッジセンターが位置している。2008 年に開館した二村グローバルビレッジセンターは、ソウルに居住している日本人をはじめ、外国人の生活をサポートするための施設であり、生活相談サービス、教育・文化体験、情報伝達・ボランティアプログラムなどを行っている。センター長の石原有希子さんは 4 年間韓国に住み、初めは言語を使うことがとても大変だったそうだが、子供が通っている日本人学校の先輩たちとの交流を通してその困難を乗り越えたという。韓国で生活しているが、SJC(Seoul Japan Club)というサイトに加入して日本人との情報も交換しているし、集まりも持っているという。

二番目に訪問したところは、^{イテウオン}梨泰院にあるラーメン屋の「ミハマヤ」である。韓国在住歴 4 ヶ月の店長の今井直樹さんは、韓国に来てまもなくの頃は、韓国語ができなくて買い物をする際にもなにかと問題があったし、友だちもいなくて寂しかったという。しかし、現在では店の韓国人のスタッフや SJC で知り合った友だちに助けをもらいながら生活しており、また、韓国の食べ物は美味しくて安く、韓国の生活にも満足していると言っていた。「ミハマヤ」の味を知ってもらうために韓国に来たのだが、異国で働いているということで、日本人の同業者たちの組織はなく、日本にしかない材料を探すこともとても大変だという。その上、韓国人のお客さんが全体の 80% を占めるので、接客をするにも困難を感じているそうだ。「ミハマヤ」で従業員を選ぶ基準は、日本語ができるかどうかで決まる。従業員の大半が韓国人であるので、従業員の失敗を叱るときにも文化差を感じるそうだ。例えば、日本では従業員を叱るとき、頭をぼんと叩くことがしばしばあるが、韓国の従業員にそのようなことをしたら、泣いてしまって戸惑ったという経験を聞かせてくれた。

三番目は、^{ホンイク}弘益大学校周辺の居酒屋「テッペン」を訪れた。社長の徳田正平さんも初めて韓国に来たとき一番大変だったのは、やはり言語の問題だと言っていた。店を運営するとき、従業員に意思を伝えるのがうまくできなくて、従業員との人間関係や信頼関係を築くことが大変だったという。しかし、韓国人の友だちや店で働いている従業員たちにいる

いる助けてもらうなど、韓国人の深い情のおかげで、生活には満足しているようだ。韓国で「テッペン」を開店したきっかけは、日本の本当の味を伝えるためだと言う。韓国に和食の店はいろいろあるが、日本とは味が違うと思い、日本の本当の味を伝えなかったし、日本特有のサービスを韓国の外食産業に知らせたいという思いがあったのようだ。「テッペン」は韓国人客が全体の90%を占めている。また、日本の「テッペン」から連れてきた友だちがいたので、同業者たちの組織はないようだ。「テッペン」の従業員は4人を除き韓国人だという。徳田正平さんは従業員を選ぶとき、日本語ができるかどうかはあまり関係なく、具体的な夢と情熱があればいいという考えを持っているようだ。夢があればもっと楽しく幸せに働くことができるので、言葉よりも雰囲気とか筋というのをもっと大切にしていると言っていた。

最後に訪問した所は、明洞にあるユニクロである。韓国在住歴10ヶ月のユニクロ職員の峯岸義雄さんは、日本本社から派遣されて韓国で勤務している。家族と一緒に住んでいるために、韓国へ来たばかりの頃は、家族たちが韓日の文化差に慣れるのが大変だったと言っていた。例えば、自分の子供達を連れて出かけると、知らない人から可愛いと声を掛けられるので、最初はとても不思議だったという。その他には、前のインタビューでもよく出てきたのと同じで、言語に非常に困難を感じたようだ。また、インターネットで物を買った時の配達に関してもいろいろと問題があり、大変だったと言っていた。家族と一緒に来ているので、会社の職員以外に韓国人の友達はおらず、定期的に会う韓国人の友達はいないという。韓国へ来る前は、韓国人はとてもアクション的で感情的だと思っていたけれども、来てみたら全然違うと感じたようだ。また、外国で生活することは特別な経験であるので、今は満足していると言っていた。韓国は、日本と近い国なので食文化をはじめ、似ている文化がたくさんあり、また、犯罪もあまりなく、深夜歩くときにも安心で、治安が保障される点が満足だという。他には、客や職員たちがほとんど韓国人であるので、目的や理由の伝え方に関して文化差があり、それによって理解できない部分があると言っていた。例えば、日本ではサービスするときに笑顔であいさつをすることは当たり前のことである。しかし、韓国では笑顔よりも商品についての知識やアフターサービスの部分が重要だと言う韓国人スタッフがいて、意見の違いがあったが、「日本の会社だから日本に合わせてこのようにしてください」とも言えないので、伝える方法に気をつけていると言っていた。意思疎通の問題に対しては、職員内の日本語ができる人に助けてもらって解決したと言っていた。日本の同種業界の組織はあるかも知れないが、会社以外の人々との同種業界の集まりには参加したことがないようだ。また、すべての商品は日本のデザインをそのまま持って来ていると言っていた。客の90%以上が韓国人だそうだが、明洞などの観光地では外国人に特別な購買力があるという。また、韓国へ来る前にユニクロの会社で行った研修プログラムに参加したそうだが、それはアメリカに合わせた研修プログラムだったために、韓国とは多くの差があると思ったと言っていた。例えば、アメリカではon/offの差があるので、公と私をはっきりと区別しなければならないが、韓国に来てみると、むしろ

その反対というか非常に違うと感じたし、日本の方が、韓国に比べて公と私の区別が明確だと感じたそうだ。多文化については、外国で生活する上で、言語よりも文化の理解の方がもっと重要だと言うっていた。文化が分かれば言語が分からなくても理解することができるが、言葉だけ分かるからと言って、その国のすべてを理解することはできないという考えを持っているようであった。

3. 東京での野外実習

8月5日、東京での野外実習を行った。私たち文化グループは、野外実習の場所として在日外国人が多く集まる町、大久保を選んだ。午後私たちは JR 新大久保駅を降り、大久保の町を観察しながら「オムニ食堂」という韓国料理屋へ向かった。新大久保の駅には禁煙と韓国語で書かれていたり、駅前の地図案内が日本語と韓国語で書かれていたり、他の町とは異なる光景が見られた。駅を出て右手に進むと、韓国料理屋や韓国のアイドルのお店などが立ち並んでおり、日本と韓国の文化が混在していることを実感した。



写真1 大久保の街にあふれる日本語以外の言葉の例

「オムニ食堂」で昼食をとった後、「オムニ食堂」のご主人にインタビューをさせていた。 「オムニ食堂」の韓国料理の味は、韓国で食べる味と同じだと韓国人学生たちが言っていた。「オムニ食堂」の主人は1995年に日本で食堂を開店したそうだ。韓国で食堂を経営した経験があり、知り合いの紹介で日本での食堂の経営を始めたという。食堂の経営を始めた当初は韓国料理があまり知られてなかったため、歌舞伎町で配達を中心にして、食堂を経営していた。当時は韓国料理屋が3つしかなかったのが大変なことがたくさんあったそうだが、現在では2004年に起きた韓流ブームの影響で韓国に関心が高まり韓国料理

屋が多くなった。大久保に韓国料理屋が増えていることに関しては、韓国料理屋が増えていることには問題はないが、客寄せのために値段を低くしたり、競争が激しくなったりしているのはとても残念なことだとおっしゃっていた。お店のご主人は、日本で14年以上暮らしているのにも関わらず、日本語を片言しか話すことができなかつたため、インタビューは韓国語で行われた。日本語が話せないことで不便はないかという問いに対し、店に来る客の95%が日本人で、韓国人は5%ぐらいであるが、接客などの日本語を使う仕事は韓国から留学に来ている従業員がしてくれているため不便はないとのことだった。在日本韓国人連合会についてお聞きすると、この会や同民会にはよく参加しており、日本に住んでいる韓国人と交流をすることで日本での生活に必要な情報を得たり、お互い助け合ったりしていると答えてくださった。インタビューを通して、日本に住んでいるというよりも日本の中の韓国に住んでいるといった方が適切なのではないかという印象を受けた。



写真2 インタビューを行ったオムニ食堂



写真3 オムニ食堂のメニューの数々

次に、「在日本韓国人連合会」（以下、韓人会）を訪れ、インタビューをさせていただいた。韓人会の方は日本語が堪能で、日本語でインタビューに答えてくださった。韓人会は、日本人への韓国語教室、ニューカマーへの日本語教室、日本の祭りや町の清掃活動への参加などの活動を行っている団体である。まず、多文化共生を妨げるものがあるとしたらそれは何か尋ねてみた。多文化共生を妨げるものとしては、言葉や文化などの日常生活の壁が最も大きいそうだ。文化の壁の例としては、韓国人は電車の中で大きな声で話す、日本人は電車の中で大きな声で話すことに違和感を覚えるという。しかし、全体としては、日本で暮らして13年になるが、差別も少なく、医療面などでも不便はなく住みやすいという。信頼を築けば日本人と変わらない生活ができると語ってくださった。次に、大久保には韓国料理や韓国の芸能人を扱う店が多いが、店を開く上で大変なことは何か尋ねてみた。一般的に韓国人が日本で店を開く場合には、店を借りることが難しいことが多いそうだ。また、外国人だからという理由で断られることは他の地域では多いということだった。しかし、大久保の場合は外国の店は上手いくが、日本の店は上手いかないという他の

地域とは異なる特徴があるため、不動産面の問題はないようだった。最後に、韓人会の集まりはどのくらいの頻度で行われているのかという質問に対しては、場所の問題があるのは定期的集まるのは難しく、連絡はメールやインターネットを通じて行っていると答えてくださった。



写真4 韓人会でのインタビューの様子



写真5 インタビュー後の記念撮影

4. 考察

韓国にある日本人の店と日本(大久保)にある韓国人の店とをそれぞれ調査したところ、韓国と日本の現状は異なるため、ひとくくりにして考えることはできないということが分かった。そこで私たちは韓国、日本の現状についてそれぞれ考察することにした。

まず韓国にある日本人の店に関してだが、従業員は皆韓国人であり、コミュニケーションで苦労していることが分かった。また、韓国には日本人同士の集まりがあまりない。ソウルに外国人の韓国生活への定着を支援するグローバルビレッジセンターがあることはあるのだが、あまり広く知られておらず、しかもそこで行われているプログラムは時間が限られていて、店長などはどちらにしてもなかなか行けないようである。韓国に日本人同士の集まりがない理由として、韓国に住む日本人が少ないためコミュニティが作れないというのも一因であるであろう。韓国に住む日本人の障壁は、言語の問題と日本人コミュニティがないため日本人同士が知り合えるきっかけがないということのように思われる。そのため現在の韓国は、日本人にとってまだまだ住みにくい地であるようである。

一方、日本ではどうであろうか。日本(大久保)にある韓国人の店では、従業員は皆韓国人であり、コミュニケーションの問題は生じていない。また、大久保には韓人会や同民会といった韓国人同士の集まりがある。そのため韓国人にとっては住みやすくなっている。しかし、これは大久保という地域に限定されているような気がする。実際、大久保以外では韓国人はなかなか店が出せないため、大久保に集まらざるをえないという現状があるようだ。このように店の従業員がみな韓国人であり、韓国人コミュニティも存在するため、大久保にいる限り韓国人は韓国語しか話せなくてもさほど不自由しない。これではまるで日本に住んでいるというよりも韓国に住んでいるような感じなのでないだろうか。果たし

てこれは多文化共生といえるであろうか。私たちはそうは思わない。

そもそも多文化共生とは何か。ただ外国人が増えればいいというわけではないだろう。現地の人とそこに住む外国人との間に交流があること、すなわち「内なるグローバル化」こそが多文化共生といえるのではないかと私たちは考えている。

4.1 日本側

韓国においても日本においても、現段階においては多文化共生が成り立っているとはとても言えないことが分かった。では、多文化共生への一歩として何が必要なのか。

私たちは、多文化に対する寛容さを社会全体で身につける必要があるのではないかと考えた。そうでないと、その国に住み着いた外国人が自文化を貫きたいと思った場合、社会の中で孤立してしまう恐れがある。もちろん、その国に住むのだから、いくら自文化を貫きたいからといって、現地の文化や社会ルールを無視するわけにはいかないだろう。それではどちらにしても現地の人とそこに住む外国人との間に交流は生まれず、「内なるグローバル化」とは、決して言えない。

しかし、逆に現地の社会ルールを在住外国人に押し付けられればいいかといったらそうでもないであろう。それではその人のアイデンティティを喪失させることになりかねない。大事なのは、在住外国人が自然に現地の社会ルールを身につけることではないだろうか。そのためにも、現地の人と在住外国人が双方向に理解し合うことが必要であると思う。だから、在住外国人が現地の社会ルールを身につけるだけでなく、現地の人もまた、外国の文化や社会ルールを理解する必要があるのではないだろうか。

また、自文化を大切にすることにせよ、現地の文化を身につけるにしる、重要なのは在住外国人自身が自ら選択していくことだと思う。定住地の良いところ、母国の良いところをそれぞれ選びつつ取り入れていく、この姿勢が大切なのだと思う。自分で選んだことであれば誇れるし、周りに批判されてもそのことを恥じる必要はない。

多文化共生のことを考える際に出てきた問題点として、移住してきた人は果たして多文化共生したいと思っているのか、というものが挙げられる。今回のセミナーを通して韓国においても日本においても多文化共生ができていないということが分かった。しかし多文化共生がなされていない現状が良くないといえるか、多文化共生されていなければならないのか、この答えはそう簡単に出るものではないと思う。ある人にとっては良くない状態であっても、別のある人にとっては良い状態ということも普通にある。ただし、そんな中においても、多文化共生のビジョンを追い求め続けることは決して無駄ではないはずである。グローバル化が進み、マイノリティとマジョリティとの区分も現れてきている現在において、多文化共生を考えることは、この先どうすればいいかを考えるきっかけにもなるであろう。

4.2 韓国側

今回の調査では、韓国での生活には言語疎通や文化差異に関する問題が一番多く、まだ生活に必要な情報提供や文化・言語の教育をする外国人支援機関が足りないことが分かった。上に紹介したような、外国人の韓国生活への定着を支援するグローバルビレッジセンターが、多くの外国人が居住しているところを中心に、ソウル市内に5つ設置されているのだが、まだ広く知られておらず、センターの役割がきちんと機能していないのではないかという疑問を持った。

また、多文化地域内では地域住民と居住外国人との交流の場が少なく、多文化地域共同体が形成されていないのではないかと思った。韓国で内なる多文化共生をするためにはこれらの問題を乗り越えなければならないだろう。

5. 提言

以上のことを踏まえ、グローバル化時代の世界へ向けて私たちが提言したいことは、「外国人は遠いもの」という意識を変えなければならないということだ。今回、韓国側の事前調査では、外国人とのインタビューがうまくできるのか、言葉や文化差異のよって相手に失礼なことをしてしまうのではないかといった不安があった。しかし、実際にインタビューをしてみると、私たち自身が外国人に対して壁を作り上げてしまっていたということに気付いた。彼らは自分自身の素直な話を聞かせてくれ、韓国の生活で分からないことを私たちに聞くこともあった。外国人との出会いで不安になることや悩むことは無駄なことであったのだ。「外国人」という言葉自体が壁を作る原因となってしまうのかもしれない。真の多文化共生、つまり「内なるグローバル化」実現のためには、こうした心の壁を取り払い、私たちが自ら一步を踏み出すことが最も大事なことなのではないだろうか。

では、私たち大学生が踏み出せる「一步」とはどのようなものだろうか。今回の調査では、日本と韓国の在住外国人はともに、現地の言葉が喋れないという問題を抱えていることが多いと分かった。言語ができないということは、その国で生活していく上で、やはり困ることが多いと思う。しかしながら、異国で外国人が積極的に行動するのは難しいことだろうし、商店を営んでいる場合には、なかなか語学教室にも通うことができないということもあるだろう。それゆえ、外国語の勉強を行い、外国について関心を持っている大学生の私たちが、積極的に行動していくことは、とても意義があるのではないだろうか。具体的には、外国語の勉強をサポートできるようなスタディグループを作って活動することや、商店などであったらアルバイトとしてそこで働かせてもらうというもの良いかもしれない。私たち大学生が在住外国人の方々の中に積極的に入っていくことで、現地の言語や文化を「教える側」「教えられる側」といった一方的な関係に留まることなく、お互いの言語や文化を学びあうといった双方向的な関係が築けるのではないだろうか。また、韓国のグローバルビレッジセンターのように、外国人の生活を支援する機関と連携して、文化体験や地域住民とのボランティアプログラムの情報を提供したり、それらに自らも参加し

たりすることも、私たちにできる「一歩」であると思う。積極的に話をする機会づくりという役割を、私たち大学生がしていければいいのではないだろうか。

今後ますますグローバル化が進んでいくにつれて、様々な文化を持つ人々が一つの街に住むことが今よりも多くなっていくだろう。そうした状況下で、みなと共に生活<共生>していくためには、私たちの中にある、異なる文化を持つ人々に対する心の壁を取り払い、一人一人が「一歩」を踏み出さなければいけない。そして、その「一歩」の形は人によって様々である。そのため、私たちはこれからも多文化共生実現のために私たちができる「一歩」というのを模索し続けていきたい。

<参考文献>

クリフォード・ギアーツ (1987) 『文化の解釈学』 岩波書店

食品リサイクル



小島 千尋	g0710122@edu.cc.ocha.ac.jp
新井 杏子	g0810106@edu.cc.ocha.ac.jp
奥住 遥	g0810216@edu.cc.ocha.ac.jp
松永 彌有子	g0810274@edu.cc.ocha.ac.jp
キム・ジョンシル	hongshil85@hotmail.com
キム・シンヒ	kkku-kkury@hotmail.com
イ・ホンジュ	hongjur@naver.com

1. はじめに

韓国語には、「机の脚が折れるまで」という言葉があり、これは、有り余るほどの料理で来客をもてなすことに価値を置く、伝統的文化を顕著に表している。私たち環境グループは、韓国でこのような観念が現在も根強く残っていることから、家庭での食べ残しが問題化していることを知り、コンビニエンス・ストア等での残飯が近年問題となりつつある日本の食品処理問題と比較することにした。「環境」というテーマは多様な問題を含んでいるが、日々の生活に欠かせない身近な要素である「食」から、環境に対する私たちの主体的提言へとつなげていきたい。

2. 事前調査

2.1 日本側

2.1.1 江戸のリサイクル

「食のリサイクル」というテーマについて、循環型社会の理想的な例として知られる江戸時代の江戸の町の様子を見ていく。

中世の西洋では人間の排泄物（つまり糞や尿）を川に流していたため、水質汚染が進み、町には悪臭が立ちこめ、伝染病の原因にもなっていた。一方日本では、汚いものとして川に流されていた尿尿も、江戸の町では最高の肥料として使用されていた。江戸の町の便所の容量は大きく、台所の排水も流し込まれていた。

今を基準に考えると汲み取ってもらおう側がお金を払うと思いがちだが、農家や業者はお金を払ったり、野菜と交換したりすることで尿尿を汲み取らせてもらっていた。12軒長屋では1年契約で、五両（750kgもの米に相当するお金）と交換されていたのが驚きである。もしくは野菜と交換の場合、一年間で、大人一人で大根50本、なす50個と交換されていた。

また人間の尿尿よりも栄養価が高いとして、さらに大切にされていたのは馬の尿尿である。大名や武家の馬小屋で糞尿をとる権利は、一種の株として売買されていたほどである。

都市では様々なゴミが発生するが、ほとんどのものは肥料になった。米ぬかや野菜くずはもちろん、魚市場から出る魚くずは貴重な肥料であった。また輸送の際に出る縄切れや糞くず、そしてなんと人の髪の毛までも肥料になっていた。それらは「江戸ゴミ」と呼ばれた。江戸の砂村というところでは、江戸ゴミと油紙や炭火を利用して、温室のような環境を作り、野菜の促成栽培も行なっていたようである。

江戸の町のみならず、江戸時代の日本の都市は、このように農村肥料の一大工場の役割を示しており、ゴミも尿尿もれっきとした有価物として、リサイクルシステムを働かせていた。

もし江戸時代のシステムがまだ働いていれば、私たちはおいしい水道水を飲むことができたかもしれない（下水道の整った今の都市システムでは、排水を薬で浄化し上水道へ流す）。また、ごみの焼却の際に出される CO₂ やダイオキシンの問題、埋め立て地不足の問題も出てこなかったであろう。

2.1.2 日本の食品リサイクル

(1)食品リサイクルの現状

図1は食品廃棄物の年間発生量の推移である。これによると食品産業における食品廃棄物等の発生量は、2001年度の1,092万トンから2006年度の1,135万トンまで微増傾向で、発生抑制が進んでいるとは言えない状況である。

また図2は食品循環資源の再生利用等の実施率の推移である。食品循環資源の再利用等実施率は、食品産業全体では2001年度の37%から2006年度の53%へ向上している。しかし、業種別に見ると、食品小売業や外食産業では、取り組みが進んでいるとは言えない。

○ 食品廃棄物の年間発生量の推移

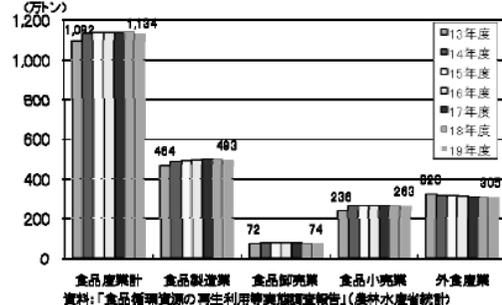


図1 食品廃棄物の年間発生量の推移

○ 食品循環資源の再生利用等実施率の推移

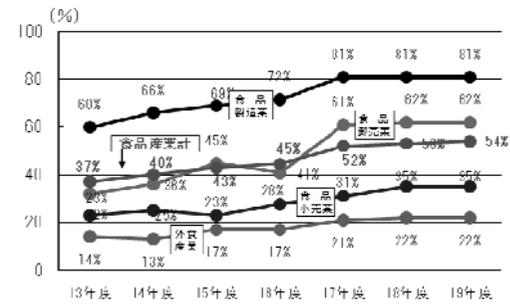


図2 食品循環資源の再利用等実施率の推移

(2)食品リサイクル法 [食品循環資源の再利用等の促進に関する法律] について

「食品リサイクル法（2001年5月1日施行。最終改正2007年6月13日）」は、大量消費・大量廃棄型社会から循環型社会への転換が急がれる状況の中で、食品廃棄物等の排出の抑制と資源としての有効利用を推進するために2000年に制定された。この法律の下、環境負荷の少ない循環を基調とする循環型社会の構築を目指している。

食品リサイクルに取り組む時は、①発生を抑制する、②再生利用する、③熱回収する、④減量するという優先順位で行う。食品関連事業者がこれらを実施するにあたっての基準が定められている。例えば、②再利用については、食品廃棄物等のうちで再資源化できるものは飼料や肥料、油脂・油脂製品、メタン、炭化製品（燃料および還元剤としての用途）、エタノールの原材料として再生利用することが法で定められている。

2007年の食品リサイクル法の改正では、食品関連事業者の再生利用等への取組に格差が生じている現状を踏まえ、個々の事業者の取組状況に応じた再生利用等の実施率目標が、新たに設定された。さらに、食品廃棄物等の前年度の発生量が100トン以上の食品廃棄物等多量発生事業者は、毎年度、食品廃棄物等の発生量や食品循環資源の再生利用等の状況を報告することが義務付けられた。食品廃棄物等多量発生事業者が定期報告をしなかったり、虚偽の報告をししたりした場合は、罰金が科せられる。

2.1.3 大手コンビニにおける食品リサイクルとその現状

(1)セブンイレブン

① 販売期限の見直しによる廃棄物発生の抑制

店舗から出される食品廃棄物を削減するためには、それらをリサイクルするだけでなく、廃棄量そのものを抑制する必要がある。そこで、2005年7月からお弁当やお惣菜について商品の鮮度チェック方法を見直した。鮮度チェックの回数を1日3回から9回に増やすことで、これまでは販売期限よりも早めに売場から除いていた商品の販売時間を伸ばし、できるだけ売れ残りの商品が発生しないよう工夫している。また、売場から除いた商品は、実際の消費期限まで試食などに有効利用している。

② リサイクル・ループ

図4はセブンイレブンのリサイクル・ループを表したものである。堆肥や飼料を活用して、農産物・畜産物を育て、原材料や商品として供給される仕組みは「リサイクル・ループ」と呼ばれ、2007年12月に施行となった「改正食品リサイクル法」でも推奨されている。今後も、生産農家や廃棄物処理業者の方とともに、循環型リサイク

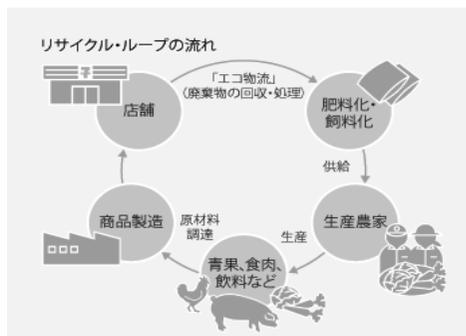


図3 セブンイレブンのリサイクル・ループの流れ

ルを推進するネットワークづくりに取り組んでいく。

(2) ローソン

ローソンで排出される食品廃棄物は余剰食品と廃油を合わせて1日1店舗当たり約11kg。「発生抑制」「再生利用」「減量」の3つの方法を組み合わせ、さまざまな施策を着実に実行することで食品廃棄物の削減・リサイクルに取り組んでいる。食品リサイクルは廃油のリサイクルをはじめ、飼料化・肥料

表1 ローソンの食品リサイクルの実施率

食品リサイクル実施率	2007年度*		2008年度(目標)*
	全店	(直営店)	全店
廃油リサイクル	14.0	(13.9)	14.2
飼料化・肥料化	9.1	(40.5)	11.5
生ごみ処理機	0.4	(6.9)	0.3
全体	23.5	(61.3)	26.0

*国の年度(例2007年度:2007年4月1日~2008年3月31日)に合わせています。

化リサイクルなどを組み合わせて実施している。表1は、ローソンの食品リサイクルの実施率を示したものである。それによると、2007年度の実施率は直営店61.3%、全店舗では23.5%であり、2008年度は全店舗で26%以上の実施率を目指し、実施店舗数の拡大に取り組んでいる。表1は、ローソンの食品リサイクル実施率を表したものである。

① 発生抑制

米飯類などの製造段階においては、「生産加工管理システム」¹の導入による効率的な生産計画を実現し、全国どの工場でも均質な商品を製造するとともに、余分な商品をつくらぬよう努めている。このシステムの導入により、規定通りの原材料が投入されるとともに、食品廃棄物の削減についても効果が表れている。各店舗ではストアコンピュータを活用し、過去の売れ行き、曜日、天候、地域行事などを確認しながら、品揃えを検討して商品を発注し、廃棄量を減らす努力を続けている。

② 再生利用

2006年1月から、からあげクンなどの調理に使用した食用油(廃油)のリサイクルを順次開始し、2008年6月末日現在、7,460店舗でリサイクルを実施している。店舗から排出された廃油は収集会社が回収し、リサイクルプラントで飼料用添加剤(家畜のえさの材料)、建築用塗料、公共バスなどの燃料、無添加石けんなどに再生・加工する。また全国の1,020店舗で、余剰食品のリサイクルに取り組んでいる。販売期限切れの弁当や惣菜などを、東京都全域、横浜市、川崎市、京都市の一部店舗とナチュラルローソン、ローソンストア100の店舗では家畜(ブタ)の飼料に、熊本市、名古屋市、青森市、三重県、松江市では肥料にリサイクルしている。肥料化リサイクルでは、店舗から排出された余剰食品を収集会社が収集し、工場に搬入。工場では、食品廃棄物を細かく砕いて発酵させ、肥料(エコフィード)を作っている。

¹ 生産加工管理システム：商品の一つの製造工程において、基準となる量、調理方法、器への盛り方などをすべて規定するもの。原材料の投入量、出来高量、盛り付け量など、すべてグラム単位で計量して商品を製造することにより、均質な商品づくりを目指している。

③ 減量

店舗から排出される食品廃棄物を減量するため、全国の直営店に「生ゴミ処理機」を 62 台導入（2008 年 3 月末日）脱水・乾燥による減量に取り組んでいる。

2.1.4 ペットボトルのリサイクル

ペットボトルは、ワイシャツ、ブラウス等の繊維、ビデオテープなどと同じ、ポリエステルを原料として作られる。

現在日本で生産される約 53 万トンの容器リサイクル法に定める回収対象ペットボトルの内、回収されているペットボトルは約 35 万トン、その内約 40%（2006 年の推定は 30%以下）にあたる 14 万トン（2006 年の実績 10.6 万トン）が繊維、シートなどに再利用されている。ペットボトル再生品には洋服（ユニフォームなど）やカーテンなどの繊維製品・フリースとシート材への転用が主で、ペットボトルとしての再生は帝人ファイバーが量産化事業を中止しているため 2004 年度の 2 万 3 千トンをピークに大きく減少し 2006 年わずか 6 千 5 百トンとなった（ペット to ペット率は 1%強）。

2006 年のペットボトル再商品化（リサイクル）量は 106,444 トン（財団法人日本容器包装リサイクル協会）であり、単純に同年のペットボトル生産量 538,484 トンで除すると、リサイクル率はわずかながら 20%を切る数値となる。ただし、この生産量は指定表示製品（清涼飲料・酒・醤油）の国内生産量のみであり、調味料・化粧品・医薬品他のペットボトル（およそ 4 万トン）や、500mL 換算で年間 10 億本以上に相当するミネラルウォーター（財務省関税局 2006 年統計 552,591KL）等の輸入分は含まれていない。実際には、ペットボトルの国内総使用量は概ね 60 万トン程度（2006 年）と見られている。

日本国内では、ペットボトルは「消費者→自治体→リサイクル事業者→リサイクル製品」という流れでリサイクルされている。このうち、「自治体→リサイクル事業者」の流れで、最近は特に中国の会社等が使用済みペットボトルの買い取りに参入し、特定リサイクル事業者でなく直接海外の会社と取引する自治体も増えてきている（東京都世田谷区が一例である）。これにより、これまで「回収してもらうもの（ゴミ）」だったペットボトルが「商品」になり、一方で自治体と取引していた会社の中には中国企業に押されて倒産寸前のところも見られるようになった。中国に渡ったペットボトルはチップになり、綿に変えられてぬいぐるみの中身などに使用される。最近では、不況の影響で一時期ほど外国企業のペットボトル買収は盛んではなくなり、逆に日本の業者の倉庫に回収されたペットボトルが余っている状態も見受けられた。

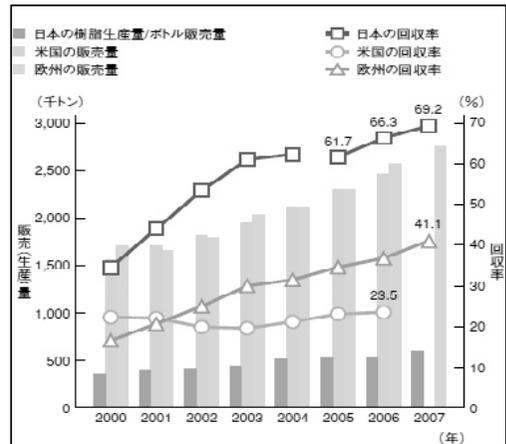


図4 日米欧のペットボトルリサイクル状況比較

日本ではペットボトルの回収率が2/3を超え世界一であるといわれているが、同時に回収率とリサイクル率のギャップもまた世界一の指摘もある（アメリカでは回収率は約2割と高くはないが、回収したペットボトルの8割はリサイクルされている。2003年実績、回収量382Kトン、リサイクル量303Kトン）。

スーパーやコンビニエンス・ストアなどではペットボトル回収が行われているが、「簡易洗浄」と「キャップの分離」という容器リサイクル法に定められた排出者（主に一般消費者）の義務が果たされていない場合が多く、リサイクルには後工程で多くのコストが必要となるなど課題が多い。

キャップやラベルを外すかどうかなどペットボトルの捨て方は義務付けられていると言っても自治体等によって大きく異なっている。例えば外国企業が買収を行う場合、洗浄・キャップの分離などがきちんと行われているボトルは最高ランクと分類され、買い取り価格が上がる。住民が徹底した分別収集で直接的に利益を得るのは企業及び取引によって利潤を得る自治体であるかもしれないが、リサイクル率に目を向ければ「ペットボトルの商品化」はその向上に寄与する部分も大きい。しかし、外国に輸送する際のエネルギーなども忘れてはならない要素である。

2.2 韓国側

2.2.1 韓国のゴミの分け方

韓国ではゴミの処理にかかる費用を国民に負担させ、ゴミの量を減らしリサイクル品を分類して出すように誘導するため、「ゴミ総量制」が1995年から行われている。韓国では日本とは違って、ゴミを生活廃棄物とリサイクル品とに分ける。この「ゴミ総量制」で、1994年577万7千トンだった生活廃棄物の量が2008年には9万4千トンに減った。「ゴミ総量制」と共に、2005年から食品廃棄物も分類して捨てるようになった。2009年現在、韓国でのゴミは、生活廃棄物・食品廃棄物・リサイクル品の三つに分けている。

2.2.2 食品廃棄物の量が多い韓国

韓国は他の国より食品廃棄物の量が特に多い国である。年に410万トン、1日に1万1397トンの食品廃棄物が生じる。その処理に4千億ウォンのお金が使われているそうだ。その原因とはなんだろうか。

まず、スーパーマーケットでは、ばら売りをしていない。その結果、食べたい分だけの材料を買えないということが、食品廃棄物の発生につながる。また、計画的な食品の買い入れができないということも原因の一つである。最後に、やはり韓国の食文化の影響が大きいと思われる。「机のあしが折れるまで」という言葉があるように、韓国ではとりあえずたくさんの料理を準備する。特に客をもてなす時、準備した料理が足りないと、大変失礼なことになる。これが現在まで残っていて、飲食店などで料理を一つ頼んでも、たくさんのおかずが出る。結局全部食べ切れず、食品廃棄物になってしまう。

2.2.3 食品廃棄物の処理

ここでは、食品廃棄物の処理方法について説明する。

まず、食品廃棄物は食品ゴミ袋に入れて捨てる。その食品ゴミ袋は2リットル50ウオンで売られていて、少しでもゴミの量を減らすことができる。また、食品廃棄物処理機があり、最近では、かなり普及して、たくさんの人が使うようになった。さらに、ミミズを使って食品廃棄物を分解したり、食品廃棄物をエネルギーに変えたりして、地球にやさしい方法で食品廃棄物を処理している。

しかし、ほとんど家庭や飲食店などでは、食品ゴミ袋を使って食品廃棄物を処理している。それでは、そのようにして捨てられた食品廃棄物はその後どうなるのであろうか。

食品廃棄物は焼却と埋め立て、飼料化、堆肥化などと処理が可能である。しかし、食品廃棄物はたくさんの水分を含んでいるため、埋め立てる場合、腐りにくい。そして、焼却する場合には多くのダイオキシンの発生と燃料費のために、効率が悪い。よって1999年、ソウルの江東(カンドン)区では韓国で最初の食品廃棄物処理場を建設し、飼料化と堆肥化を推進し、多くの良質な飼料と堆肥を生産してきた。

2.2.4 江東区食品リサイクルセンターでの実習

食品廃棄物を処理する方法はさまざま、国、そして地域と施設によって違う。ソウルには国家が運営する6つの食品廃棄物処理場があるが(もちろん、そのほかにも民間の業態が運営するところもいくつかある)、連絡を取ることができたソウルの江東区に位置する食品リサイクルセンターを訪問することにした。

主に江東区食品リサイクルセンターは2つの方法を通して飲食物ゴミを処理していた。

(1) 堆肥化施設

発酵と熟成方式を利用した処理方式である。25日間の発酵と熟成の過程を過ごし、おがくずを水分調節のために使う。この施設から出る肥料は周りの住民たちに安く提供されて、特にビニールハウスなどに有用に使用されている。

(2) 資料化施設

食品廃棄物は自動化施設を通して異物が完全に除去されて衛生的に飼料になる。間接加熱と乾燥式資料化方法で、堆肥化のように周りの農場などに無料で提供されている。

食品リサイクルセンターは、建設された1999年から現在に至るまでの10年間、たくさんの食品廃棄物を処理し、地域社会にも貢献している。しかし、維持費などに比べてあまり利益が出ないため、もうすぐなくなるとのことである。



写真1 江東区食品リサイクルセンター



写真2 食品廃棄物の投入口



写真3 江東区食品リサイクルセンターの近くにあるビニールハウス

2.2.5 廃棄物エネルギー化

廃棄物エネルギー化は食品廃棄物、畜産糞尿、下水スラッジ(産業廃棄物)のようなものが一定期間に微生物で分解されながら、メタンガスとバイオガスを生成し出すことを言う。このガスを精製すれば熱や電気を得ることができる。

今日、世界では環境汚染を阻むために、海洋に排出された廃棄物をエネルギーで切り替える努力している。また、「エネルギー節約を越えてエネルギー生産に」廃棄物をリサイクルする割合は高いが、エネルギー化する割合は非常に低く、現在は1.8%がエネルギー化されているが、2012年までに31%まで高める計画である。

次にバイオエネルギーの先進国、スウェーデンの事例について述べる。表2は国内のエネルギーに占める再生エネルギーの割合をスウェーデンと韓国で比較したものである。

表2 再生エネルギーの割合の比較

スウェーデン	再生エネルギー 64%
韓国	再生エネルギー 6.5%

スウェーデンでは廃棄物でメタンの濃度が 95%以上のハイクオリティーのガスを生産し自動車の燃料として利用している。そして、バイオガスの自動車の生産とバイオガスの充電所の設置までしている。

最近、韓国は清浄エネルギーを拡大普及するために、スウェーデンのバイオガスに関連した技術を取り入れて、'バイオガス分野の共同研究協定'を締結した。



写真4 スウェーデンのバイオガスの充電所



写真5 韓国-スウェーデン共同研究協定

3. 東京での野外実習

私たちは8月5日、東京での野外実習を実施した。スケジュールを以下に示す。

11:00 池袋駅にて集合

池袋で日本そばを食べる

14:00~15:00 食品廃棄物処理会社「アルフォ」の城南島工場へ

- ・ アルフォの処理システムについて説明を受ける。
- ・ 実際に工場の処理工程を見学
- ・ 不明な点や疑問に思ったことを質問

私たちは食品リサイクルというテーマについて調べるにあたり、食品廃棄物を回収し、家畜の飼料原料へと作り変えている会社「アルフォ」のリサイクル工場を見学先として選んだ。アルフォは、紙類やビン・カンなどその他不燃ゴミなどさまざまな産業廃棄物の回収や再生資源への処理を行っている(株)東京クリアセンターの子会社である。食品の製造工場や加工工場、百貨店やスーパー、コンビニなどの小売業者、レストランやホテル



写真6 原氏より設備の説明を受けている様子

などの飲食提供業者などが主な取引先である。

工場は大田区城南島の工業団地にあるのだが、まわりには同様の工場がいくつか存在している。工場に着くと部屋に通され、パワーポイントにより工業システムの説明を受けた。社会科見学などで、やってくる児童や生徒たちも多いそうで、説明はとてもわかりやすかった。営業課長の原氏によれば、国の再生利用事業計画や都のスーパーエコタウン事業に選定されているため、見学を受け入れる義務があるという。しかしエコの事業を行っている工場にもかかわらず、部屋はとても強い冷房がかかっており、矛盾を感じたメンバーも多かった。

リサイクルラインの説明を受けたあと、工場を実際に見て回るようになった。私たちが外に出ると、ちょうど一台のトラックがやって来た。廃棄物を載せたトラックは、まず入り口で荷物の重さを量る。一時停車するだけで量れる仕組みになっている。その後、廃棄物は熱伝導を高めるため一定の大きさに破砕される。そして「油温減圧式脱水乾燥方式(別名てんぷら方式)」という方法を用いて水分を蒸発させる。これは廃棄物を廃食用油で揚げることによって芯から水分を取り除くことのできるシステムである。続いて油との分離や、粉碎、風力による不純物の除去がなされる。不純物は主にビニールゴミであり回収後は新日鉄などに送られ、セメントの原料になる。最後に冷却の工程を経て製品である飼料原料「アルフォミール」が出来上がる。アルフォのリサイクルの全工程は、ゴミの焼却処理に比べると6割ものCO₂が削減できるそうだ。

利益について聞いてみたところ、「リサイクルとお金儲けの両立は難しい」との答えが返ってきた。各事業者はアルフォにゴミを回収してもらうにあたり、1kgで23円の代金を支払う。しかし清掃業者に回収されて焼却処理される場合は1kgあたり14.5円と4割以上安く済むため、リサイクルを選択しない経営者も多い。また、アルフォミールはあれだけの工程を経て1kg10円弱でしか取引されておらず余裕のある経営状況とはいえないそうだ。

食品リサイクル法はあるものの、高い費用を出してまでリサイクルするべきだという危機意識はまだまだ広まっていはいないだろう。またリサイクルとは言ってもCO₂は排出されているわけであり、リサイクルできるから良いといった意識ではなく廃棄物の減量こそ大切である。廃棄物の量を減らして、そこで節約できたお金をリサイクル費用へ使うといった視点が、経営者に求められているように感じた。

4. 考察

4.1 日本側

私たちは、食品廃棄物・食品リサイクルに関して、環境を守るためにもその必要性を認めたいうえで、大きく分けて二つの問題があると考えます。

第一に人々の意識の問題である。確かに食品リサイクルは無駄になってしまう食品を減らすために効果的である。しかし、私たちがまず始めにやらなければいけないことは食品

廃棄物を出さないことである。そのためには、過剰なまでの賞味期限への執着や、使える部分を限定してしまう調理法などを見直し、食品に対して「もったいない」という意識を持つべきである。このように人々の意識を変えるための方法として、人々の興味と結びついている情報を用いて現在の食糧問題に関する周知活動を行うことが有効である。具体的な例としては、健康志向が高い状況を利用して、食材をすみずみまで使うことで本来なら捨てていた栄養価の高い部分を使った調理法を提示することなどが考えられる。またそれと並行して、その食材がまだ利用できるかどうかを賞味期限にたよらず自分自身で見極める知識を紹介していくことも有効である。

第二に、利益追求と食品リサイクルの関係の問題である。ゴミとなってしまった食品はリサイクルするよりも廃棄してしまうほうが、利益率が高い。民間の企業などが食品リサイクルを行うには、利益を得るところか、工場の現状維持ができない、もしくは赤字になるというのが現状であるため、資本主義社会である日本や韓国では厳しい。そのため、国をあげての政策が必要である。いま私たちが優先しなければならないのは、利益ではなく食品廃棄物を減らすことである。というのは、大量の食品廃棄は大量の二酸化炭素排出につながり、深刻な問題となっている温暖化にも影響があるからである。

以上のように、食品廃棄物を減らすためには人々の意識改革が必要であることと、環境のためにも国をあげての対策が必要であることを日本側の考察とする。

4.2 韓国側

韓国側の考察として、以下の6点を挙げる。

①学校での教育

自然保護などについて小さい時から教育されるように、学校での教育を強化しよう。むしろ、子供が親に教えることができるかもしれない。

②家庭での教育

学校での教育だけではなく、家庭でもしっかりと教育すべきである。最近、少子化のため、多くの子供が甘やかされているのが現実である。今だけではなく未来を考えれば、学校での教育と共に家庭での教育がもっとも重要とされる。

③レストランでメニューの量を減らす

レストランでメニューごとにサイズを三つぐらいに分けて売れば、残飯の量を減らすことができる。男性と女性、それから人によって量が違うので、料理のサイズも変えられるようにする。

④ばら売り

ばら売りをしようとしても、利益率が下がるので業者側が嫌がるはずである。ただし、ちょっとした警告文句を書いておこう。例えば、玉ねぎ一個 1,000 ウォンで、三個で 2,000 ウォンだとしたら、その売り場のすぐ横に「本当に三個が必要でしょうか。安いからといって買いすぎているのではありませんか。」と書いておけば、買いすぎを少しは減らすこと

ができるかもしれない。

⑤賞味期限の意味

韓国では「流通期限」という。「流通期限」の辞書的な意味は、「市中に流通できる期限」である。しかし、消費者は「食べられる期限」と思い、流通期限が過ぎると捨ててしまう。流通期限の意味の再認識が必要なのではないか。

⑥傷もの商品

傷もの商品(果物や野菜など)は商品として価値がないとして、そのまま捨てられることになる。その分、ゴミになるのだ。それを捨てずに安売りをすれば、生ゴミも減らすことができるだろう。

5. 提言

以上、日本側と韓国側双方で、食品リサイクル、さらには環境問題という大きなテーマについて調査し議論をしてきた。そこで共通して挙げられたことは、「人々の意識の変革の必要性」である。賞味期限・流通期限を必要以上に気にする風潮、少しでも傷がついた商品は販売しないという生産者・消費者の意識等が、食品リサイクル問題を考える上で重要な要素となる。私たちは、「環境対策をしていることが付加価値となるような社会」を今後目指していくべきだと考えた。学校教育というのは一つの手段であるし、また、個人が興味を持てる分野と結び付けることで、真正面から捉えるよりも効果的に問題をアピールすることも可能であろう。日本でも韓国でも「オシャレ」というのがキーワードになりそうだと、考えている。

議論を進めていく中では、今私たちが議論していることは、先進国のエゴ・偽善ではないかという意見もでてきた。しかし、先進国には先進国なりのやり方があるだろうし、逆に先進国にしかできない対策の仕方、若い私たちにしかできない対策があるはずである。

「理屈よりも行動！」が、私たちの提言である。

<参考文献>

渡辺 善次郎(2002)「白魚の棲む隅田川と大臭気のテーマズ川」『江戸時代に見る日本型環境保全の源流』農山漁村文化協会

農林水産省 <http://www.maff.go.jp/> 7月25日閲覧

財団法人 食品産業センター <http://www.shokusan.or.jp/> 7月25日閲覧

セブンイレブンジャパン HP <http://www.sej.co.jp/index.html> 7月20日閲覧

LAWSON HP <http://www.lawson.co.jp/index.html> 7月20日閲覧

ビジネスに直結する環境情報サイト『環境ビジネス.jp』2008年10月号 7月20日閲覧

PET ボトルリサイクル推進協議会 HP <http://www.petbottle-rec.gr.jp/top.html>
7月25日閲覧

「自然と人間」の授業プリント

ウィキペディア <http://ja.wikipedia.org/wiki/>

naver 知識人（飲食物が多い理由についての説明） <http://kin.naver.com/detail/detail>

7月20日閲覧

daum ブログ（世界の二酸化炭素の量 <http://blog.daum.net/yusantj/> 7月20日 閲覧

デジョン市庁 HP（飲食物に関する内容） <http://www.daejeon.go.kr/> 7月21日 閲覧

韓国の環境部 HP <http://www.me.go.kr/> 7月23日 閲覧

日韓における児童のグローバル教育



大内 尚子	g0610408@edu.cc.ocha.ac.jp
佐藤 由奈	g0710243@edu.cc.ocha.ac.jp
篠原 明子	akota0814@hotmail.co.jp
東城 望美	g0810256@edu.cc.ocha.ac.jp
林 瑛	g0710167@edu.cc.ocha.ac.jp
コウ・ヨンイン	ryoin1717@naver.com
イ・サンア	gyuljuice@nate.com
チェ・ヒジョン	asobi42@hanmail.net

1. はじめに

国際化で外国との交流が頻繁になりつつあり、親の仕事などの理由で海外に渡る子どもも徐々に多くなってきている。その児童が異文化に触れる際、学校ではどのような教育がなされているのか、そして、限界があるとしたら、その原因は何かを調べた。

お互いの国に住む子どもたちの教育について知ることは、弱者になりやすい児童の実態に関する認識を高めるとともに、私たちの将来について考えることにつながると考えたため、このテーマに決め、インターネットでの資料調査や、ソウル日本人学校、東京韓国学校、お茶の水付属小学校の校長先生とのインタビューなどを進めた。

そして最終的に、私たちが大学生としてできることを提言しようと思う。

2. 事前調査

2.1 日本側

2.1.1 差別

まず、韓国側から日本における外国人の差別(特に法律上にみられるもの)について調べてほしいというメールを受け取ったため、差別について調べた。過去には、年金における国籍条項があったけれど、現在ではなくなっており、法律的に差別されている事は見つからなかった。しかし、小さなレベルでの差別問題は就職差別や偏見を持つ人など、少なからず存在しているようだ。児童に目を向ければ、日本人児童には差別という意識はないにせよ、言葉遣いが周りの日本人の子どもと違っていたり、日本語が喋れなかったりすると、日本人の子どもと一緒に仲良く遊んだりすることが難しいようである。これは韓国人に限った話ではなく、同じようなことが浜松など、中部地方のブラジル人街近くの小学校など、外国人児童の多い地域で起こっているという。

2.1.2 韓国人児童の多い公立小学校

事前調査の一環として、外国人児童が多い地域特有の教育をしている小学校を探した。東京の中で韓国人が多い地域といえば新大久保ということで、新大久保には韓国人児童の多い小学校があると思い、新大久保の小学校について調べてみたところ、新宿区立の大久保小学校という学校には日本語国際学級というクラスがあり、日本語の授業をしていることが分かった。他にも国際理解教育を目標に掲げている等、韓国人児童の日本語教育だけでなく、日本人児童の国際理解を深める教育があり、韓国人の多い地域ならではの独特な教育を取り入れていることが分かった。同じく新宿区立の戸山小学校(新大久保から徒歩5分程)も児童の約 20%が韓国人などの外国人でこちらも韓国の文化体験などを行っていた。しかし、残念ながら、この様な小学校には行くこと出来なかった。

2.1.3 韓国学校の描写のある映画

日本における韓国学校が登場する映画(『GO』や『パッチギ!』)を各自で見た(しかし、これらで登場するのは朝鮮学校で、韓国学校とはかなり違うものようだ。)

2.2 韓国側

2.2.1 ソウル日本人学校

ソウル日本人校とは、父母の仕事などの理由で韓国に来て、また日本に帰ることが明確である日本人児童を対象として、日本の文部科学省の教育方針に従い、児童教育を行う学校のことである。つまり、日本人の児童が日本に戻っても日本の教育にスムーズに慣れるように、日本の公立学校にカリキュラムなどを合わせている、「日本人のための学校」とも言える。

韓国側の児童のグループは事前調査として、2009年7月21日、ソウル日本人学校を訪問し、担当の方にインタビューさせて頂いた。特に、韓国語教育や韓国文化教育や国際交流に関する質問項目を作りインタビューをした。



写真1 ソウル日本人学校の授業の風景



写真2 校長先生又は小学部の先生とのインタビュー

ソウル日本人学校では週一回韓国語授業を行っている。授業は読む・書く・話すを中心になっており、厳しく教えるのではなく、遊ぶように楽しみながら身につけることを重視しているということである。そして、その授業では、韓国人の先生が韓国の文化についても説明していて、その時間を通して生徒たちは韓国の文化に触れることができるという。例えば、韓国の「先生の日」という記念日に感謝のカードを書く活動をしなが、そのような記念日はどのような背景からできたものか、韓国人にとってどのような意味があるのかについて理解することができることなどが挙げられる。

そのほかに、国際交流として年2回、近隣の小学校や中学校と活発な交流会を行っている。交流会では自己紹介を始め、名刺の交換や文化体験やスポーツ交流などが行われていて、互いの理解を促し、生徒間の友好関係を深めることが出来るそうだ。2008年に領地の問題が再び提起されて、交流が中断される危機に立たされたが、それにも関わらず、韓国の学校の校長先生が日本人学校との交流を続けたいと思っていたので、現在も、交流会が続いている。

私たちは学校を訪問する前に、学校の周りに囲まれている高い壁や、少し厳しかった見学への手続きなどで、最初はこの学校が閉鎖的な学校ではないかと感じていた。しかし、隣の韓国学校と活発に行われている交流会や、インタビューにも、とても積極的に答えてくれた校長・教頭先生及び多数の先生を通して、私たちが持っていた偏見を取り除くことができたと思う。

また、学校に「国際交流ディレクター」という方がいるということで、学校の交流会についての熱い情熱を感じることができた。児童が韓国駐在の経験を通して、将来、日本と韓国の「橋渡し」の役割を担えるように支援していることが分かり、また交流を進めているのは素晴らしいシステムだと思った。

2.2.2 母親たちへのインタビュー

子どもたちが実際、学校の韓国文化の教育や交流会についてどのように思っているのかをもっと詳しく調べるために、ソウル日本人学校に子どもを通わせている母親たちにインタビューをさせて頂いた。

ご父兄や子どもの韓国の生活に関することや、子どもが学校の内外の出来事について悩んでいたことはなかったのか、などの質問をした。

このインタビューにより、日本人学校の子供達が交流会とテコンドー教室以外では、韓国人の児童たちとあまり触れ合う機会がないということが分かった。

3. 東京での野外実習

3.1 訪問先1：お茶の水女子大学附属小学校

帰国児童学級について調べるために、お茶の水女子大学附属小学校を訪ね、菅本晶夫校長にお話を伺った。附属小学校では、一般学級のほかに帰国児童学級というクラスを設けており、この学級は4年～6年生、各学年男女計15名から構成されているという。この学級には、2人の先生が配属されており、日本国籍を有する児童のみ入ることが可能である。つまり、外国籍を持つ児童は一般学級に入ることになる。

帰国児童学級の目的は以下の三つである。

- ①帰国した児童が日本の生活に馴染めるようにすること
- ②海外で得た知識やスキルをその児童の個性として伸ばすこと
- ③帰国生と一般児童が刺激し合い、互いに影響し合うこと

今回、私たちが対象にしようと考えていたのは、日本に住む韓国人児童、韓国に住む日本人児童だったため、対象とする児童とは少し違っていたが、児童の成長過程における文化交流の大切さを認識することができたため、ここにこの記録を残そうと思う。

帰国児童教育学級に入学できる児童の対象として、海外で日本人学校に通っていた者は入学できないという規定があるのだが、これは、現地校やインターに通っていた児童を優先して入学させるためだという。この学級に入学する生徒の大半はヨーロッパやアメリカからの帰国生が多く、韓国からの帰国生は少ない。これは、韓国に在住している日本人の多くは、将来、日本に帰ってくるケースが多く、現地校やインターに通う子供が少ないためではないかと考えられる。

校長先生のお話の中で印象的だったのは、先ほど学級の目的の③で挙げた、帰国生と一般児童がお互いに刺激し合う、といった点だった。帰国生の特徴としては、意見がはっきりしており、物事を見る目が複眼的、などが挙げられる。これらの特徴から、一般児童と時折衝突が起こったり、意見の食い違いが起こったりするケースがあるというが、校長先生は、この衝突こそが、生徒の成長を促すものだとおっしゃっていた。お互いにぶつかりあい、それを解決し乗り越えていくことで、帰国生にも一般児童にも柔軟性が身に付き、お互いの良い所を吸収していく、といった傾向がみられることから、この帰国児童学級

の存在意義が窺えるように思う。このように、それぞれ違うバックグラウンドを持った児童が互いに影響し合う、互惠の教育をめざすという点が今回のテーマに通じる大事なキーワードだと感じた。



写真3 付属小学校の教室にて



写真4 菅本品夫校長お話を伺う

3.2 訪問先2 東京韓国学校

在日韓国児童はどんな教育を受けているのかについて調べるため、東京韓国学校を訪問した。

当日、東京韓国学校の教頭先生に話を伺うことができた。教頭先生によると、東京韓国学校は1954年に開校したという。当初、民団中央本部の建物と共用し、初・中等部のみだったが、1962年に韓国から正式な学校として、認可を受けた。現在は初、中、高等部の三つがあり、学校の教育カリキュラムは概ね、韓国の一般的な学校と同じものであるようだ。

初等部は現在、イマージョン教育という英語と韓国語の二ヶ国語による教育が施されています。初等部卒業する時に韓日英のトリリンガルになる学生が多いようだ。

中等部からはほとんどの生徒が併設されている高等部へ進学する。しかし、初等部から外部への進学を希望する生徒の一部は有名国公私立高校へ進学している。そして、かつては韓国の大学に帰国生として入学を希望する学生がほとんどだったが、近年韓国政府は大学が年々特例入学制度の門戸を狭めてきている。そのため、日本の名門大学へ留学生として進学する生徒が急増しているとのことだった。それに対応して、学校は中、高等部において日本の上級学校への進路別のコースを設けているという。

そのほかに、東京韓国学校は生徒たちに韓国の伝統的な文化を学ばせ、定期的に、積極的に周囲の学校と交流しているとのことである。

4. 考察

4.1 日本側

まず、今現在も残っている外国人に対する差別などの調査では、大きな差別は見つから

なかった。しかしながら、自分の周りに、国家試験を受けるために帰化しようか悩んでいる在日韓国人の友人がおり、現実的に一部の人の人にとっては、少なからず差別が残っているように感じられる。また、事前知識として『GO』などの日本の朝鮮学校をモチーフに使っている映画などを見たが、勘違いの認識をしていることも我々の中にある、一種の差別につながっていく部分があるのではないかと感じた。もちろん、こういった映画などで得られる情報は興味を持つきっかけになることは否定できない。しかし、興味を持ったなら、もっと自分なりに知識を集めて、正しい認識を得ることが必要であるように思う。

東京韓国学校では、韓国の伝統的な文化を子どもたちに学ばせるなど、韓国で生活している韓国人学生徒と変わらないような教育を行っていると同った。また、受験戦争の厳しい韓国内と同様に受験に対するモチベーションの高い父母が多く、対策にもとても熱心な様子でした。イメージ教育など日本の普通の公立校に比べ、一足先を行く教育を行っているし、日本に居ながらにしての自国文化に関する接点の持ち方も大変積極的で素晴らしいと思った。しかし、自分が聞いた感想としては、日本の学校との交流会など以外にも、もう少し日本について知ってもらいたいという気持ちになった（もちろん私たちが聞き逃したところもあるかとは思いますが）。

そこで、お茶の水女子大学付属小学校で伺った、帰国生と一般児童がお互いにぶつかりあい、それを解決し乗り越えていくことで、帰国生にも一般児童にも柔軟性が身に付き、お互いの良い所を吸収していく、というような有意義な交流ができるのがいいと思った。もちろん、衝突しなくて済むならそれでいいと思うが、小さい頃のそういった衝突や多文化を目の当たりにすることで、理解が進み、将来、グローバルに活躍する素地を育むのではないかと考えられる。

4.2 韓国側

ソウル日本人学校の調査を通じて分かった学校側・児童側の四つの難しさと我々の暫定的結論について述べたい。

まず、家と学校が遠いことがある。

韓国に住んでいるほとんどの日本人家族は「二村洞（イチョンドン）」というところに住んでいる。家から学校までスクールバスが運行されているものの、二村洞（イチョンドン）から学校がある開浦洞（ケポドン）までは相当の道のりがあるので、早朝から登校準備をしなければいけないことと移動距離の時間的問題は、親にも、子供達にも難しいことである。そしてこれにより、子供達に放課後の余暇時間がとても少なくなる。日本人の多くがイチョンドンに居住している問題と共に余暇時間さえ持つことができない子供達にとって、韓国文化に適応するスキルを身につけることは、非常に難しいことだと思われる。

第二に、周辺の学校が交流を求めていることである。

現在、日本人学校はゲポドン周辺の韓国の小、中学校と文化交流を行っている。少なくとも年に2〜3回程度、交流活動をしているが、年1回だけでも、今後も継続して行うこ

とには限界があるだろう。日本人学校には交流エディターがいるものの一人だけで、韓国の学校には交流担当の教師など、制度が整っていない場合が少なくない。韓国日本人学校とのインタビューを通じて分かったのは、韓国学校との文化交流ができるかどうかは、韓国側の校長個人の認識と積極性によって全く異なるということだった。

第三は、日本人同士の交流に偏ってしまっていることである。

同様の状況により結局、外国人学校同士または日本人同士の範囲が狭いまま交流が行われる時がある。韓国側は、国内にいる外国人が韓国文化という異文化に排他的、防衛的だと考える場合も多いが、そのような状況の原因になるのはむしろわれわれ（韓国側）の認識と態度の問題かもしれない。

最後は、（どこの地域でもあることだが）国家間の問題が起こったときに標的にされやすいことである。

韓国と日本は地理的、外交的にとても近い関係にある。そのため、歴史の問題はいつも両国の間にあって、時に敏感になることがある。この事例は、ソウル日本人学校の学生の日常でも見つけることができた。日本人学校側と国内で居住している日本人児童の父兄を対象としたインタビューの結果、両国の葛藤がみられる場合は日本人児童がそれらの標的にされるそうだ。歴史的な問題を持つ国ならば、このような状況はよく見られるだろうが、今後は、このようなことは続くべきではないと思う。

「子どもは悪くないのに、子ども自身が引かなくてはならないという状況に」

問題になるのは、ソウル日本人学校の調査を通じて分かった以上の四つだけではない。指摘した四つのことを見るとみな異文化教育、多文化交流による我々の認識不足に始まり、日常的で細々しい要素まで今の制度の弱さがすべての原因をなしているように思われる。しかし、このような問題は、これからは児童たち自身で解決しなければならないと思う。今、行われている国際交流理解教育をきっかけに、児童達に世界化・多文化の認識を教え、もっと活性化させて、未来の国際時代社会の一員として世界をリードできる国際社会人を養成するようにしていくべきだと強く感じた。

5. 提言

子どもたちが、今後大人になり、将来を担っていく。彼らがグローバル化を円滑に進め、韓国と日本の関係をよくしていくことができる世代だと思われる。しかし、前述のように、「被害を受けた」と感じたり、つらい思いを経験したりすると、相手に対する感情を悪化させてしまうかもしれない。では、そうさせないために、そして子どもたちが友好的な感情を持てるようにするために、私たち大学生ができることは何だろうか。

私たち大学生は、大人と子どもたちのちょうど中間の世代である。まだ子どもの気持ちも少し分かるし、大人の抱える問題や歴史的な問題についても知っている。このような世代だからこそできるサポートがあると思う。

その一つとして、文化的な面では、ボランティアとして外国人学校で伝統の文化につい

て教えることで、文化交流への橋渡し役になればいいということだ。文化は自分の国のことや相手の国のことを知る上での第一歩となることができ、またナショナリティが反映されていることが多いため、その国に親しみを感じるきっかけとなるととても大事なものだということを、この実習を通じて改めて感じた。だから、このようなサポートも重要だと思う。

また、私たちが子どもたちにとってのカウンセラーの役割を担い、文化の違いやことばを上手く使えないことなどから生じる不安や子どもたちが抱える様々な悩みを聞き、一緒に向き合い、混乱や誤解を解決してあげることができたらいいとも思う。

個人でのサポートは難しいかもしれないが、大学のサークルや地域のグループもあるので、そこに積極的に参加していくことから始めるのもいいと思う。

<参考文献>

ソウル日本人学校 (2009年8月30日現在) <http://www.sjshp.or.kr/>

東京韓国学校 (2009年8月30日現在) <http://www.tokos.ed.jp/>

ウィキペディア「日本人学校」(2009年8月30日現在)

<http://ja.wikipedia.org/wiki/>

ウィキペディア「東京韓国学校」(2009年8月30日現在)

<http://ja.wikipedia.org/wiki/>

同徳企画に参加して

文教育学部人文科学科グローバル文化学環2年 新井杏子（環境グループ）

私は、8月9日(日)の同徳女子大学の企画に参加させていただきました。お茶大生は私しか行かないと知り、少し不安だったので迷いましたが、8日に同じグループの友達が誘ってくれたので、参加しました。参加して、本当に良かったと思っています。

当日は、朝池袋駅に集合して、丸一日鎌倉・横浜を観光し、大仏、鶴岡八幡宮、みなとみらいを廻りました。

同徳女子大生16人と同徳の先生方のなかで、日本人学生が1人だったということはすごく印象的な体験で、初めての状況でした。

日本で生活していると、外国の人はどうしても目立ってしまって、電車内などで注目されていることが多く感じられます。しかし、この日は、自分でも意外なほど「外国人」と一緒にいる、という違和感がありませんでした。これは、もちろんみんなの日本語が日本人と同じくらい上手だったことも一因かもしれないけれど、それ以上に、他のグループの人たちもたくさん私に話しかけてくれて、ファーストネームで呼んでくれたおかげで、みんなに溶け込んで過ごすことができたからだと思います。

セミナー中に思ったことを共有したり、お茶大生と話し合ったことを今度は韓国に学生に聞けたりと、全く壁を感じずに話せて、それまでは意識していなくても「日本人」と「韓国人」という距離感を持っていたのだということ、1人になってみて気づきました。9日に初めて分かったことがいくつもあって、韓国のみんなの優しい気持ちがはっきり伝わってきて、一連のセミナーを終えた後だからこそその同徳企画は、得るものが最も多かった日ではないかと思っています。客観的ではなく、はじめて自分の感情で実感できた気がします。

9日の一日観光は日韓合同のセミナーの終了後でしたが、この日に参加したことで今回のセミナーで私が得たことは大きく変わったと思っています。このような機会をいただいたことを本当に感謝しています。



第6回日韓大学生国際交流セミナーの 教育的効果と今後の方向性について —多文化理解の観点より—

西岡麻衣子(同徳女子大学大学院修士課程)

1. はじめに

日韓大学生国際交流セミナー(以下交流セミナー)は日韓の学生がお互いの文化を理解し、親睦を深めながら、グローバル時代に求められる文化リテラシーを育成することを目的として開催され、本年度で6回目を迎えた。今回筆者は、2009年8月3日から11日まで日本で開催された第6回交流セミナーにアシスタントとして参加し、両国の学生が(中国の留学生を含む)交流セミナーを通し、どのような気づきや変化を得たかについて、多文化理解の観点から調査を行い交流セミナーの教育的効果と今後の課題を探った。本稿は、観察者としての立場から今回の交流セミナーの総括として、その調査結果と考察の概略をまとめたものである。

2. 第6回日韓大学生国際交流セミナーの特徴

第6回交流セミナーの最も大きな特徴は、主要プログラムである日韓混成グループによる共同研究のテーマが、グローバル社会を意識した問題解決型テーマへと移行した点だと言える。「グローバル時代に世界のために日韓の大学生ができること」という地球市民として参加者全員が共有できる全体目標が掲げられ、世界が直面している問題に共に取り組むことで、真の意味での「共通目標による協同作業」¹⁾を通し、多文化理解および多文化社会での実践的能力の促進がより期待されるものとなっていた。また、事前準備の段階でメール交換やチャットに加えテレビ会議が導入され、直接交流の伏線としての間接交流もより充実した形となった他、合同合宿も2泊3日²⁾に延長され討論の時間や全体交流の時間が増設され、お互いの関係性を深めるための様々な取り組みが見られた。他にもグループメンバーの日韓の比率が同程度となるなど³⁾など交流の環境がより整備されていた。

3. 調査方法

3.1 調査対象者

調査対象者は韓国側参加者14名、日本側参加者約20名の計約35名である。参加者の内

1) 海外姉妹校間交流である交流セミナーの理論的枠組みとして、異文化間接触理論の「接触仮説」(Allport, 1954=1968)が考えられるが、中でも「共通目標による協同作業」が重要であるとされる。交流セミナーは一貫して日韓混成グループによる共同研究が主要プログラムとして設定されており、第5回には体験討論型へ移行するなどの改善がなされながら成果をあげてきたが、研究テーマが両国の比較に重点が置かれる傾向にあった。

2) 合同合宿は第5回交流セミナーより始められ、日数は1泊2日であった。

3) 日本側の人数が若干多いが、各グループの人数は合計7~9人(日本4~5人、韓国3~4人、中国0~1人)と平均してバランスの取れたグループ編成となっていた。

訳は、韓国側は同徳女子大学校日本語科 9 名、英語科 1 名、経営学科 1 名、国際経営学科 1 名、国史学科 1 名、食品栄養学科 1 名の計 14 名。日本側はお茶の水女子大学の多文化交流実習Ⅲ、Ⅳ受講者である文教育学部グローバル文化学環専攻者名 16 名（中国国籍の留学生 3 名含む）、副専攻者 4 名の計 20 名である。

3.2 手続き

交流セミナーの教育的効果を検証するため、交流セミナー前後において質問紙調査を実施した。本稿では分析の観点となる多文化理解を「異なる特定文化の知的理解と感性的理解⁴⁾」（多文化理解 1）、さらに多様な異なる文化に対応できる異文化基礎対応力である「多文化理解態度および能力⁵⁾」（多文化理解 2）が求められるものとし、前者を異文化間教育の「文化特定」、後者を「文化一般」の内容の理解と捉え、以下のように質問紙を作成した。また、筆者のアシスタントとしての観察記録とセミナー後に行われたインタビュー調査記録を内容分析の解釈の補助を得るための参考とした。

表 1 質問紙の構成と質問項目

<p>1. フェイスシート(セミナー前後) アンケート調査依頼文</p> <p>2. 多文化理解 1－日韓特定文化の理解尺度(セミナー前後) セミナー前後に同一質問紙項目である日韓文化理解に関し自己評価を行うことで特定文化の知的理解と感性的理解を検証する。5段階評価の評定尺度とそれに伴う記述式質問項目から成り、第6回交流セミナーのプログラムに基づいて作成された。日本側は「韓国」、韓国側は「日本」に対する項目となり以下は韓国側の質問項目である。</p> <p>I. [セミナープログラムに関連した日韓文化理解]に関して 14 項目</p> <p>1. 文化体験プログラム (①日本の伝統衣装である和服の一種である浴衣について知っている②日本の伝統音楽である箏曲について知っている③日本の伝統舞踊である日本舞踊について知っている)</p> <p>2. テーマ別共同グループ実習/報告会 (①日本のリサイクル事情について知っている②日本の外国人児童教育について知っている③日本における女性の社会進出の現状について知っている④日本の多文化共生の現状を知っている)</p> <p>3. 共同生活体験 (①日本人の大切に考える考え方や習慣について知っている②日本人の人間関係の特徴について知っている③韓国の生活事情について・日本の交通機関の特徴について知っている・日本料理の特徴について知っている・日本の食事のマナーについて知っている・日本の住宅様式について知っている・日本の女子大生の生活について知っている)</p> <p>※2 の共同グループ実習および 3 の共同生活は各選択式質問項目（5段階評定尺度）の後に記述式質問項目（「知っている内容について具体的な例を書いてください。」）が付記された。</p> <p>II. [日韓に対する態度]に関して 5 項目 (①日本に興味がある②日本文化が好きだ③日本文化をもっと体験したい④日本人に親しみを感ずる⑤日本人といっても、それぞれ個人の文化も持っている。)</p> <p>III. [日本語能力]に関して 5 項目（韓国側および日本側の留学生のみ） (①セミナーに参加することで、日本語を読む能力②聞く能力③話す能力④書く能力が向上する⑤日本語を話す自信がつく)</p>

4) 李(2009)の定義を援用。

5) 異文化間コミュニケーション能力(石井, 1997; 西田, 1998)、異文化対処力(山岸, 1997)、多文化コミュニケーション能力(宮本・松岡, 2000)、多文化理解態度(加賀美, 2006)など様々な名称で研究が進められている。

3. 多文化理解2 多文化理解態度および能力尺度 (セミナー前後)

第5回交流セミナーにおいて実施された自由記述式質問紙調査(西岡, 2009)において抽出された多文化理解に関する気づきや変化を先行研究(石井, 1997; 山岸, 1997; 西田, 1998; 宮本, 2000; 加賀美, 2006; 八代, 2008)と対照し構成要素の選定を行った後、先行研究の異文化コミュニケーション能力尺度、多文化理解尺度等を参考に、24要素、25質問項目からなる5段階の多文化理解態度および能力尺度を作成した。セミナー前後において文化一般の理解の側面である多文化理解態度および能力がどのように変化したかを検証する。

24要素は情緒面5つ(「オープンな心」「共感する」「偏見の除去」「尊敬心も持つ」「不安感の軽減」「興味」「自己受容」)、認知面5つ(相手文化の理解する)「自文化の理解する」「両国文化の共通点と差異点の認識」「多様性を認める」「自己を顧みる)、行動面12(「言語操作」「非言語操作」「傾聴」「友人関係構築」「接触的/自主的行動」「意見の主張」「合意点を探る」「コンフリクトの重要性」「判断保留」「寛容」「忍耐」「協働性)」であり、「興味」が「自文化への興味」と「外国文化への興味」の2つの項目になっているため、25質問項目となっている。質問項目は以下の通りである。

1. 自分の国の文化に興味を持っている
2. 外国の文化に興味を持っている
3. 他の文化の人と接する時、心を開くようにしている
4. 他の文化の人と接する時、不安を感じる
5. 他に文化の人と接する時、その文化圏の言葉を重視している
6. 他の文化の人と接する時、身振りや表情を重視している
7. 他の文化の人と友人関係を築く努力をしている
8. 他の国の文化に対し偏見を持たないようにしている
9. 他の国の文化や伝統に敬意を払うようにしている
10. 他の国の人と共通の目標に向かって協力して問題を解決できる
11. 他の国の人と接する時、その国文化を知る必要があると思う
12. 他の国の人と接する時、自分の国の文化について知る必要があると思う
13. 他の文化の人と接する時、自文化との共通点と差異点の両面を大切に
14. 文化の違う人々の間でも自分の意見を主張することができる
15. 文化の違う人々の間でも、リーダーシップを発揮し接触的に行動できる
16. 文化、考え方、価値観の違いは当然だと思える
17. 意見の違いがある時、賛成か反対かの判断を保留することができる
18. 意見の違いがある時、自分と相手の考えの妥協点を調整することができる
19. 意見の違いがあっても自分の主張を抑え我慢することができる
20. 他の人の意見を聞いて自分の考えを修正することができる
21. 他の人と意見の衝突があってもそれを恐れない
22. 相手の経験をその人の立場に立って理解しようとする
23. 相手が言おうとすることをいつも接触的に聞いている
24. 自分の経験を友人に話したり日記につけたりしていつも振り返るようにしている
25. 欠点もあるが自分のことが好きだ

※質問項目は順序不同。また、項目の信頼性の問題は、パイロット調査において信頼性係数(クロンバック α 係数)の算出により検討を行い、0.79と高い数値を得たためそのまま使用した。

4. 参加者の背景(セミナー前)

セミナー前に実施し、参加の動機や海外経験、外国語能力、異文化接触の有無について尋ねた。

5. 交流セミナー総評(セミナー後)

セミナー後に実施し、参加を通しての気づきや学び、プログラムに関連したセミナーの感想や満足度、要望などを自由に記述してもらい、参加者の意識の変化や変化要因について考察する。

※なお質問紙は、韓国側に関しては、back-translationの手続きを経て翻訳された韓国語の質問項目および回答となる。

4. 調査の分析と結果

<多文化理解1および2の量的調査総合結果>

日本側は不備のあった2名を除く18名、韓国側は参加者全員の14名の計32名を分析対象とし、多文化理解に関する尺度得点の平均値の差の検定を行った結果、セミナー前後の平均値に有意差が確認された。

表2 多文化理解総合得点平均値⁶⁾

	セミナー前		セミナー後		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
多文化理解全体	160.88	13.05	179.63	14.82	-8.784***
多文化理解1	60.38	7.90	73.84	7.11	-10.375***
多文化理解2	100.50	7.80	105.78	9.09	-4.581***

*** $p < .001$

<多文化理解 1—量的調査結果>

・韓国側

次に、国別に多文化理解 1 を各カテゴリーごとに t 検定を行った結果、訪問した韓国側は、II. [日本文化に対する態度]を除く全カテゴリーにおいて有意差が確認された。

表 3 多文化理解 1 カテゴリー別 韓国側平均値

カテゴリー名	セミナー前		セミナー後		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
I 日本文化理解 1 伝統文化	7.86	1.88	10.43	1.99	-6.000***
2 研究テーマ	9.79	2.29	15.36	1.95	-7.694***
3 生活	23.21	4.48	27.64	3.25	-5.335***
II 日本文化に対する態度	22.00	2.51	22.43	2.03	-0.791
III 日本語能力	18.50	2.82	20.64	1.98	-2.287*

*p<.05, **p<.01, *** p<.001

各項目においては、I. [日本文化理解]カテゴリーの1. 「伝統文化」および2. 「共同研究」の全項目、3 「共同生活」による<人間関係の特徴>、<交通>、<料理>、<食事のマナー>、<女子大生の生活>の理解度を測った5項目、II. [日本に対する態度]カテゴリーの<日本人に親しみを感じる>、III. [日本語能力]カテゴリーの<会話能力><会話能力への自信>の2項目、合計15項目において有意差が認められた。

表 4 多文化理解 1 項目別 韓国側平均値

日本に関する質問項目		セミナー前		セミナー後		t 値
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
I. 1-①	伝統衣装	3.93	0.83	4.21	0.80	-2.280*
1-②	伝統音楽	2.29	0.83	3.57	0.85	-6.624***
1-③	伝統舞踊	1.64	0.84	2.64	0.93	-3.606**
2-①	リサイクル事情	2.93	1.14	3.71	0.83	-2.474*
2-②	外国人児童教育	1.93	1.21	4.00	0.68	-7.772***
2-③	女性の社会進出	2.57	0.94	4.00	0.68	-4.907***
2-④	多文化共生	2.36	0.84	3.64	1.01	-6.624***
3-①	習慣	3.79	0.80	4.14	0.54	-1.794
3-②	人間関係の特徴	3.43	0.76	4.00	0.68	-4.163**
3-③-1	交通手段	3.50	0.86	4.43	0.65	-5.643***
3-③-2	料理	3.64	0.75	4.29	0.61	-3.229**
3-③-3	食事のマナー	3.21	1.12	3.93	1.21	-2.500*
3-③-4	住宅様式	3.29	1.27	3.43	0.65	-0.434
3-③-5	女子大生の生活	2.36	0.84	3.43	0.76	-4.837***
II. 1	日本に興味がある	4.36	0.75	4.57	0.51	-1.385
2	日本文化が好きだ	4.29	0.73	4.21	0.58	0.366
3	日本文化を体験したい	4.71	0.47	4.57	0.51	1.000
4	日本人に親しみを感じる	3.93	0.83	4.43	0.51	-2.876*
5	個人によって異なる	4.71	0.61	4.64	0.50	0.366
III. 1	読解能力	3.57	0.76	3.93	0.83	-1.161
2	聴解能力	3.93	0.92	4.36	0.63	-1.710
3	会話能力	3.86	0.66	4.36	0.50	-2.188*
4	作文能力	3.29	1.14	3.64	0.93	-0.836
5	会話力への自信	3.86	0.66	4.36	0.50	-2.463*

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

6) 表 2 の総合得点平均値においてのみ日本側に中国の留学生 2 名が含まれた。表 5 以降全ての日本側の国別平均値は中国の留学生を除かれ、日本人 16 名が分析対象となる。中国人留学生に対する詳細な調査は今回行わなかった。

・日本側

一方、日本側は表4が示すよう全カテゴリーにおいて有意差が確認される結果となった。

表5 多文化理解1 カテゴリー別 日本側平均値

カテゴリー名	セミナー前		セミナー後		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
I. 韓国文化理解1 伝統文化	8.56	1.86	9.88	1.26	-3.016**
2 研究テーマ	6.94	1.65	14.63	2.94	-9.678***
3 生活	21.38	3.96	24.25	3.94	-2.228*
II. 韓国文化に対する態度	21.94	1.77	23.69	1.45	-3.955**

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

各項目においては、I.[韓国文化理解]カテゴリーの1.「伝統文化」の〈伝統衣装〉、2.「共同研究」の4項目全て、3.「共同生活」の〈女子大生の生活〉、II.[韓国文化に対する態度]カテゴリーの〈韓国に興味がある〉〈韓国文化が好きだ〉〈韓国文化に親しみがある〉の3項目と、合計9項目において有意差が認められた。

表6 多文化理解1 項目別 日本側平均値

韓国に関する質問項目		セミナー前		セミナー後		t 値
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
I. 1-①	伝統衣装	3.50	0.89	4.19	0.40	-3.467**
1-②	伝統音楽	1.50	0.89	2.00	0.82	-1.936
1-③	伝統舞踊	3.56	0.81	3.69	0.87	-0.522
2-①	リサイクル事情	1.94	1.34	3.31	1.14	-4.044**
2-②	外国人児童教育	1.50	0.82	3.69	1.01	-9.609***
2-③	女性の社会進出	1.94	1.00	4.00	0.63	-7.342***
2-④	多文化共生	1.56	0.63	3.63	1.03	-6.398***
3-①	習慣	3.25	1.00	3.81	0.40	-2.058
3-②	人間関係の特徴	3.63	0.81	3.81	0.75	-0.613
3-③-1	交通手段	2.19	1.17	2.63	1.09	-1.385
3-③-2	料理	4.00	0.52	3.81	0.83	1.379
3-③-3	食事のマナー	3.63	0.81	3.75	0.58	-0.620
3-③-4	住宅様式	2.44	1.03	2.63	1.20	-0.643
3-③-5	女子大生の生活	2.25	1.13	3.81	0.91	-3.930**
II. 1	韓国に興味がある	4.63	0.50	4.94	0.25	-2.611*
2	韓国文化が好きだ	3.94	0.68	4.44	0.51	-2.739*
3	韓国文化を体験したい	4.75	0.45	4.88	0.34	-1.464
4	韓国人に親しみを感じる	4.06	0.68	4.81	0.40	-4.392**
5	個人によって異なる	4.56	0.51	4.63	0.50	-0.436

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

以上、韓国側は全質問項目24項目中15項目、日本側は19項目中9項目に有意差が認められる結果となり、交流セミナーが特定文化の理解を促す可能性が示唆された。特に訪問した韓国側の参加者にとっては、毎日が新しい経験と出会いの連続であったため、変化も顕著に表れる結果となった。一方、日本側は自国でのセミナーということもあり、韓国側に比べ変化項目が少ないが、[韓国文化に対する態度]に変容がみられ、今回の直接交流を通し、日本側の韓国に対する関心度の高まりがうかがえた。また、両国とも体験に基づく

共同研究による知識の増幅が目立ち、今後の知的理解に繋がる成果を得たことが伺え、これは次に示す質的調査からも支持された。

〈多文化理解1一質的調査結果〉

多文化理解1の効果を質的調査により検証するために、記述式質問項目の内容分析を行った。分析項目は、共同グループ実習および共同生活に関する選択式質問項目の後に付記された記述式質問項目(「知っている内容について具体的な例を書いてください。)」であり、回答により得た記述量(1文を1単位として算出)をセミナー前後で比較した。その結果、日本側は記述量が増加し、韓国文化の特徴を交流を通し体験的に得ていることが示された。また韓国側は変化は見られなかったが内容が多様化しており、知識の増幅が見られた。

表7 共同研究のテーマ別理解(日本側)

	セミナー前	セミナー後
2-1 韓国における環境リサイクル	1 ・残飯の使いまわしの問題	7 ・机の脚が折れるまで ・食品リサイクルに対する資金不足。 ・日本と同じような食品リサイクル工場がある。 ・環境税。・家庭のごみが問題。 ・政府の援助が必要。 ・残飯処理機。
2-2 韓国における外国人児童教育	1 ・受験戦争がすごい	5 ・イマージョン教育を行っているところもある。 ・東京韓国学校は国際的人材育成に力を入れている。 ・韓国の日本人学校は現地学校と交流が少ない。 ・日本人学校では、母国に帰った時にいかにスムーズになじめるかが重視される。 ・日本人学校では、日本のカリキュラムにのっとった教育が行われている。
2-3 韓国における女性の社会進出	1 ・専業主婦への偏見。	10 ・日韓とも出産、育児が社会進出の妨げになる。(3) ・保育所が不足している。(2) ・非正規雇用が多い。 ・教育費が高く共働きで育児に時間が取れない。 ・育児休暇の男性が取得が日本よりも積極的。 ・「幸せな女性」を考えるなど女性向けの公募がある。 ・母親の就業と子供の周囲との適応の問題。
2-4 韓国における多文化共生	0	15 ・日本人が多く住んでいる地域がある。(5) ・ソウルにはグローバルビレッジセンターがある。(4) ・共存はしていても共生とまではいかない状態。(2) ・語学の問題が非常に大きい。 ・韓国語支援の施設がある。 ・外国人支援施設はあるが、あまり知られていない。 ・外国人と韓国人の交流が少ない。
3-1 韓国の習慣	13 ・目上の人を敬う。(6) ・儒教の考えが根付いている。(5) ・祖先、家族、親せきを大切に。(2)	17 ・目上の人を敬う。(5) ・他人への手厚いもてなし。(3) ・家族を大切に。(2) ・儒教の考えを大切に。(2) ・敬語のような上下関係。・1shot お酒の飲み方。 ・身内であるなしにかかわらず年上に敬語を使う。 ・客として招かれた先で完食するのは失礼。 ・年上の人がいる席では、お酒を飲むときは横を向く

3-2	16	16
韓国の人間関係	<ul style="list-style-type: none"> ・友情にあつい。(3) ・積極的(3) ・初対面でもすぐ友達になれる。(2) ・人なつっこい ・細やかな心配り ・相手への関心をアピール ・直球で物を言う。 ・よく飲みに行く。 ・登山が好き。 ・同性がベタベタしている。 ・目上の人が絶対。 	<ul style="list-style-type: none"> ・社交性がある人が多い。(2) ・他人に親切。(2) ・思ったことを率直に伝える。(2)・上下関係を重視。 ・社会全体での付き合い。・人なつっこい ・友達との距離が日本人より近い。・仲間意識 ・会ったばかりでも積極的にいろいろ聞く。 ・同学年や近い関係でも、まず人に会ったら年齢を聞き、それに応じた呼び方を決める。 ・年齢など上下の区別は呼び方ではっきりしている。 ・年の差の問題でなく1つ上でも固い関係なら非常に厳しく、30歳上でも仲良しなら気楽な場合もある ・すぐに友達として親しくなる。

表8 共同研究のテーマ別理解（韓国側）

	セミナー前	セミナー後
2-1	10	9
日本における環境リサイクル	<ul style="list-style-type: none"> ・燃えるゴミと燃えないゴミ。(3) ・リサイクル状況が細部化されている。 ・曜日ごとのゴミ出し。 ・生ゴミは別にしない。 ・ペットボトルの蓋収集。 ・ゴミの分別が多い。 ・地域によってゴミ出しが異なる。 ・手紙、ビン、カン、ペットボトルなどの分別。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生ゴミなどは動物の飼料などで利用。(2) ・燃えるゴミと燃えないゴミ。(2) ・コンビニ店の弁当のリサイクル。 ・ゴミの分別が多い。 ・地域によってゴミ出しが異なる。 ・ペットボトルの分類が徹底。 ・リサイクルセンターが多い。
2-2	3	4
日本における外国人児童教育	<ul style="list-style-type: none"> ・海外に多数日本人学校があり教師が派遣さる。 ・日本人学校に通う学生は本国への帰国後スムーズに適應できるよう文部科学省が指定したカリキュラムと進度に合わせて教育される。 ・帰国を前提とした日本人学校、また多文化、国際化教育を中心とした国際学校、外国人学校など、設立の目的によって異なる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本にある韓国入学校はグローバルリーダーを育てている。(2) ・韓国には日本人学校があり、様々な活動をしている。 ・東京韓国入学校と朝鮮学校の違い。
2-3	9	11
日本における女性の社会進出	<ul style="list-style-type: none"> ・日本も女性の社会進出が進んでいる(2) ・派遣が多い。・女性の地位が相対的に低い。 ・他の国に比べ少ない。・韓国より進んでいる ・韓国同様、女性の社会進出は困難。 ・韓国同様、女性の社会進出は年齢別に見るとM字を描く。(出産などで急激に下がる) 	<ul style="list-style-type: none"> ・韓国同様、出産、子育ての問題がある。(3) ・韓国と類似(2) ・公的機関と企業では状況が違う。 ・保育施設の不足。・派遣 ・韓国同様、女性の社会進出は困難。 ・寿退職は減っているようだ。・制度的整備への努力。
2-4	7	5
日本における多文化共生	<ul style="list-style-type: none"> ・学校や会社でも外国人を受け入れている。(2) ・新大久保に韓国街、横浜に中華街がある。(2) ・日本も韓国同様居住外国人が増えている。 ・韓国より多文化共生が進んでいる。 ・欧米諸国でないアジア人には差別がある 	<ul style="list-style-type: none"> ・アイデンティティの問題。 ・外国人の社会保障制度など、韓国より開かれている。 ・共存と共生の区別。 ・韓国に比べ、異文化へ拒否感がない。 ・新大久保以外では住みにくい面があるようだ。
3-1	17	14
日本の習慣	<ul style="list-style-type: none"> ・他人に迷惑をかけまいとする。(7) ・本音と建前。(2) ・人の意見を無視しない。 ・時間観念が徹底。 ・胸の内を明かさない。 ・目上に敬語を使う。・自国化に優れている。 ・伝統文化を大切にす。・前例を重視する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・他人の迷惑をかけない。(5) ・謝罪をよくする。(2) ・人の意見を重視する。 ・感謝の表現。 ・学習時に一緒に行動することを重要視。 ・他の人の意見をよく聞く。・時間を守る。 ・流行より個性を重視する。・節約の習慣。
3-2	15	8
日本人の人間関係	<ul style="list-style-type: none"> ・私生活に干渉しない。(4) ・ソトとウチの概念。(2) ・親しくなるのに時間がかかる。(2) ・公と私を徹底的に区別する。(2) ・個人的志向が強い。(2) ・お互いの意見を合わせる。 ・距離を置いて付き合う。 ・広くて薄い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・傷つけにないよう気を使う。 ・深い関係を好む人もいるし好まない人もいる。 ・情があつく、あたたかい。(2) ・自分の意見は先に言わない。 ・個人主義の傾向がある。 ・「언니」という呼称を使わないので、年の差があっても皆友達のようなのだ。 ・先輩と後輩間の礼儀がある。

＜多文化理解 2—量的調査結果＞

次に、多文化理解 2 の効果を検証するため多文化理解態度および能力尺度の各 25 質問項目の平均得点に対し、測定時期（セミナー前後）×参加者国籍（日本、韓国）の 2 要因分散分析を行った。その結果、時間主効果として 1%水準で「自文化への興味」「不安感の軽減」「非言語操作重視」「協働性」「傾聴」の 5 要素、5%水準で「言語操作重視」「友人関係構築」「尊敬心」「意見の主張」「多様性」「寛容」「共感」「自己受容」の 8 要素と、合計 13 要素に有意差が認められた。国籍主効果は、「言語操作」「自己内省」のみで、どちらも韓国側のほうが平均値が高かった。また、「オープンな心」「コンフリクトの重要性」において交互作用が認められた。

表 9 多文化理解 2 時間（セミナー前・後）×国籍（韓国・日本）の 2 要因分散分析

	国籍	セミナー前		セミナー後		時間主効果 F 値	国籍主効果 F 値	交互作用 F 値
		平均値	標偏 偏差	平均値	標準 偏差			
1. 自文化への興味	韓国	4.14	0.77	4.50	0.65	7.489**	0.803	0.004
	日本	4.31	0.70	4.69	0.48			
2. 外国文化への興味	韓国	4.64	0.50	4.57	0.51	0.001	0.729	0.316
	日本	4.69	0.48	4.75	0.45			
3. オープンな心	韓国	4.57	0.65	4.43	0.65	1.505	0.091	4.877*
	日本	4.19	0.83	4.69	0.60			
4. 不安感の軽減	韓国	2.93	0.83	3.71	0.61	10.420**	1.027	0.046
	日本	2.69	1.08	3.25	1.07			
5. 言語操作重視	韓国	4.14	0.66	4.50	0.94	4.238*	10.844*	0.043
	日本	3.31	0.95	3.75	0.78			
6. 非言語操作重視	韓国	4.07	0.73	4.57	0.65	6.357**	0.094	0.706
	日本	4.13	0.62	4.38	0.96			
7. 友人関係構築	韓国	3.86	0.77	4.00	1.04	5.158*	1.744	1.329
	日本	4.06	0.77	4.50	0.63			
8. 偏見の除去	韓国	4.54	0.51	4.79	0.43	3.941	1.678	0.273
	日本	4.37	0.62	4.50	0.63			
9. 尊敬心	韓国	4.29	0.61	4.57	0.76	4.330*	1.124	0.019
	日本	4.50	0.63	4.75	0.45			
10. 協働性	韓国	4.07	0.73	4.71	0.47	11.603**	2.843	0.002
	日本	3.75	1.00	4.37	0.62			
11. 相手文化の理解	韓国	4.57	0.51	4.79	0.43	1.988	0.169	0.138
	日本	4.56	0.51	4.69	0.48			
12. 自文化の理解	韓国	4.86	0.36	4.86	0.54	0.165	0.762	0.165
	日本	4.69	0.79	4.63	0.81			
13. 共通点と差異点の認識	韓国	4.29	0.91	4.50	1.09	0.250	0.280	0.830
	日本	4.56	0.51	4.50	0.73			
14. 意見の主張	韓国	3.79	0.80	4.29	0.61	5.122*	0.029	0.105
	日本	3.81	0.98	4.19	0.66			
15. 積極的行動	韓国	3.57	1.02	3.71	0.73	0.331	2.321	0.051
	日本	3.19	0.75	3.25	1.07			
16. 多様性	韓国	4.21	0.70	4.43	0.65	4.919*	0.302	0.171
	日本	4.06	0.44	4.37	0.62			
17. 判断保留	韓国	4.00	0.68	4.00	0.88	0.138	0.238	0.138
	日本	3.94	0.68	3.81	1.05			
18. 合意点を探る	韓国	3.93	0.73	4.21	0.70	0.068	0.001	3.709
	日本	4.25	0.86	3.88	0.96			
19. 忍耐	韓国	3.71	0.73	3.86	0.95	0.047	0.065	0.308
	日本	3.75	1.00	3.69	0.79			
20. 寛容	韓国	4.00	0.88	4.36	0.75	6.399*	0.187	0.028
	日本	4.13	0.72	4.44	0.63			
21. コンフリクトの重要性	韓国	3.79	0.89	3.36	0.63	0.320	1.678	9.217**
	日本	2.88	1.20	3.50	0.89			
22. 共感	韓国	4.29	0.83	4.57	0.65	5.060*	0.841	0.022
	日本	4.13	0.50	4.37	0.50			
23. 傾聴	韓国	4.29	0.83	4.57	0.65	7.656**	0.069	0.569
	日本	4.13	0.72	4.63	0.50			
24. 自己内省	韓国	4.07	1.14	3.86	1.17	0.752	4.752*	0.226
	日本	3.13	1.03	3.06	1.34			
25. 自己受容	韓国	4.14	0.95	4.29	0.91	5.924*	0.830	1.190
	日本	3.75	0.86	4.13	0.81			

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

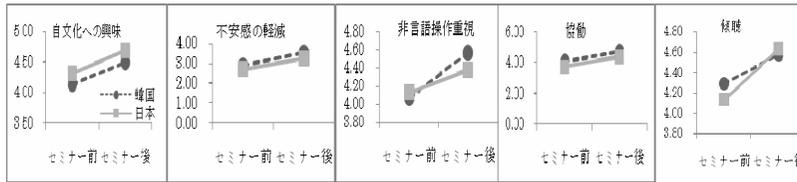


図1 1%水準で時間主効果がみられた要素

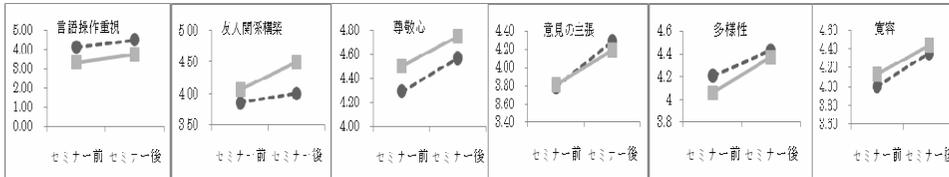


図2 5%水準で時間主効果がみられた要素

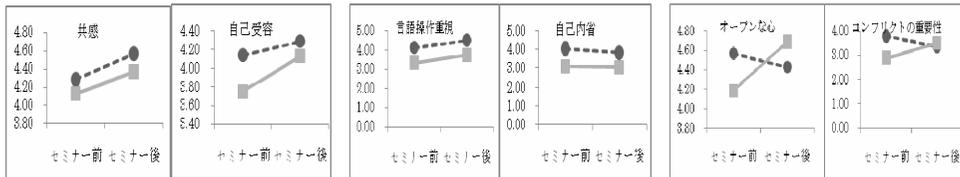


図3 国籍主効果がみられた要素 図4 交互作用がみられた要素

<多文化理解2-質的調査結果>

質的側面から多文化理解2の効果の検証を行うため、日本側18名、韓国側14名が提出したセミナー後の感想文形式の自由記述から、多文化理解に関連のある気づきや変化についてのコメントを取り出し、多文化理解態度および能力の24各構成要素と対照を行った。自由記述の分析項目は「交流セミナーの活動プログラムに関して」「セミナー全体に関して」である。両国とも「親しくなれた、仲良くなれた、楽しかった」など共に過ごし体験を共有することで、距離を縮め友情を育むことができた喜びを綴っている記述など肯定的な感想が多く見られた。表8は取り出された主な記述例である。

表10 多文化理解態度および能力とセミナー全体の感想による気づきや変化

多文化理解態度・能力	関連する自由記述
共感する	<ol style="list-style-type: none"> 「韓国は国を大切にしているけど、その気持ちは私にも自然にあるものだと感じた。」(日本) 「グループ実習は普段の友達との会話ではない深いディスカッションができる。国が違うとはいえ、意見や考えには共通した部分、共感できる部分がありすごく嬉しいと思った！」(日本) 「日本のメンバーと一緒にいろいろなものを見て、話し、感じることはお互いの間に共感を生みとてもよかったし、日本という国へ溶け入っていく気分だった。」(韓国)
偏見の除去	<ol style="list-style-type: none"> 「韓国の人はこうだという思い込みみたいなのがあったが、いろいろな人がいて、しかもみんなとてもいい人だと思うようになった。」(日本) 「日本人は他人に対する壁が高く、人間関係に距離を置くと思っていたが、人によって違うし同じ大学生だなと思った。」(韓国) 「本や授業で習った日本人の姿と実際に経験した姿が異なりいろいろ勉強になった。」(韓国)

情 緒	尊敬心を持つ	——
	不安感の軽減	7. 「初めて日本にある韓国のお店に韓国人の学生さんと一緒に行って、インタビューをして実習前に存在していた壁が薄くなった気がする。前より韓国が身近になった。」(日本) 8. 「始めは漠然とした不安があったが、一緒にご飯を食べ、お風呂に入り、討論し、おしゃべりして、遊びに行っただけの経験がそれを取り除き、国を超えた友情が芽生えた。」(韓国)
	オープンな心	9. 「韓国の学生たちはすごくフレンドリーで本当にあたたかい、だから私もオープンになり、とても心の入った交流ができた気がしています。」(日本) 10. 「心を開き、私達を受け入れてくれ共通点多かった。」(韓国)
	興 味	11. 「本などの媒体を通じてではなく、実際に韓国の学生と仲良くなり、話を聞いたりして、刺激されて、世界で最も興味のある国と文化になった。」(日本) 12. 「韓国をもっと知りたいと思った。韓国へ行きたいと強く思っています。」(日本) 13. 「接触することによって、相手の文化をもっと知ってもっと体験したいと思うようになった」(中国) 14. 「伝統文化体験や群馬への観光で日本の伝統文化への関心が高まった。」(韓国)
	自己受容	15. 「両国についての調査、経験を通じて自分自身が成長したと感じた」(日本) 16. 「日本人の友達作り、日本文化理解、日本語での発表を通し自分に自信を持てた。」(韓国)
認 知	両国文化の 共通点と相 違点の認識	17. 「日本と似ているんだろうなというぼんやりしたものだったが、類似点と異なる点を確認しより親しみが増した。」(日本) 18. 「両国の共通点と差異点を知るいい機会だった。討論しながら、日本のいい意見を韓国へ、韓国のいい意見を日本へ活用すれば両国が発展できるだろうと思った。」(韓国)
	相手文化を知る、 理解する	19. 「大久保と一緒に歩くことで韓国の食文化を学べた。」(日本) 20. 「韓国の学生と密に関わることから、韓国を知り実感できた。」(日本) 21. 「日本文化について、生活を通していろいろ知ることができた。」(韓国) 22. 「野外調査で生の日本の実態を知った。」(韓国)
	自文化を知る、 理解する	23. 「他の文化と比較することで自文化の特徴を認識できるようになった。」(日本) 24. 「韓国にもハングル・韓服など興味深い文化がいろいろあると思った。」(韓国)
	多様性を 認める	25. 「意見は日本人、韓国人、中国人で分かれるというより個人によって分かれるのだなと実感した。」(日本) 26. 「韓日両国がお互い違う立場での考え、意見、疑問点などが興味深く、多様な場合を考えてみる事ができた。」(韓国) 27. 「討論の時間に意見交換をしながら、自分が考えられなかった意見が提示されるのを見て、違う文化圏の人との中ではいろいろな考えが出てくるのだなと思い興味深かった。」(韓国)
	自己を顧みる	28. 「当り前のように感じていた自分の文化を見つめ直したいと思いました。」(日本) 29. 「反省する点多かった。それを知れただけでもセミナーに参加した意味はある。」(日本) 30. 「韓国文化について自分はよく知っていると思ったが、日本人の友達に聞かれてもほとんど答えてあげられず、伝統文化を含め、自国の文化についてもっと詳細に知らなければならぬと思った。」(韓国)
行 動	言語操作	31. 「韓国語をもっと話せるようになりたい！」(日本) 32. 「日本語で自分の意見を話し、相手があなづき理解してくれることがとても大きな経験になった。」(韓国) 33. 「日本語をもっと一生懸命勉強しようと思った。」(韓国)
	非言語操作	——
	友人関係構築	34. 「生活を常に共にすることで、日韓の違いを感じないくらい仲良くなった。」(日本) 35. 「国が違って女子大生として共通点が多く、理解しようと努力すれば友人になれると思った。」(韓国)
	傾 聴	——
	コンフリクト	——
	合意点を探る	36. 「外国の人と意見をかわして、一つの形にするための過程がとても有意義だった。」(日本) 37. 「日本の友達と同じ主題でお互いの考えや意見を調整し、結論を導き出す過程がよかった。」(韓国) 38. 「意見をまとめることが難しかった。」(日本/韓国)
	意見の主張	——
	判断保留	——
	積極的/自発的行動	39. 「グループ活動に積極的に参加できた。」(韓国) 40. 「同徳企画の横浜鎌倉観光に一人で参加して少し不安だったが、参加して本当によかった。」(日本)
	寛容 忍耐	41. 「討論やインタビューの時、(韓国の学生たちが)人の意見を一度聞き入れてから、自分の主張をしているのを見て、控えて配慮があり他の人に優しいと感じた。」(日本)
協働性	42. 「大変なことを皆で乗り越えることで、日韓が一丸となって協力できた。」(日本) 43. 「発表会という目標に向かって皆が一つになり話し合いができた。」(韓国)	

以上、多文化理解態度および能力の 24 要素のうち、情緒面においては「共感する」「偏見の除去」「不安感の軽減」「自己開示」「興味」「自己受容」、の 6 要素、認知面においては「両国文化の共通点と差異点の認識」「相手文化を知る、理解する」「自文化を知る、理解する」「多様性を認める」「自己を顧みる」の 5 要素、行動面においては「言語操作重視」「友人関係の構築」「合意点を探る」「積極的/自発的行動」「寛容」「協働性」の 6 要素と、計 17 要素に関連のある記述を得ることができた。

5. 考察

全体的な結果として、先述の表 1 で示したように多文化理解に関する総合得点平均値の差の検定において、1%水準でセミナー前後に有意差が確認されが、特定文化の理解と多文化理解態度および能力各々について考察を行っていく。

5.1 特定文化の理解の考察

多文化理解 1（特定文化理解）を各カテゴリーごとに結果および考察をまとめると次のようになる。

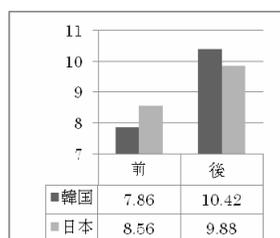


図 5-1 伝統文化理解平均値

I. [日韓文化理解]-1 伝統文化

平均値の差の検定の結果、韓国側は 0.1%、日本側は 1%水準で有意差が認められた。主なプログラムが日本文化体験に重点が置かれていたため韓国側がより変化が表れる結果となったが、日本側は自国の伝統文化を振り返る効果が見られた。今後はより双方の文化体験プログラムが望まれる。

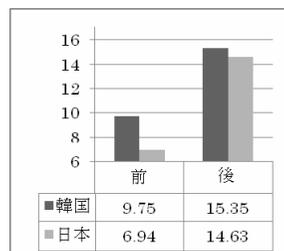


図 5-2 研究テーマ理解平均

I. [日韓文化理解]-2 共同研究テーマ

平均値の差の検定の結果、両国とも 0.1%水準で有意差が認められ、共同研究を通し体験に基づく知識の増幅が目立ち、今後の知的理解に繋がる成果が得られたことが伺えた。質的調査からも同様の結果が得られ、日本側は新しい知識の習得が目立ち、韓国側は事前調査に力を入れた形跡から、実地調査による内容の深化の様子がうかがえた。

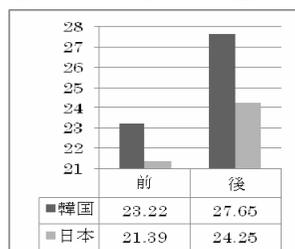


図 5-3 生活文化理解平均値

I. [日韓文化理解]-3 生活

平均値の差の検定の結果、韓国側は 0.1%、日本側は 5%水準で有意差が認められた。特に訪問した韓国側にとっては、毎日が新しい経験と出会いの連続であり変化も顕著に表れたと思われる。質的調査からも気づきや発見を従来の知識と照らし合わせ日本文化理解に関する新たな理論の再構築を試みる様子がうかがえた。日本側は量的調査では変化があまり見られなかったが、質的調査では韓国文化の習慣や特徴など様々な気づきを得ていることが明らかになった。

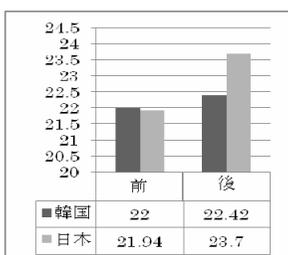


図 5-4 態度平均値

II. [相手文化に対する態度]

平均値の差の検定の結果、日本側に 1%水準で有意差が認められた。韓国大学生との直接体験を通して韓国をより身近に感じ関心度が高まったことがうかがえる。韓国側も「親しみを感じる」において有意差が見られ双方ともより肯定的な態度が形成されたことが示された。

以上、効果がみられなかった項目⁷⁾もあるが、質的調査からも様々な気づきを得ていることから、総じて交流セミナーが、参加者双方の特定文化の理解（韓国側は特に知的理解、日本側は特に感性的理解）を促すことが示唆された。

5.2 多文化理解態度および能力の考察

多文化理解態度および能力を測る多文化理解 2 においては、先述のとおり量的調査において合計 13 の要素に時間主効果の有意差が認められた。これらすべての要素には、交互作用の有意差がみられないことから韓国側日本側双方に同様の効果が生じたと考えられる⁸⁾。また、質的調査の自由記述により抽出された 17 要素を考慮すると、多文化理解態度および能力の 24 構成要素のうち 21 要素に効果的な影響があったことが示されたと言える。(表 9)

表 11 量的質的両調査から効果が見られた要素

	両調査	量的調査	質的調査
情緒	・共感 ・不安感軽減 ・興味 ・自己受容	・尊敬心	・偏見の除去 ・自己開示
認知	・多様性を認める		・共通点と差異点の認識 ・自己を顧みる ・相手文化の理解・自文化の理解
行動	・言語操作重視 ・寛容 ・友人関係構築 ・協働性	・傾聴 ・意見の主張 ・非言語操作重視	・合意点を探る ・積極的/自発的行動

つまり、参加者たちは共同生活を通して親交を深めていく中で、セミナー前に感じていた異文化に対する不安や偏見を解消し、文化の多様性を肯定的に認識しながら、相手の立場で物事を考え、互いの文化を尊重する態度の重要性をより意識して行ったと思われる。また共同研究においては、多様な意見調整の難しさ意思疎通の難しさを感じながらも、共通目標への課題達成に向け、積極的に意見を出し合い協力して問題解決にあたることで連帯感による絆を強め、さらにはその達成感によって自身への自信をもたらしたと考えられる。

以上の結果から交流セミナーが多文化理解 2 に関しても有効であることが確認され、総じ

7) 有意差が見られなかったものの中にはセミナー前後において高い数値を示している項目が含まれている。韓国側では、II. [相手文化に対する態度]がそうであり、日本への関心がもともと高く日本文化の体験を強く希望していた背景を読み取ることができる。このような点も鑑みると、効果が見られなかった項目は 5 項目となり総合的に特定文化の理解が促されたといえるだろう。日本側も同様に 2 項目においてセミナー前後で高い数値が示されており、残りの 8 項目は自国での開催ということで変化が表れにくかったと思われる。また伝統文化体験も日本文化に限ったものであったことが要因として考えられ、双方の文化体験が可能なプログラムの補足が今後の課題としてあげられる。

8) 国籍主効果と交互作用の見られた項目に関する考察は紙面の関係上、本稿では割愛する。

て、交流セミナーが参加者双方に多文化理解の両側面（特定文化の理解と多文化理解態度および能力）を促すことが示唆された。

6. 今後の課題

以上の調査結果および参加者からの要望を踏まえ、より効果的な交流セミナーの今後の方向付けを行うためには、以下の4つの課題が考えられる。

まず第一に、さらなる全体交流や様々なメンバーとの交流の場の設定が望まれる。参加者から「(共同研究) グループの枠を超えた交流」の要望も多く、具体的にはアイスブレイキングの役割も担う文化体験プログラムにおいて多様なグループ編成で臨むことなどが提案としてあげられる。また特定文化の「生活面の理解」を促進するためホームステイや家庭訪問などを日本側で開催する際にも導入し、様々な参加者と触れ合いお互いの関係性を高めるためのプログラム設定が望まれる。

次に、使用言語の検討があげられる。交流の場において、どちらかの言語が使用された場合、対等な地位関係を保持することは難しい。そのため参加者双方の言語による交流学習が最も望ましいと言える。このような言語面の問題はすでに考慮され、教師やTAによる翻訳や通訳のサポートなども試みられてはいるが、今後も日本語のみでセミナーを進行するわけではないという呼びかけを徹底して行うほか、日韓両言語に堪能な通訳や翻訳スタッフを準備するなど、対等性を維持し参加者全員の主体的参加を促す必要がある。

また次に、教師とTAの役割の検討があげられる。互いの文化理解に関して韓国側と日本側では進み具合が異なるため、それに応じた解釈のサポートが必要となり日韓参加者の特性や文化理解度に応じた支援が求められる。さらに各グループや参加者個人によっても必要な支援が異なってくるため、教師およびTAは今後より密接な連携を図り、参加者の特性を把握しながら臨機応変な対応をしていかなければならないと言える。

そして最後に、振り返りの効果的な設定が望まれる。参加者からも各グループでの話し合いの時間や全体討論の拡大の要望があがっており、気づきや発見をより深めたいとの思いが伺える。毎回の実習やプログラムごとに個人・グループ・全体での振り返りの時間を臨機応変に設け、参加者にその重要性をいかに意識させるかも含め、振り返りを十分に考慮した交流学習が望まれる。

以上の課題はアシスタントとして交流セミナーに参加し交流学習の研究を行う筆者自身が抱える課題でもあり、今後もさらなる考察を深めていきたいと思う。

7. おわりに

先述の第6回交流セミナーの特徴で述べたとおり、真の意味での「共通目標による協同作業」が導入されるなどの改善が見られ、交流の環境が整備されたことが多文化理解を効果的に促す大きな要因となったと思われる。今後も発展を続ける交流セミナーに大きな期待を寄せるとともに、今回、参加の機会をいただいたことに心から感謝を申し上げたい

<主要参考文献>

- 石井敏也・久米昭元・遠山淳・平井一弘・松本茂・御堂岡潔編（1997）. 『異文化コミュニケーション・ハンドブック』 有斐閣選書
- 李徳奉（2009）. 「交流法」による多文化理解の効果と限界」『大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」』お茶の水女子大学 pp. 271-275.
- 加賀美常美代（2006）. 「教育的介入は多文化理解態度にどんな効果があるかーシミュレーション・ゲームと協働的活動の場合ー」『異文化間教育』26 異文化間教育学会 pp. 76-91.
- 西田司（1998）. 『異文化の人間関係』 多賀出版
- 西岡麻衣子（2009）. 『多文化間交流学習の理論的枠組みに関する研究-オルポートの「接触仮説」に基づいて-』 同徳女子大学大学院
- 宮本律子・松岡洋子（2000）. 「多文化コミュニケーション能力尺度作成の試み」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』 22 pp. 99-106.
- 八代京子・山本喜久江（2006）. 『多文化社会の人間関係力ー実生活に生かす異文化コミュニケーションスキルー』 三修社
- 山岸みどり（1997）. 「異文化間リテラシーと異文化間能力」『異文化間教育』11 異文化間教育学会 pp. 37-51.
- Allport, G. W. (1954). The Nature of Prejudice. New York : Doubleday Anchor, Books.
(=原谷達夫・野村昭訳(1968). 『偏見の心理』 培風館)

第6回韓日大学生国際交流セミナーの事前活動から 見た交流の様相と今後の方向性 —韓国側の児童教育グループの事前活動の観察を通して—

申恩浄(同徳女子大学講師)

1. はじめに

交流が行われるのにはいつも一人以上の相互主体が関連している。それゆえ、ある教育目的の下で計画的に実施される教育といってもその交流を通して得られる結果、あるいは効果を予測することは容易ではない。なぜなら、交流に参加する人が多ければ多いほどその交流に対する参加者たちの考えや意志、参加形態など、参加者たちの持っている多様な個別的な要因が交流の過程の中で複雑に相互作用をするのである。だからといって、参加者たちの個別性だけを重視しすぎて交流の成功の可否を参加者の自律性に依存すれば、参加者たちはその交流を通じて得られた経験を内在化しにくくなる。

従って、国際的な団体交流において参加者たちの個別性を予測できる類型に分類し、それを調節、補完するためには、教育は交流の各段階の特性を考え合わせた上で行われる必要がある。その中でも参加者の事前活動は、交流から得られた経験を整理して内在化する際、重要な基礎役割をしていると見なされるので、本報告書では第6回韓日大学生国際交流セミナーの事前活動を観察することを通じて交流での教育の役割について考察しようとする。

2. 事前活動の様相

2.1. 韓国側の事前活動の概要

韓国側の事前活動は、面接と口述テストから選ばれた15名の学生たちが4つのグループを組んだあと、日本側の同じグループのメンバーたちとの話し合いを通じて交流活動のテーマを決め、そのテーマと関連している国内調査活動を整理、報告する形で行われた。

出国の2ヶ月前からは毎週事前活動について各グループの全体報告会が行われた。事前活動の進行状況を報告する際は、指導教授や院生のサポーターとの意見交換が進行状況に合わせて段階的に行われた。事前活動の報告会は、大きくテーマ選定の過程、調査活動の方法、調査活動のための事前交渉の方案、事前活動の結果を整理する方法などに分かれて行われ、各報告会では多様な意見交換を通じて事前活動の計画が修正、補完された。また、その過程の中で参加者たちは日本人との交流に対する方向を設定することや交流への事前イメージを構築することができた。調査活動はテーマと関連している人たちをインタビューしたり、アンケート調査を実施したりする方法が中心となり、その他、多様な情報機関の統計資料を調査、要約する方法も並行された。

特に、第6回韓日大学生国際交流セミナーの場合、以前とは違って、ネット上での参加者たちの意見交換や指導教授の講義が聴講ができるようになったことは大きな変化だと言える。しかしながら、このような事前活動をするに際して両学校の学事日程の相違のため日本側との意見交換が円滑に行われなかったグループもあったので、両側の参加者がより実質的に意見や情報を交換するためにインターネットを利用するためには、もっと具体的な方案が必要であろう。

各グループのインタビュー依頼は、参加者たちが自らで行ったが、公文が必要となる場合は、学科事務室の公文発送や指導教師の公式的な依頼要請を通じて行われた。

2.2. 韓国側の事前活動の特性(児童グループの事前活動の参観記録を中心として)

韓国側の児童グループの事前活動は、ソウル所在の日本人学校で実施されている教育の特性及び国際交流プログラムの運営方法についての調査を中心として行われたが、インタビューを依頼する段階から日本人担当先生との相互接触を通じて異文化的な様相を感じることができた。すなわち、インタビューを依頼する段階から異文化的な特性を理論的に考察し、それに基づいて依頼方法を再検討する必要があるということが分かった。この段階で韓国側の参加者には日本人の行政処理過程に対する新しいイメージが構築されることが見られた。

インタビュー調査は、グループメンバー全員が項目別に質問を分けて実施する方式で行われたが、この過程の中では質問する学生の日本語の流暢さによってインタビューに対する緊張感が違ってくることが分かった。また、実際のインタビュー調査を通じてインタビューを依頼する段階でできた日本文化に対する先入観やイメージが再構築されることが見られた。これは、参加者たちが事前活動を整理し、結論を下す過程で重要な役割を果たした。

このように、事前活動には、教師主導の教室教育とは違っていろいろな側面からの自然な発見学習ができる、多様な発達段階が含まれていることが分かった。

3. 考察

児童教育グループの事前活動の観察を通じて、教育というのは参加者たちの事前活動にどのような形態で介入すべきなのかという問題について考えることができた。

第一に、参加者たちは事前活動をしながら異文化に関する経験を共有し、様々な意見交換を通じて結論を整理することにおいて断片的な要因に偏る傾向がよく見られた。これは情報の不足のため多様な側面からの考察が混乱したのに起因している。このような場合は、教師は教育の意図が表面化されない方法で学生たちの多様な思考活動が可能になるようにいろいろな可能性や仮説を提示する必要がある。しかし、結論を整理する過程であまりにも頻りに教師が介入すれば、参加者の自然な発見学習が行われにくくなるおそれがあるので、参加者たちの経験解釈に不十分なことがあってもそれをすぐ否定するよりいろいろな側面からの可能性と情報を提示し、結論を再考する機会を与えなければならない。

第二に、韓国側の参加者たちは、日本語を専攻する学生としてすべての交流活動において母国語でない日本語で意思疎通をしなければならない特性を持っているので、日本語の学習程度によって交流参加への緊張感が違ってくることを考慮する必要がある。なぜなら、このような交流活動を通じて日本語学習に対する動機付けが強化したり、弱化したりするからである。従って、事前準備の段階で参加者たちが自分の日本語能力に対してあまりにも高い緊張感を持たないように、交流の目的が日本語能力テストにあるのではないことを認識させ、自信を持ってもっと活発に交流に参加することができるよう、指導教師やサポーターの積極的な指導が要求される。

4. 終わりに

交流活動を全般的に評価するためには事前活動での経験のみならず、それが実際的な交流を通じてどのように修正、再構築されるかを比較する必要がある。それゆえ本報告書で交流活動における講師の役割を全般的に論ずることには限界がある。しかし、参加学生が国際交流を通じて異文化接触の機会を増やし、意味のある交流を経験するためには、学生たちの持っている多様な個別性の相互作用を予測する必要があるので、指導教師には自分の専攻分野と関連した知識のみならず異文化交流と学生指導に関する多様な知識が要求されていることが分かった。すなわち、国際交流というのが非常に総合的な特性の教育方法であるほど既存の教師の役割が縮小されたというより、専門的な能力がさらに要求されることが分かった。これを補完するためには一人の教師が交流活動の全体をコントロールして行うよりも、参加者たちの交流活動をもっと綿密にサポーターすることができるように、制度的な装置や教師たちの相互協力的なチームティーチングも検討に入れる必要があるだろう。しかしながら、このようなことを実行するためには何よりも行事主体と関連している団体の行政的、経済的な支援が切実である。

第6回日韓大学生交際交流セミナーを振り返って

鄭在喜(お茶の水女子大学大学院生)

今年の日韓大学生交流セミナーは、8月3日から8月6日にわたって、日本の草津セミナーハウスで行われた。本セミナーに日本側のアシスタントとして参加した立場から、今回のセミナーの意義を含め、いろいろと感じたことを振り返ってみたいと思う。

まず、今回のセミナーの一番の実りは、2泊3日の合宿を通してたくさんの交流ができたことであると思われる。また、夏の合宿に向けてお互いの文化を理解し、より良い交流を行うため、4月から韓国の文化や言語に関する授業、そしてパソコンを用いた映像チャットなど、綿密な準備をしていたことも評価される点であろう。このような事前準備があったため、草津での2泊3日は実に充実したセミナーになったと思う。

草津セミナーハウスで行われた今回のセミナーは、「文化」、「女性」、「児童」、「環境」の4つのグループに分かれ、日韓の学生がそれぞれのテーマについて調査した両国の現実情を話し合い、まとめて発表する形で行われた。発表の準備のための話し合いの時間では、すでに事前準備の段階でメールを用いてお互いの意見交換していたため、まとめに向かった活発な話し合いができた。また、お互いに用意した発表資料を見せ合いながら、互いの資料について意見を言い合うなど、全く無駄な時間のない中身のある討論が行われていた。そして、発表の際には単なる報告のみではなく、より良い国際交流のために今の私たちがどうすべきなのかという今後の方向まで提案し合った非常に有益なセミナーであったと思われる。

以上の点を踏まえ、今回のセミナーの意義を考えると、以下の2点が挙げられよう。

まず、きちんとした事前準備があったため、お互いの文化理解の時間が大きく短縮され、関心を持つようになった点である。4月から8月本番セミナーまでの約3ヶ月間を有益に使ったおかげで、8月に行われた日本での歓迎会を兼ねた顔合わせの時にはすでにお互いの名前や顔をみんな覚えていた。また、日本側ではその3ヶ月間、韓国の文化について学ぶとともに簡単な韓国語レッスンも行われていたため、自己紹介の時には韓国語で簡単な挨拶ができていた。このように、お互いの文化や言語を学びながら事前準備をしていたことでお互いを早く、そしてもっと知りたいという気持ちが芽生えたのではないかと思う。

次は、2泊をともにすることで交流らしき交流ができた点である。本番セミナーの前にもうかなり仲よくなっていた両国の学生は、草津までのバス移動の際にも日韓の学生同士で隣に座り、お互いの文化について聞いたり、言葉を教えてあげたりするなど、もっと近づきたい、もっと知りたいといった交流を活発に行っていた。また、泊まる際にも日韓の各グループ同士で一つの部屋を使っていたため、夜遅くまで話し合う光景がよく見られた

のである。このように、2泊3日を充実に使うことによって発表だけではなく、より深くお互いの文化や習慣などを理解し合う時間に繋がったのではないかと思われる。

最後に、今回のセミナーに参加して感じたことを少し述べたい。このようなセミナーは初経験だったが、お互い真剣に向き合おうとしている両国の学生たちを見て交流というものの重要性について再度考えさせられた。ある国の言語を学ぶ際、その国の文化や習慣を理解していないと、文法的には正しくても、何か不自然な文だと言われることがよくある。それほど文化と言語は切り離しては考えられないものであり、今回のセミナーのような交流を通してこそ、相手国の文化や習慣に気づくことができると思われる。

今後もこういった機会があれば積極的に参加し、国際交流というものを言葉だけでなく、行動で実践していきたい。

韓日両国の枠を超えた韓日大学生国際交流セミナー

金榮敏(同徳女子大学)

第6回韓日大学生国際交流セミナーは期待以上の成果をあげることができたと思います。今回のセミナーに参加し、頑張ってくれたお茶の水女子大学・同徳女子大学の皆さんを大変誇りに思います。また、セミナーの事前準備から報告書の完成までほぼ1年がかりの作業を緻密に行ってくださった森山先生をはじめとしたお茶大のスタッフの皆さんに心からお礼を申し上げます。

私は今回のセミナーの成果を次の3点にまとめてみたいと思います。

まず、「交流」の目的を達成したということです。私が韓日大学生国際交流セミナーに同徳側のスタッフとして参加したのは第3回目からです。日本語学が専攻である私には、当初から「交流」というのは、その意味が多少漠然としたものでした。そこで、私なりに「交流」の目的を「相手国・異文化に対する理解を深める」機会にすること、「グローバル時代に生きるための国際的感覚を養う」ための良い体験にすることと考えました。セミナーに参加する学生を指導する際にも、そのような考えをもって臨んできましたが、今回の国際交流セミナーではその目的が達成されたと思います。これは、セミナー終了後、同徳女子大の学生を対象に行ったアンケート調査の結果からも伺えます。「今回のセミナーを通して得られた成果は」という質問に対して、多数の学生から「日本に対する理解を深めることができた」「今まで持っていた日本に対する先入観を捨てることができた」「外国の学生とのコミュニケーションに自信を持つようになった」といった意見が得られたからです。

次は、今回のセミナーを通して、韓日大学生国際交流セミナーが一段とレベル・アップしたということです。今回のセミナーは「地球のために我々ができること」という共通のテーマの下に、<在外外国人の問題>、<食のリサイクルを中心とした環境の問題>、<女性の社会進出>、<外国人児童の適応教育>という4つの問題について、グループごとに事前調査を行い、セミナー期間中に実習・討論・発表・提言をするという形で行われました。グローバル時代に生きる若者たちが抱えている共通の問題は何か、その問題をどのように受け止め、どのように対処していくべきかということを実際に考えてみようということでした。共通のテーマを決めないでグループごとにテーマを決め、調査・発表するという形で行われてきた第5回までのセミナーとは大きく異なった点であります。今までのセミナーでは、韓国・日本ならではの何かを調べて共有しようというのが主な目的でしたが、今回のセミナーでは、調査の対象は韓日両国に限定されてはいたものの、韓日両国の枠を超え、世界を視野において、議論し合い、提言をしてみようとしたのです。両国の大学生間の交流セミナーとしてではなく、世界の大学生間

の交流セミナーとしての第一歩を踏み出すことができたのではないかと思います。次回以降も「世界人としての私」として参加できるセミナーになっていくことを期待しています。

最後に、合宿が定着したということです。第5回のセミナーから取り入れた合宿を、今回のセミナーでは2泊3日にしたのですが、この合宿を通して参加者同士の理解や親睦を深めることができたと思います。

以上のような成果をあげた一方で、いくつかの反省点もありました。まず、日程の問題があげられます。送別会の場で両校の参加者からの指摘もありましたが、討論・発表の時間が十分ではなかったということです。そのため、事前調査、実習などを通してせつかく集めた情報を十分伝えられず、また同じグループ内においてもより深い議論にまでは至らなかったという意見が多数ありました。また、4月から7月までの事前調査・準備の段階で同じグループ内でのコミュニケーションがうまく行かなかったこともあげられます。今回のセミナーでは意欲的に映像チャット・文字チャット・メーリングリストを活用して、参加者間の活発なコミュニケーションを図って見たのですが、技術的な問題・個々人の時間的な問題などが重なり期待通りの成果をあげることは難しかったのです。また、より円滑なセミナー運営のためのスタッフの適切な関与、他のグループとの交流拡大などが今後求められると思います。

以上、簡単ではありますが、第6回韓日大学生国際交流セミナーを振り返ってみました。今回のセミナーの成果や反省点が活かされ、次回以降の韓日大学生国際交流セミナーがより発展し、グローバル時代における韓日両国の架け橋になることを待ち望んでいます。

言語と文化を越え、討論により深められた日韓の絆

森山新(お茶の水女子大学)

今回で第 6 回目を数える日韓大学生国際交流セミナーは、これまで以上に大きな発展と成果が得られた。

第一に、4月から映像、文字によるチャットを用い、グループごとにテーマ、実習内容に関し、事前の打ち合わせ、討論を行ったことである。遠隔での事前交流は前回も行われたが、前回はメールのやり取りが中心であり、交流は決して十分とは言えなかった。今回、十分な遠隔交流を持つことにより、これまで一週間の非常に短いセミナーであったものが、遠隔による交流も含めると数か月に及ぶ交流セミナーとなり、その分、言語と文化を越えた深い交流が実現できた。これまで初顔合わせの場であった初日の歓迎会は、事前の遠隔交流の継続の中で間接的に苦勞をともにしてきたまだ見ぬ友との出会いの場として、今までとはまったく違った雰囲気の中で行われた。事前調査の内容においてもお互いに話し合い、刺激し合いながら、相当のレベルまで深められ、それが討論を活発なものとしてくれた。

第二に、セミナー後半に 2泊3日の草津合宿を加え、寝食をともにしながら、テーマについて、お互いの文化や考え方について、とことん話し合う時間が持てたことである。前回の韓国で行われた第5回のセミナーでは1泊2日の合宿を加え、研究発表型から体験型のセミナーへと、セミナーのゴールを大きく変え、大きな成果を上げたが、今回はさらに合宿を2泊3日にふやし、セミナーがめざすゴールも単に体験をともにするものから、討論を通じ積極的に相手と関わり合い、理解し合うものへと変えた。その結果、お互いの考え方や文化に深く触れ、理解し、学び合う機会が与えられることとなった。合宿最後にはそれまでの交流ですっかり親しくなった両国の学生が草津の街を手を取り合いながら歩き、一緒に温泉につかったり、別れを惜しんで夜遅くまで話し合う姿が見られたりした。またこれまで日本の学生はなかなか韓国語を学ぶまでには至らなかったが、今回は合宿の行き帰りのバスの中で韓国の学生から一生懸命韓国語を学ぶ光景が見られたり、最終日の見送りの時に韓国語で書いた色紙を手渡したりするなど、相手の文化や考え方だけでなく、言葉についても自ら学ぼうという姿勢が見られたのは傍で見ていて感動的であった。来年度韓国に交換留学を決心した学生も現れた。

第三に、今回は歓迎会、文化体験教室、合宿、送別会などの運営を学生たちに委ねたことである。これにより、大学、または教員が企画したセミナーに受身的に学生が参加するのではなく、国際交流セミナーの成功のため、自らが考え、準備、運営することとなり、参加する学生の姿勢は格段に主体的、積極的なものとなった。それぞれの企画では学生が司会となり、自ら合宿のパンフレットを作るなど、随所に学生のアイデアがちりばめられ、

より内容のあるセミナーを作り上げることができた。日韓の学生が力を合わせ一つのセミナーを成功に導いた経験は、グローバル時代に世界を舞台に生き、活躍する彼女らに貴重な経験となったと確信している。

第四に、事前学習において、日本の学生たちが韓国の歴史や文化、悲しい日韓関係史についても学びセミナーに臨んだことである。これは教員の側で企画したものではなく、学生の中からぜひ教えてほしいと要望されて行われたもので、こうした知識を得たことで、過去を乗り越え未来に繋がる交流、長い歴史の中で大切にされながら育まれてきた相手文化を尊敬しあう交流とすることができた。

帰国の途に着く韓国の学生を見送る学生たちの数は例年にも増して多く、涙を流しお互いに抱き合いながら再会を誓う彼女らの姿を見ながら、私たちスタッフもそれまで数か月間にわたり、セミナーの舞台裏、学生の後ろ側で積み重ねてきた苦労が一瞬にして癒される思いであった。

日韓の出会いはグローバルな今日にあっては、小さな一歩かもしれない。しかし無限の可能性の扉を開く貴重な一歩となったと確信している。



**グローバル時代に世界のため、日韓が共同でできること
～2009年第6回 日韓大学生国際交流セミナー報告書～**

発行年月日 2010年1月31日

発行 お茶の水女子大学グローバル教育センター・グローバル文化学環

住所 〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

電話&FAX 03-5978-5965

<http://jsl.li.ocha.ac.jp/index.html>

発行協力 同徳女子大学外国語学部日本語学科

住所 〒134-714 ソウル特別市城北区月谷洞 23-1

電話 02-940-4370 FAX 02-940-4191

編集 森山新、水口里香（お茶の水女子大学）

印刷 よしみ工産



第6回日韓大学生国際交流セミナー